



Osaka
University
Forum
on
China

戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』の
デジタル化と公開の可能性

東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録

堤一昭・田中仁 編

OUFC
BOOKLET
vol.7
2015/3

OUFC BOOKLET

Vol.7

戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』の デジタル化と公開の可能性

東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録

堤一昭・田中仁 編

目次

はじめに.....1

報告

報告

石濱純太郎と石濱文庫:整理・調査・研究の現状
.....堤一昭 5

報告

近年の内モンゴルにおける「満蒙」関係資料研究の現状
.....周太平 15

報告

『蔣中正總統檔案』にみるモンゴル情報
——『革命文献拓影 戡乱時期(政治-辺務):蒙古』の紹介
.....吉田豊子 27

報告

内モンゴル近現代文学研究からみた『フフ・トグ』紙
モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ.....内田孝 37

報告

東洋文庫所蔵の近代中国資料のデジタル化事業について
.....相原佳之 65

討論.....75

研究

研究

《青旗》報關於成思汗廟的記載

----- 娜仁格日勒 97

研究

滿洲国期・興安地域における医療衛生事業の展開----- 鉄鋼 105

執筆者・報告者----- 125

あとがき----- 126

はじめに

2014年12月20日(土)、研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性」が、大阪大学豊中キャンパスの豊中総合学館で開催された。13時から17時過ぎの間、5人による報告(一人あたり30分)と参加者との質疑応答を含めた討論(60分あまり)が行われた。また時間を設けて大阪大学総合図書館に移動し、新設の貴重コレクション室に保管されている『フフ・トグ(青旗)』の原紙および複写、CDに収められた画像などを閲覧した。

このブックレットには、当日の報告にもとづく論考5篇と討論の書き起こしを収めている。5人の報告は、いずれも『フフ・トグ(青旗)』ほかの近代東北アジア史資料の整理・調査、デジタル化や公開に関わる研究状況をあつかったものである。加えて、研究セミナー参加者による『フフ・トグ(青旗)』に関わる研究2篇を収めた。

『フフ・トグ(青旗)』は、戦前期の1940年代前半に満洲国で発行されていたモンゴル語の新聞である(全178号)。時代の転変の中で散佚したため、大阪大学の石濱文庫が所蔵するほぼ全号(5号分のみ欠)は、大変貴重である。これまでも、その資料的価値は国際的に注目されてきた。

石濱文庫は、東洋学者・石濱純太郎(1888年~1968年)旧蔵のコレクションである。大阪外国語大学附属図書館(現在の大阪大学箕面キャンパスの外国学図書館)に収められていたが、2014年秋に他の貴重図書ともども、大阪大学豊中キャンパスの総合図書館に移転した。

本ブックレットに報告・研究を寄せている周太平、内田孝、娜仁格日勒の三氏は、早くから石濱文庫の『フフ・トグ(青旗)』の資料価値に注目し、調査・研究を進め、公開の方法も検討してきた。一方、鉄鋼氏も『フフ・トグ(青旗)』を全面的に利用した修士論文を平成26年度に提出している。堤一

昭は石濱文庫の拓本資料から調査・研究を始めるとともに、資料の多様さに応じた研究者・グループのネットワーク作りや保存、公開の方向性を模索していた。これらの動向に注目した田中仁氏は、NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点（政治史資料研究班）主催で本研究セミナーを企画された。

本セミナーには、石濱文庫の受け入れや、『フフ・トグ（青旗）』の調査・研究初期の状況を知る橋本勝、西村成雄両氏をはじめ、40名あまりが参加した。本ブックレットの「討論」にも載るように、参加者から多くの有益な情報・意見が寄せられた。参加者の皆さまにあらためて厚く御礼申し上げます。

なお、総合図書館、外国学図書館の関係者には、セミナー当日の『フフ・トグ（青旗）』の閲覧をはじめ、協力・配慮をいただいていた。石濱文庫は、大学、図書館の広報誌でも紹介され、懐徳堂文庫と並ぶ大阪大学の貴重なコレクションとしても注目されている（『阪大NOW』No.137, 2013年7月。『フフ・トグ（青旗）』の紹介あり。；『大阪大学図書館報』48巻2号, 2015年2月）。

本セミナーのタイトルに掲げた「デジタル化と公開」は、「可能性」から実現に向けて第一歩を記したばかりである。今後もこの事業の進展を見守り、ご助言いただければ幸いです。（堤一昭）

報告

石濱純太郎と石濱文庫：整理・調査・研究の現状⁽¹⁾

堤 一昭

1．石濱純太郎とその研究

石濱純太郎(1888-1968)は、漢学から東洋学へ進んだ第一世代の東洋学者たち、那珂通世(1851-1908)、内藤湖南(1866-1934)らに続き、大正から昭和戦後期にかけて活躍した第二世代の研究者である。石濱は内藤湖南に師事したが、直接の受業生ではないため“外様大名”と自称し、また自他共に“町人学者”とも称した⁽²⁾。彼は、当時の東洋学で最先端の分野であるモンゴル語・西夏語・ウイグル語の文献研究、敦煌学などの“草分け”の一人であった。手がけた諸分野は、彼から影響を受けた次の世代に開花したといえる。西田龍雄の西夏文字解読、藤枝晃の敦煌学、大庭脩の江戸期漢籍輸入・受容の研究などがあげられよう⁽³⁾。

2．石濱文庫のこれまで

現在までの石濱文庫の歴史には3つの時期がある。各時期と注目すべき事項をあげたい。

第一は、1968年の蔵書受け入れから『石濱文庫目録』(1979年)の刊行までの時期である。大阪外国語大学に受け入れられるにあたって、純太郎長男の恒夫とその友人司馬遼太郎の関わりが大きかったと伝えられる。また蔵書の一部でなく、すべてを受け入れたことは文庫の特徴である。石濱の学問を反映して多言語にわたる図書・雑誌等の整理には時日がかかったが、1979年に索引まで備えた文庫目録が刊行された。ただ、受け入れはされても目録には載せられなかった整理途中・未整理の資料も多く残されたのである。

第二は、大阪外国語大学が上本町から箕面キャンパスに移転した1979年からの時期である。25年にわたり「石濱文庫記念学術講演会」が計13回開催され、これが文庫関連の主な事業となった。ようやく1997年度に整理途中・未整理の資料の仕分けが行われ、およそ約13,000点あることが判明した。書簡類の整理などが開始されたが未完のままとなった。

第三は、2004年の「国立大学法人化」前後から現在にいたる時期である。法人化に際して貴重図書問題専門委員会が設けられ、石濱文庫を含めた貴重図書の再検討が始まった。筆者が石濱文庫資料の調査を開始したのも、この委員となったことがきっかけだった。外大・阪大の統合後、文庫目録の刊行30周年を記念して2009年に「石濱文庫記念講演会」が開催された⁽⁴⁾。2009年度には洋書、2010年度に漢籍が全国データベースに参加し、検索可能になった。2011年度から大阪大学附属図書館「研究開発室」の課題対象資料に石濱文庫が追加された⁽⁵⁾。2014年度には、豊中キャンパスの総合図書館C棟改修工事により貴重コレクション室が設けられ、箕面キャンパスの外国学図書館(旧大阪外大図書館)の石濱文庫を含む貴重書が移された。

3. 石濱文庫の特色

a. モンゴル語・満洲語・ウイグル語・チベット語に関する資料

この種の資料が多いことは外山も指摘する。蒙漢・満漢など漢語とのバイリンガル図書については、文庫目録の「漢籍の部」に載る。それ以外、モン

ゴル語・チベット語の仏典，満洲語・チベット語バイリンガル文献などは，その一部の写真が文庫目録の「写真の部」に載せられているが，専門研究者による整理，概要の把握を待つ段階である⁽⁶⁾。

b. 「いわゆる俗書（“ゲテもの”）」

外山は「当時の京大（帝大）などでは購入をはばかりる種類の書物には，とくに目をかけて集めている」と指摘するが，具体的にどの図書かは挙げていない。ただ目録記載・未載を問わず，稀少・重要な資料の再発見は今後もあるだろう（以下に言及する *Барса* など）。

c. 拓本資料

約 1300 枚ある。中国龍門石窟の造像記が 3 分の 2 を占める。書道史上の名品をはじめ，1935 年の満蒙史蹟調査“羽田ミッション”で採拓されたモンゴル語・漢文バイリンガル碑文等の拓本一式など学術的価値の高いものが含まれる。種類別の整理まで完了したが，全体の目録はまだ作製されていない⁽⁷⁾。

d. 写真資料など

印画紙焼き付け写真が主で，ガラス乾版・フィルムは少ない。アルバム「石瀨文庫写真集」1～23 巻に貼りつけられたものは，部分的にキャプションを書き込んだ付箋が付されており，それら等により概要目録のみは作成した。華夷訳語（乙種・丙種），西夏文仏典ほか漢語も含む諸言語典籍資料の写真が大部分である。龍門石窟旧状写真 100 枚⁽⁸⁾も含む。そのほか未整理の写真が多数ある。なお文庫目録編纂時に「1570 cut」撮ったというネガフィルムも現存するが，大部分は資料の部分写真のようである。

e. 書簡

差出人（1471 名）別に整理済のはがき 6294 通のほか，書簡が約 5000 通あると推定されているが，段ボール箱内に散在している書簡もあり，全容はまだ把握されていない。ニコライ・ネフスキー，石田幹之助ら，桑原隲藏および友人の画家・小出櫓重に関わる書簡のみは研究がある⁽⁹⁾。

f. 20世紀前半の日本・アジア関係史資料

今後注目されるべき資料群は、20世紀前半の日本と東北アジア、東南アジアの関係史に関わる多言語資料である。整理途中・未整理状態のものも多い。まずは移転後の書庫コレクション室内での資料の所在と概要を調査する必要があり、多言語・多分野にわたる専門家の連携・協力が不可欠となる⁽¹⁰⁾。本日の研究セミナー（「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』のデジタル化と公開の可能性」）に関わり、二つ例示する。

第一は、*Köke tuy* 『フフ・トグ（青旗）』のほか、奉天・新京・張家口・フレーで発行されたモンゴル語新聞である。*Köke tuy* は、1940年代前半、満洲国で日本が関わった文化・民族政策と民族の関係を知りうる資料であり、ほぼ全号が揃うのは世界的に見ても石濱文庫のみである。原紙のほか、ゼロックスコピー、マイクロフィルム、マイクロフィルムから焼いたCDなどのかたちで、また付録のカレンダー2枚（“チンギス・カン像”，タンカ）も保管されている⁽¹¹⁾。これらの新聞の保存・公開・学術利用への展望を拓くのは、所蔵者の責務だろう。

第二は、A. パラーノフ 『バルガ（*Барга*）』（1912年）である。本書は、ロシアの中東鉄道警備隊がハルビンで刊行した、ホロンボイルのバルガ・モンゴル族について書かれたロシア語の報告書である。辛亥革命後の独立運動などの状況を意識して書かれたものと田中克彦は指摘している⁽¹²⁾。田中はほかに、石濱文庫のシベリア地域の民族問題に関わる資料として、イディッシュ語新聞 『*Биробиджанер штерн*（ピロビジャンの星）』1937年、『*Вольная Сибирь*（自由シベリア）』1927～1928年の存在も紹介している⁽¹³⁾。

g. その他

石濱自身の研究ノート・メモ・原稿類は、いまなお整理を待つ状態である。内藤湖南のヨーロッパ調査旅行（1924～25年）に石濱が随行した際の、石濱のパスポートやヨーロッパ各地の絵はがき類も同様である⁽¹⁴⁾。

4 . 整理・調査・研究の現状

石瀆文庫資料の保存とデジタル化による公開・学術利用にむけては、ようやくスタートラインに立ったというのが現状である。すでにマイクロフィルム化、電子ファイル化したものはごく少数で、上記の *Kōke tui* などのモンゴル語新聞のほかは、和書の稀覯書（慶長刊本、森立之自筆写本など）のみである。

保存と公開の面では、今年 2014 年秋に豊中キャンパスの総合図書館に移転した石瀆文庫ほかの貴重資料には、移転前からの基本的な課題もある。外国学図書館の貴重書庫内で分散して置かれていた状態をまずはそのままの形で移転した図書・逐次刊行物・諸資料を、請求番号の順やまたは資料の種別によって再排架することが公開のために必要である。また写真、拓本、書簡の資料を適切な保存専用用具による保管方法に改めていくことも重要である。

公開と学術利用の面でモデルとなる大阪大学での先行例には、機関リポジトリ「大阪大学学術情報庫 OUKA (Osaka University Knowledge Archive)」での貴重書公開、文学研究科の付属施設「貴重資料室」の収蔵資料画像 DB（ただし研究科内限定）、総合学術博物館の「本学各部局所蔵の貴重資料」サイトでの画像公開がある。

科研「東洋学学術資産としての石瀆文庫の基礎的研究」

筆者が 2004 年度以来行ってきた石瀆文庫の再調査、平成 23、24 年度の大阪大学文学研究科共同研究の蓄積を経て、今年度から取り組んでいる研究計画である（科研基盤（C）、平成 26～28 年度。代表：堤，3,400 千円）。現在の研究状況から見て学術的価値の高い資料群（拓本、写真・ノート他、重要・稀覯図書、雑誌・新聞）について調査し、全容の目録作成とその中の貴重資料のデジタルアーカイブ化にむけての整備をおこなうことなどを目的とする。

本研究計画では、言語を含め資料の多様さに応じた研究者や研究グルー

プとのネットワーク作りが不可欠であり、本日の研究セミナーもその一環である。今後は、資料公開に際して著作権・公衆送信権の問題をクリアするために、知的財産権をめぐる法制度と法曹実務に明るい専門家の協力を得る必要も出てくるだろう⁽¹⁵⁾。

最後に二点、これまで述べてきた以外で、今後の石濱文庫資料の研究で注意すべき事項を挙げておきたい。第一は、大阪大学の懐徳堂文庫、関西大学の内藤文庫、泊園文庫の研究との連携が不可欠ということである。石濱文庫を含めた4つの文庫は、江戸時代からの大阪の漢学から東洋学への発展をたどり得る点で重要なコレクションである。しかも石濱純太郎はその全てに深く関係し、特に泊園文庫の研究と石濱文庫の研究は密接に関わると考えられる⁽¹⁶⁾。また懐徳堂文庫、内藤文庫、泊園文庫は、資料保存とデジタル化による公開において先行しているためでもある。

第二は、国文学研究資料館が現在進めている「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」(大阪大学も参加)への関わり方を考える必要があることである。この計画では「近代以前(江戸時代末まで)に、日本人によって書かれた書物」を対象とする。石濱文庫には、これに該当する資料が約650点あると考えられる⁽¹⁷⁾。

注

- (1) これまでは「石浜」「石濱」の表記が混在していた。本稿では、過去の出版物も含めて、本来の表記の「石濱」に統一する。本稿は2014年12月20日の研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性」での、表題の報告を文章化したものであるが、先行する「石濱文庫資料調査・研究の過程と展望」(『東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』平成24年度大阪大学文学研究科共同研究・研究成果報告書、pp.23 - 34)と部分的に内容が重なる前半1, 2については簡略に記す。
- (2) 青江舜二郎『竜の星座 - 内藤湖南のアジア的生涯』中公文庫、1980年、pp.287 - 288。藤枝晃「町人学者・石濱純太郎」『図書』(岩波書店)234号、1969年2月、pp.30 - 33。後者は、内藤湖南「大阪の町人と学問」(『日本

- 文化史研究』全集第9巻所収)を下敷きにして書かれている。
- (3) 西田龍雄「石瀆先生の蔵書をめぐって」(大阪外国語大学附属図書館)館報』No.2, 1975年2月, pp.4-5。前掲藤枝晃「町人学者・石瀆純太郎」。大庭脩「『江戸時代における唐船持渡書の研究』あとがきより」吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集』2010年, pp.332-335。
 - (4) 講演者の田中克彦と筆者の紹介した石瀆文庫資料は、いずれも文庫目録に載らない整理途上・未整理の資料であった。『大阪大学附属図書館報』vol.43 no.3, 2010年3月, pp.1-6 参照。(<http://www.library.osaka-u.ac.jp/publish/kanpou/170.pdf>)
 - (5) 研究課題の一つに「貴重資料など所蔵資料の保存,公開,データベース化及びその利用に関する調査(懐徳堂,適塾資料,各種文庫資料など)」がある。筆者が石瀆文庫資料担当の室員となった。
 - (6) 2014年度に総合図書館貴重コレクション室に移された外国学図書館(旧大阪外大図書館)からの貴重書には、石瀆文庫以外にも貴重な満洲語文献が含まれる。著名な松筠『百二十老人語録』の他、『庫倫事宜』,乾隆五十二年七月の「將軍五部行文檔」,乾隆期からの満漢文誥命3通など,これらも含めた調査の必要がある。
 - (7) これまでの調査・整理分については、拙稿「石瀆文庫の拓本資料 概要とモンゴル時代石刻拓本一覽」『大阪外国語大学論集』第35号,2006年, pp.181-192;「石瀆文庫拓本資料調査の概要-2006年度前半まで-」『13,14世紀東アジア諸言語史料の総合的研究—元朝史料学の構築のために—』2007年, pp.131-138;「大阪大学附属図書館所蔵 石瀆文庫の隋唐時代墓誌拓本」『待兼山論叢』第48号文化動態論篇,2014年, pp.1-17 参照。
 - (8) 藤岡穰「石瀆文庫の龍門石窟写真について」『石瀆文庫の学際的研究—大阪の漢学から世界の東洋学へ—』平成23年度大阪大学文学研究科共同研究・研究成果報告書,2012年, pp.7-8。ニコライ・ネフスキー関連の資料写真も「石瀆文庫写真集」および未整理の写真資料の中に含まれる。
 - (9) 飯塚一幸「石瀆文庫の書簡類の整理をめぐって」前掲『石瀆文庫の学際的研究』p.4;生田美智子『資料が語るネフスキー』2003年;加藤九祚『完本 天の蛇 - ニコライ・ネフスキーの生涯』2011年;前掲『東洋学者・石瀆純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』資料篇;拙稿「石瀆文庫所蔵の桑原隲蔵書簡」『待兼山論叢』第46号文化動態論篇,2012年, pp.1-20。『小出楢重の手紙—石瀆純太郎宛書翰集—』大阪市史料調査会,2012年。
 - (10) 大正初年から始まる石瀆の学術活動前半と重なるこの時期に、彼がどのような手段で資料を入手したのかという観点からの調査も必要である。

漢語（漢語とのバイリンガルを含む）の図書・逐次刊行物は、文庫目録で「漢籍の部」の「新学部」(pp.171 - 197)に収録される。未整理資料には、たとえば日本占領期のフィリピンにおける日本語教育用の教科書（タガログ語か？）と思しき冊子などがある。

- (11) *Köke tui* は、石濱文庫にほぼ全号揃うが5号分欠号。日本では他に東京外国語大学に数十部（石濱文庫の欠号を補う号あり）、京都大学人文科学研究所に創刊号から41号の所蔵があることが知られる。くわしくは、周太平、内田孝両氏の報告参照。これらの新聞の歴史的背景は、広川佐保「1940年代の日本の対内モンゴル政策と『フフ・トグ』紙」、『日本モンゴル学会紀要』第28号、1997年；同「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」、『環日本海研究年報』14、2007年；同解説『満洲国期におけるモンゴル語刊行物：復刊『モンゴル・セトゲール』『スンソゴル』『ヒンガン』』、新潟大学環東アジア研究センター、2013年を参照。小野寺史郎「現代中国研究センター配架図書に関する二、三の覚書」、『人文』第61号、2014年を参照。付録のカレンダーについては、拙稿「チンギス・カン画像の“興亡”」前掲『石濱文庫の学際的研究』pp.21 - 37。小長谷有紀「チンギス・ハーン崇拜の近代的起源」、『国立民族学博物館研究報告』37-4、2013年、pp.425 - 447参照。
- (12) *Барга : издано съ разрѣшенія начальника заамурскаго округа отдѣльнаго корпуса пограничной стражи при содѣйствіи штаба сего округа / А. Баранов , Харбинь , 1912 , 59 p. , [4] folded leaves of plates : maps (some col.) ; 26 cm [請求記号 292.25/B21b]*。田中克彦『ノモンハン戦争 モンゴルと満洲国』岩波新書、2009年、p.44。中東鉄道警備隊の正式名称が「独立国境警備軍団ザアムール管区」（麻田雅文「中東鉄道警備隊と満洲の軍事バランス：1897-1907年」、『スラブ・ユーラシア学の構築』研究報告集』17、2006年、p.87）。
- (13) 前掲『大阪大学附属図書館報』vol.43 no.3、2010年3月、pp.3-4。
- (14) 石濱の東京帝国大学での卒業論文「欧陽脩研究」の他、大学出講時の資料や石濱家家政資料もあるが未整理。
- (15) これらの問題は本科研計画だけでなく、本研究セミナーの共催者「21世紀課題群と中国」（大阪大学未来研究イニシアティブ）での、東アジア地域研究に関わる多言語の複合的学術資産活用モデルを導き出す研究計画の一部に位置づけられている。
- (16) 石濱は懷徳堂文庫の事業運営委員の一人となった（1950年）。石濱が運営にも尽力した漢学塾・泊園書院の資料（泊園文庫）が関西大学に入るにあたっては、教授であった石濱の与るところが大きかったと考えら

れる。また泊園文庫には、石瀆文庫の研究に不可欠な『泊園』(1927～1943年)を所蔵する。逆に石瀆文庫に泊園書院関係資料の所蔵もある。内藤文庫(内藤湖南と長男の内藤乾吉の蔵書)の書簡類などの研究は、石瀆文庫の書簡資料研究の参考になり得る。

- (17) 和書では約370点、「G 國書」(日本人が漢文で書いた書籍)では約280点。いずれも近代以前と推定される写本を含む概数である。国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録DB」には、これらは現在加わっていない(懷徳堂文庫の和書も同様)。なお、大阪大学の外国学図書館所蔵の「旧分類(大阪外国語学校、および附設の第五臨時教員養成所の旧蔵書)」にも対象資料が相当数あることにも注目すべきである。現在は和装本として一括されて排架され、和書・漢籍が混淆している。ここには、清末民国初に北京で出版された『天方詩経』ほか、ムスリム漢文文献37点、多数の満洲語文献もあり、調査が必要である。また研究史上で著名な、内藤湖南が1906年に奉天で自ら異同を書き込んだ『蒙古源流』漢文版もある。

近年の内モンゴルにおける「満蒙」関係資料研究の現状

資料保存・活用の取り組みの現状と課題

周太平

今日は「近年の内モンゴルにおける“満蒙”関係資料研究の現状」という課題をお話しますが、まず、中国全体の状況を紹介して、そのあと内モンゴルの状況についてお話をいたします。

まずハンドアウトの「一」で、戦前期満蒙社会関係資料（文化財）に対する位置づけにおいて、日中間で「溝」があるということです。「文化財」というのは私の見解ですが、「溝」というと、ちょっと分かりにくいかもしれません。日本では、「満蒙」とか「満洲国」をテーマとする研究成果は非常に多いし、関係資料の復刻や出版も良好で、閲覧の機会も増大しています。とくに、デジタルアーカイブ・プロジェクトも進んでいるようです。これに対して中国では、関係資料の保全・復刊や「満洲国」に関する研究はごく一部の専門家の間で進められているにすぎません。また資料の閲覧環境は大きな変化はありません。それはなぜかというと、20世紀の満蒙地域に対する歴史が、中国の歴史意識のなかで、絶対的なマイナスの遺産として位置づけられてきたからです。とは言え、歴史研究において、中央政府から独立した地域政権として強調されることも不可能ではありません。しかしながら、それは中国の政治的イデオロギーからみれば、デリケートな問題であるわけです。ここに根本的な問題で「溝」が生じる所以があると考えられます。

1990年代、一部の専門家たちがこれらの貴重な資料の整理・研究の必要を提起し、1996年に「中国近現代史史料学会満鉄資料研究分会」（会長李新、顧問季羨林）が成立、97年に「満鉄資料整理研究プロジェクト」（1997年）がスタートしました。

それ以前の状況を見ると、1990年代以前のものとしては、つぎの三つの業績をあげることができます。第一に『中国科学院図書館現存旅大図書館資料目録』（8冊、満鉄調査部蔵書、ガリ版謄写版、1958年）。第二に『満鉄史資料』で、活版印刷で約30冊発行しました。第三に『東北地方文献聯合目録』（第二輯・外文部分）で、大連図書館が作成した目録集成です。

1990年代なかば以降のものとしては、ハンドアウトに記載した一覧をご覧ください。

1990年代なかばから進められた研究については、目録が集成的に作成されたことが重要な成果として評価されています。とくに、『中国館蔵満鉄資料聯合目録』が代表的な成果です。10余年にわたって400人以上の専門家の共同研究による成果であり、全30巻です。各巻100万余字、総計3000万余字に達します。34万種の文献資料の目録と索引集大成です。

じつは、満鉄資料研究はそういった「溝」を乗り越える一つの試みとして、日本と中国の専門家による共同作業が行われました。たとえば『旅大図書館資料目録』（1958）の作成に日本人学者も参加したと言われてはいますが、遼寧省档案馆などと長期間にわたって連携を有していた日本の研究者も少なくありません。また、『上海図書館総目』や『張家口図書館目録』も大阪の万国博覧会記念協会の援助のもとで完成できました。ここでは、遼寧省や吉林省さらに広西師範大学出版社などの研究者・スタッフが、学問の自主性を重視した結果であると思います。

目録類の作成は進みましたが、問題は、原資料の出版はどの程度実現できるかということです。さらにもう一つの重要な問題はインターネット事情であり、日本や台湾などの海外からデジタル档案資料の閲覧について、実際に非常に不便です。これは内モンゴルの個別の事情かもしれませんが、Gメールやグーグル検索を行うことができません。

つぎに、内モンゴルの状況についてお話しします。インターネットを用いた資料閲覧について、内モンゴルの状況は中国のどこの地域よりも遅れているように思われます。すなわち、自治区にある 112 の公共図書館のうち、歴史資料のデジタル化環境を有している図書館は一つもありません。満蒙関係資料の保存状態について言えば、以前、私たちの学生時代は非常によかったと思います。当時は日本語を読めるスタッフが多かつたし、満蒙関係資料も重要資料として大切に保管され、配架場所も工夫されていました。現在、世代交代によってこれらの資料に対する関心が薄れ、破損や紛失、さらに不用資料として廃棄されることも珍しくありません。検索索引や目録作成もまったくできておらず、1960 年代に作られた手書きの目録は失われました。たとえば、以前、戦前に日本人学者が作成した「上都」についての調査資料がありましたが、数年前、世界遺産の登録申請に使おうとしたものの、探しだすことはできませんでした。「上都」とは、モンゴル帝国のクビライが、モンゴル高原南部（現在の内モンゴル自治区のシリングル盟正藍旗南部）に造った都です。この調査資料は、日本語で書かれた大変貴重な資料です。結局、このような貴重資料まで失われてしまいました。フフホトだけでも約何百人の図書館関係者がいるにもかかわらず、資料の保全には大きな問題が存在しています。

近年、図書館関係者の作ったものとして、*Dumdadu ulus-un erten-ü monggol nom bicig-un yeringkei garcağ*（中国蒙古文古籍总目）、3 vol., Begejing, 1999；『内蒙古自治区線装古籍聯合目録』（3冊、北京図書館出版社、2004）という目録があります。ここに収録されているのはモンゴル語と漢籍ですが、さらに十数万種類の日本語やロシア語などの膨大な資料も貴重な文化財と見なす必要があります。モンゴルの歴史は、外国語の文献によって研究され構築されてきました。13 世紀のモンゴル帝国の歴史研究に関わる唯一のモンゴル語文献は、『元朝秘史』すなわちモンゴル秘史です。それも漢字転写で、最初に書かれたウイグル式モンゴル文字のテキストは、いまだに見つかっていません（最近チベットで発見されたというウワサがありました）。

ここに一冊の図書館関係の有益な書物があります。すなわち『内蒙古旧報

刊考録 1905-1949』(トウイメル編)のことで、これは、ひとりの専門家によるまったく個人的興味に基づく編纂作業で、最初は 1987 年に内部印刷という私家版にすぎませんでした。じつは、『フフ・トグ』紙もまた、同書から知られるようになりまし(日本の研究者のあいだではすでに知られていたのかもしれませんが)。

このような事情から、モンゴルに関してなぜ日本語の資料や日本側による事情が多かったのかについては、歴史的に考察する必要があります。

近代内モンゴルの歴史は、日本を抜きにしては語れません。近代日本は大陸進出を強めて、内モンゴルの全体に大きくかかわっていきました。満洲国の領土の半分以上がモンゴル人の土地であり、モンゴル人の従来土地と彼らの独立要求があったことで、その新国家の樹立にあたって、モンゴルの「蒙」を国名の一部として入れるという案が最初からありました。しかしながら、実際の新国家樹立にあたって、なぜモンゴル人の期待に沿ったかたちで実現できなかったのか。ここにひとつの矛盾があったのですが、それでもモンゴル人のために特別な行政区域や高度自治機関を認め、設置しました。西部内モンゴルでは、このような事情はもっと明確です。徳王政権とか蒙疆政権とか言いますが、それは日本の影響のもとで、1936 年に蒙古軍政府、1937 年に蒙古聯盟自治政府、1939 年に蒙古聯合自治政府、1941 年に蒙古自治邦と名称は変化したものの、最終的にはほとんど独立政権になっていて、独立国家の体制をとっていました。

このような歴史的事情からみますと、当時の関係資料は、モンゴル近代史・内モンゴル地方史を研究するうえで絶対的に重要であり、不可欠な一次資料です。

これまでの大学の歴史系教員の社会的役割といえば、地方史の編纂が代表的でした。旗誌(部族誌)の編纂や文化財の認定、民俗調査、歴史資料の保全に果す社会的役割が、内モンゴル地域の大学の歴史系教員に課された新たな使命であると強く感じています。その際、一番の課題は歴史資料の保全です。毎年 7~9 月、私たちは地方でフィールドワークを行います。そこで実感することは、いろんな歴史や文化の伝統が消滅する危険性

が目の前で生じていることです。たとえば、モンゴルの伝統的な乳製品加工・乳文化と製菓・チベット医学要素などはともに減少の一途を辿り、その知識、技術や資料が失われようとしているということです。これらの状況をみて、私たちは、力をつくしてモンゴル医学博物館の設立を実現したわけであります。

歴史資料の保存や学術的活用については、さまざまな可能性や課題を考慮する必要があります。確かに、歴史的価値がある資料をできる限り保全しなければならないということは、私たちが直面する課題です。しかしながら、実際には具体的に解決すべき問題も少なくありません。たとえば、文献資料の場合、復刻出版にあたって法的問題の検討が必要です。たとい商業的利益を得るために出版するわけではなく、社会的活用を実現することが目的であるとしても、著作権など知的所有権の問題をクリアしなければなりません。

さらに、原資料そのものの形状を勝手に変更しないという原則も重要です。しかしこのことは、さまざまな技術的問題にぶつかることとなります。出版社の事情は、中国と日本とおおいに異なります。とくに内モンゴルの出版社は、技術の面で安心できません。復刻版では、原本の形状を再現しデザインや彩色もそのまま復元するなどの配慮が必要です。北京や上海の出版社は信頼できますが費用が高く、随意に連絡するには不便です。

さらに今後のデジタルアーカイブ化を構想する際、デジタル化になじまない資料の保存などにどう対応するか、たとえば実物資料や個人情報を含む資料をめぐる問題があります。

私たちが近年行った事業は、次の三つです。

第一に、出版プロジェクトで復刻版の刊行です。『内蒙古外文歴史文献叢書』（日本語文献、200巻）は、内モンゴル大学出版社から2012年に刊行を開始しました。

第二に、連合目録の作成準備です。内モンゴル自治区図書館・内モンゴル大学蒙古学文献中心・内モンゴル社会科学院図書館・内モンゴル档案館に協力を求めて、『内モンゴル館蔵戦前期満蒙関係資料目録』の作成を準備して

います。

第三に、『フフ・トグ』紙の復刻出版の企画です。同紙の索引要目を作成するとともに、デジタル化を展望しています。

ここで『内蒙古外文歴史文献叢書』の「序文」についての事情を紹介し、さらに満蒙関係資料の特徴を簡単に述べてみようと思います。すなわちそれは、私たちがなぜ当時外国人が作成した歴史資料を重視し研究しようとしているか、ということです。

重点プロジェクトとしての『内蒙古外文歴史文献叢書』は、各方面との交渉を経てようやくスタートしました。復刻版の「序文」はとても重要です。日本帝国主義の侵略批判をくり返し述べてもあまり意味はないのですが、それでも出版物の審査当局に提出する書類においてこの叙述は必須ですので、そのことをふまえて、執筆にあたってかなり工夫しました。そこで私たちは、資料の学術的意味を強調することにしました。

人類の歴史と文化は、民間に受け継がれてきた伝統観念や風習以外に、主として長い歴史のなかで蓄積された、知識の媒体としての各種文献と遺跡遺物とによって後世に伝わります。これらの文献と遺跡遺物がなければ、わたしたち人類の記憶は失われ、歴史や文化は保持されず、知識の蓄積も不可能となり、現在に対する理解はもとより、未来と向き合うこともできなくなります。

しかし、モンゴル人は歴史上自ら書き残してきた文献は限られているため、モンゴルの歴史と文化を研究するには、外国語の歴史資料によるところが非常に大きいのです。

モンゴル古代史については、13 世紀、イタリア宣教師ブラノ・カルピニの『モンガル人の歴史』、フランス宣教師ルブルクの『旅行記』、あるいはマルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254-1324) の『東方見聞録』以降、ヨーロッパ人によるモンゴルについての貴重な文献が多く現われました。よく知られているものとしては、18 世紀のフランス宣教師ジェルビヨン (Jean-Francois Gerbillon, 1654-1708) の日記・回想録、ロシアの使者ピチューリン (イアキンフ。Н. Бичурин) の『文献資料』 (1828 年)、ユック (Evariste Régis Huc)

の『韃靼・西藏・支那旅行記』（1851年）、イギリス宣教師ジェームズ・ギルモア（James Gilmour）の『蒙古人の友となりて』（1883年）と『蒙古探険記』（1886年）、ジョン・ヘドレイ（John Hedley）の『モンゴル奥地への旅』（1910年）、ロシアの探険家ブルジェワリスキー（Н.М.Пржевальский）の『モンゴルとタングト地方』、グリゴリー・ニコラエヴィチ・ポターニン（Григорий Николаевич Потанин）の『タングト・チベットと中央モンゴル』、ポズトネエフ（А. М. Позднеев）の『蒙古及蒙古人』（1898年）、『モンゴルと中央アジア』（1905-1906年）と『モンゴルとハラホト』（1923年）、フランスのレダン伯爵（Count De Lesdain）の『北京からシッキムまで：オールドス・ゴビ砂漠・チベットを通り抜けた旅』（1908年）、デンマークの探険家ハズルンドの（Henning Haslund）『モンゴルの人と神』（1935年）などがあります。また、世界的に有名な学者があらわれました。たとえば、スウェーデンのドーソン（C. D'Ohsson）、フランスのルネ・グルセ（René Grousset）、ポール・ペリオ（Paul Pelliot）、ルイ・アンビス（Louis Hambis）、ロシアのシュミット（I. J. Schmidt）、コワレフスキー（Joseph Étienne Kowalewski）、ゴルストンスキー（К.Θ. Голстунскимъ）、バルトリド（V. V. Bartol'd）、ウラヂミルツォフ（Б.Я. Владимирцов）、ポツペ（N.N. Poppe）、ドイツのヘーニツシュ（Erich Haenisch）、ハイシツヒ（Walther Heissig）、フランケ（H. Franke）、アメリカのラティモア（Owen Lattimore）、クリープス（Francis Woodman Cleaves）、サイルス（Henry Serruys）、ハンガリーのリゲティ（Louis Ligeti）、ポーランドのコトビッチ（Владислав Людвигович Котвич）、フィンランドのラムステッド（Gustaf John Ramstedt）、ベルギーのモスタールト（Antoine Mostaert）、スウェーデンのヘディン（Sven Hedin）などです。

19世紀半ば以降、帝政ロシアの南下政策に伴って、オリエンタリズムという文化的含意を有する学問領域が形成され、歴史学、人類学、文学、言語学などを背景とする広範な文化活動が展開されました。また大勢の探検家、旅行家、調査員たちがモンゴルや中央アジアに入りさまざまな研究調査が行われました。わずか40年間に50余りの調査団がモンゴル、ウイグル、チベット地域で現地調査を行い、多くの研究報告が書かれました。なかには数千頁

に及ぶものもあります。とくに、帝政ロシア政府の支援のもとで進められた帝立地理学会の活動が突出していました。

20世紀になると、近隣の諸国をはじめ、世界の各地からそれぞれの思惑をもって多くの探検者、旅行者、研究者たちがモンゴル地域を訪れてきて現地調査が続けられました。とりわけ19世紀末国際舞台に登場した日本は、日清戦争後朝鮮を影響下におき、さらに日露戦争後旅順と大連を獲得、南満洲鉄道を通して満蒙に浸透しました。日本は満蒙地域へ勢力をさらに拡張するために、大量の人員を派遣し、実態調査を実施しました。その結果、報告書、旅行記、踏査記録、研究著書、刊行物など多様かつ膨大な資料を残したことは、周知のとおりです。とくに、モンゴルについての各種の精緻な記録は、質量ともに世界屈指といってもよいでしょう。19世紀のロシアの活動が代表的であったとすれば、20世紀の日本は最も目立つ存在であり、多様な形で残された関係文献は、従来の満蒙史の文献とは比較にならないほど独自の内容を有しています。個人の活動を除けば、代表的なものに関東都督府陸軍部、参謀本部、南満洲鉄道株式会社調査部、善隣協会、満洲国と蒙疆政権の各関連機関による活動があります。例えば、『東部蒙古誌草稿』、『蒙古地誌』、『蒙古土産』、『蒙古法典の研究』、『土俗学上よりみたる蒙古』、『蒙古大観』、『非開放蒙地調査報告』、『開放蒙地調査報告』、『蒙古事情研究資料』、『蘇聯外蒙資料集成』等々です。現在、われわれの知る限りでは、内モンゴルだけで数千種の日本語原稿の文献が確認されています。これらの膨大な文献が満蒙地域に関する歴史研究や社会変動を理解するために、必要不可欠な資料であることは、関連する専門領域の共通認識となっています。

次に、現地の当時の日本人による実態調査資料について、コメントしたいと思います。戦前日本人によって作成された「満蒙関係資料」については、その編纂動機や目的から言えば、なかには作者の猟奇的関心や趣味・嗜好によるもの、あるいは明確に軍事拡張を志向するものなどの立場や限界を避けることはできません。しかし、いかなる動機であれ、かれらは土着の人々とは異なる文化知識の背景や観察眼を有しており、異国の風土と人情に対する強烈な好奇心とともに、しかも大多数の人々は測量や撮影などの技術とフィ

ールドワークの方法を身につけていました。一部の人はそれらの分野の専門家であり、正確で注意深い記録を残しました。こうして地元の人びとには周知の見慣れた光景や、あるいは当たり前であるがゆえに何の関心ももちえない大量の詳細な情報まで保存されました。当時の暮らしの息吹が感じられ、そこから新たな学術研究が生まれました。客観的に言えば、「満蒙関係資料」というモンゴル地域に関する大量の豊富な一次資料から、多くの学問的糸口（手がかり）を得ることができるのです。したがってそれは、歴史学、民族学（人類学）、社会学、経済学のみならず、自然科学関連領域においても貴重な財産です。このことは、内外の学术界、とりわけ国際モンゴル学界における共通認識です。これらの文献のかなりの部分は、当時の専門家たちによる「学術的努力」による重要な成果であり、いま人びとは、これら貴重な資料が十分に活用されることを渴望しています。しかし、資料の閲覧環境は劣悪です。内モンゴルは、中国国内の発達した地域と比べて、地方文献保存の取り組みは遅れており、理想を実現するために相当な時間と労力を要することは明らかです。

このため、内モンゴル大学近現代史研究所・内モンゴル自治区図書館学会と内モンゴル大学出版社が協力して、「満蒙関係資料」の復刻出版に着手しました。1949年までの「歴史文献」と言ってもたんなる歴史記述の資料ではなく、歴史上形成された各種の文献であれば、どのような分野の内容であっても収録することにしています。私たちは、まず日本語資料を中心に復刻し、さらにほかの外国語（たとえばロシア語）に着手する計画を立てています。これを契機として、内外の文献研究者との連携ができることを願うばかりです。

ハンドアウト

—

戦前期満蒙社会関係資料(文化財)に対する位置づけが日中間で「溝」がある。日本では、「満蒙」や「満洲国」をテーマとする研究成果は数多い。関係資料閲覧の機会も増えている(デジタルアーカイブの公開)。これに対して、中国では、関係資料の保全・復刊や「満洲国」に関する研究はごく一部の専門家の間で進められているにすぎない。

『中国近現代史史料学会満鉄資料研究分会』(会長李新, 顧問季羨林) 1996年

『満鉄資料整理研究プロジェクト』1997年

『歴史文献保護小組』(若手研究者) 1998年

『中国科学院図書館現存旅大図書館資料目録』(8冊, ガリ版, 1958年) 南満洲鉄道株式会社調査部蔵書

『満鉄史資料』吉林省社会科学院編, 中華書局 1979年

『東北地方文献聯合目録』(第二輯・外文部分) 大連図書館 1983年

* * *

『遼寧省档案馆日文資料目録』遼寧省档案馆編, 遼寧古籍出版社 1995年

『満鉄資料館館蔵資料目録』吉林文史出版社, 吉林人民出版社 1995-2003年

『満鉄密档』(全24冊) 遼寧省档案馆編, 広西師範大学出版社 1999-2004年

『上海図書館館蔵旧版日文文献総目録』上海科学技術文献出版社 2001年

『張家口市図書館館蔵日文図書文献目録』張家口市図書館編 2001年

『満鉄調査報告』(全25冊) 遼寧省档案馆編, 広西師範大学出版社 2014年

『満鉄調査期刊載文目録』(上中下冊) 吉林文史出版社 2004年

『中国館蔵満鉄資料聯合目録』(全30巻, 上海東方出版中心, 2007年)

原資料は出版物としての刊行も予定されていたが、PC 端末で閲覧できることなどを含めた閲覧状況の改善を図る必要がある。内モンゴルの個別の事情かもしれないが、Web が使えないことは不便である。

二

内モンゴル自治区は 112 の公共図書館があるが、歴史資料のデジタル化は

一つも実現されていない。戦前期の「満蒙」関係資料は世代交替によって次第に関心が薄れ、資料の破損紛失や不用品として破棄されることも珍しくない。

Dumdadu ulus-un erten-ü mongğol nom bicig-ün yeringkei garcağ (中国蒙古文古籍总目), 3 vol., Begejing, 1999.

『内蒙古自治区線装古籍聯合目録』(全3冊), 北京図書館出版社 2004年

『内蒙古旧報刊考録 1905 - 1949』(トウイメル編), 遠方出版社 2010年(初版1987年私家版)。

近代内モンゴルの歴史は日本を抜きにしては語れない。日本は大陸進出を強め、内モンゴルの全体に大きくかかわっていった。

満洲国領土の約 2/3 はモンゴル人の土地。新国家の名称に「蒙」(モンゴル)字を入れる案 特別行政区設立

西部の蒙疆政権(徳王政権)。蒙古聯盟自治政府(1937)~蒙古聯合自治政府(1939)~蒙古自治邦(1941) 名称の変化(独立国家の体制)

近代満蒙関係資料は、モンゴル近代史・内モンゴル地方史の研究に不可欠である。

これまでの大学の歴史系教員の社会的役割は、地方史の編纂が代表的であった(旗誌・部族誌の編纂, 文化財の認定, 民俗調査, 歴史資料の保全)。

歴史系教員の新たな地域貢献のあり方の模索

モンゴル伝統文化(乳製品加工・乳文化と製菓・チベット医学要素など)に関わる知識・技術や資料の記録と保全。さまざまな事情によって、貴重な資料がまるごと消滅する危険性が生じている。

課題

関係資料の保存や学術的活用には多様な可能性や課題を考慮する必要がある。

旧資料の復刻出版(社会的な活用)には知的財産権に関わる検討が必要

復刻版では、原本の状態の再現, 彩色などの原型を保持すること

デジタルアーカイブ構築の可能性(デジタル化になじまない資料にどう対応

するか)

近年の作業

(1) 出版プロジェクト(復刻版の刊行):『内蒙古外文歴史文献叢書』(日本語文献),全200巻,2012年~,内モンゴル大学出版社。

(2) 連合目録の作成:『内モンゴル館蔵戦前期満蒙関係資料目録』(内モンゴル自治区図書館,内モンゴル大学蒙古学文献中心,内モンゴル社会科学院図書館,内モンゴル档案館)

(3) 『フフ・トグ』紙の復刻出版企画:索引要目の作成,デジタル化の展望。

『蔣中正總統檔案』にみるモンゴル情報

『革命文献拓影 戡乱時期（政治-辺務）：蒙古』の紹介

吉田豊子

はじめに

第二次世界大戦後の国共内戦期（1945-1949年）における、内・外モンゴルに対する国民政府側トップ・レベルの政策決定に関する史料の一つとして、『蔣中正總統檔案』のうちの『革命文献拓影 戡乱時期（政治-辺務）：蒙古』⁽¹⁾における関連する文書は無視できない。そのなかには、蔣介石のもとに届いた情報や政策決定に関する貴重な史料、計50点も収録されている。

以下では、当該史料について、概況、内容による分類、そして研究史を踏まえながら、その史料的价值に関する所見を中心に紹介してみたい。

1. 史料の概況

当該史料集には、各関連部署が蔣介石に宛てたモンゴル情報が収録されている。なお、ここでいう「モンゴル」とは外モンゴル〔モンゴル人民共和国〕と内モンゴルの両方が含まれている。さらに、内モンゴル情報には、当該地域に限定されず、内モンゴル出身で南京・北京などで活躍していたナショナリストに関する情報なども含まれている。

各史料は以下のような項目で構成されている。

一、番号。各史料の前についている「号次」(以下、便宜のために、「No.」表記)という番号は、同「政治-辺務」シリーズにおける通し番号であり、モンゴル関係は No.134 から No.184 までとなっている。

二、発信者と受信者。僅かな例外を除き、受信者はすべて蒋介石で、蒋介石が発信者になっているのは1件のみである。発信者は、問題によって異なる担当部署となっている。例えば、外モンゴルの独立承認に関するものは、発信者は国防最高委員会と外交部の責任者が中心となっているのに対して、内モンゴル情報は主に蒙蔵委員会委員と軍側の責任者が中心である。情報の類は、ほぼ国防部第二庁・中統局・保密局の責任者からなっている。

三、日付。後半になるほど、欠けているものが多い。情報という不確かな類のものが多いからだと思われる。

四、文書の種類。電報・代電(電報文形式の簡略な公文書)・手稿・情報などが含まれている。

五、文書の発出地。外交関係はモンゴル人民共和国やモスクワとなっており、内政関係は南京・北平・東北・綏遠・寧夏などとなっている。

六、文書の要旨。侍従室による整理である。

七、文書。報告文書であるが、要旨という形のものもあれば、そのうえに、もとの文書が附録として付けられている場合もある。

八、蒋介石の親書ないし指示。蒋介石からの指示は、外モンゴルの独立承認と国交樹立関係以外は、情報提供者ないし侍従室の提案を、そのまま受け入れたものが多い。

九、備考。ほぼ空白の状態。

十、頁。「政治-辺務」のなかの通し番号になっている。

次に、本史料集を内容によって大まかに分類したうえ、研究史を踏まえながら、その史料的价值を検討してみよう。

2. 分類と所見(1)

1) 外モンゴルの独立承認過程と中蒙外交関係樹立関係文書

現時点では、表題のテーマに関する比較的まとまった包括的史料[No.134-No.141]として、注目に値する。政策過程には多くの部署が関与しており、蒋介石の考えを国防最高委員会秘書庁と外交部を中心に検討させているが、政策決定者はあくまでも蒋介石であることが明らかである。ソ連とともに対日参戦した外モンゴルの軍隊は、内モンゴル・東北にも駐在するようになった。このような背景のもとで、1945年の中ソ友好同盟条約の規定における外モンゴルの独立承認、そしてそれとの外交関係樹立については、外モンゴルにおける公民投票の結果に基づくものである、というのが一般論となっている。しかしこの史料によって、国民政府はそれを内モンゴルの民族問題、共産党問題・東北問題・新疆問題における対ソ交渉のカードとする戦略をとっていたことが明らかである。この点については、『蔣中正總統檔案—事略稿本』、蒋介石日記、外交部長王世杰の日記のほかに、外交部檔案『中蒙關係』などとの読み合わせが必要不可欠である。なお、他に未公開の外交部檔案『中蒙建立外交關係之各項草案副本』があり、今後の検討課題とせざるを得ない²⁾。

2) 内モンゴルの民族運動関係文書

第二次世界大戦後における内モンゴル民族問題に関する国民政府の政策決定の最も重要な文書は、国防最高委員会檔案³⁾であるが、当該テーマの研究を深めるために、この史料集にある関連情報も看過できない。蒋介石に寄せられた情報の特徴は、モンゴル族のナショナリストに集中していることであり、「北傾派」と「内向派」に分けられる。

「北傾派」とは、共産党・外モンゴルやソ連寄りのナショナリストたちを指す。東部・西部・ホロンバイルという内モンゴル全域をほぼカバーしているが、但し、国共内戦における国民党の現地への浸透力の弱さを反映して、情報が遅く、必ずしも正確とは限らないものが含まれている点は、留意すべ

きである。「北傾派」のなかでも、内モンゴルの民族運動と外モンゴルとの関連を示す興味深い史料として、内モンゴルから外モンゴルへの留学生の派遣の問題を挙げておきたい。この問題については、今後、モンゴル語・ロシア語史料などのほか、当事者へのインタビューによる検証が必要となる。「内向派」とは、国民党員ないし国民党寄りのモンゴル族のナショナリストたちを指す。彼らの政治的活動の限界については、本史料によって明らかである。1946年3月の六期二中全会は、国民党が一方的に政治協商会議を破棄したことで有名であるが、国防のために、辺疆少数民族の内向を目的とする「辺疆問題に関する決議案」を採択した。これに呼応して、その後、綏境蒙政会から二中全会決議の実行などを求める「抗日慶祝勝利還都代表团」が国民政府中央に派遣された。代表団の要求について、蒋介石は当時、いろいろと対処するとしていた〔No.143-No.148〕しかし、同年11月15日～12月25日の憲法制定国民大会では、辺疆民族問題について侃侃たる議論があったものの、何ら具体的な結論を出していない。国民政府の政策決定について、12月3日に蒋介石がモンゴル族代表を宴会に招いたが、事前に、国防最高委員会が蒋介石に対して、代表たちは「決議」のなかで最も重要な蒙古地方政務委員会を復活すること、蒙蔵委員会を辺政部へ改組することをきっと要求するという所見を出したうえ、如何なる具体的な約束もしないよう建議していた〔No.150〕つまり、国民政府は「内向派」の最大の期待に応えなかったのである。

「内向派」は国民党にとって、戦後内モンゴルの民族運動を抑制するために利用する対象であり、典型的な事例は徳王と呉鶴齡である。だが、彼らが利用に値しないか、或は民族運動の動きがみられると、「羈縻政策」がとられた。呉鶴齡は、国民党によって、北平（現在の北京）のモンゴル人を結束させて政治運動を行なう可能性があるかと疑われて、彼を蒋介石が召見するという名目で、北平から飛行機で国民政府の首都である南京に送られたのである〔No.169・No.172〕

国民政府の「内向派」に対する厳しい態度の最大の背景に、「北傾派」に変わるのではないかという懸念があったことは、想像に難くない。この点に

については、以下の内容からもある程度窺えよう。

3. 分類と所見(2)

1) 中蒙国境問題に関する文書

この問題は、1945 年の中ソ友好同盟条約の締結過程において、曖昧な妥協をしたことに起因する。当該条約では、「現在の境界を境界」とすると規定していたが、これは実はソ連側の考えが通った結果である。しかし中国側は内部では、これは 1919 年以前のモンゴルとの境界を承認するものではないと解釈できるとしていた。それは、特に新疆省北部のアルタイ地区と外モンゴルの間の境界をめぐる当時の中国側地図とソ連側の相違について、中国側地図に拘ろうとしていたためである⁽⁴⁾。そして 1946 年のモンゴル人民共和国との国交樹立交渉では、国民政府側はこの問題を議題の一つにしようとしたが、モンゴル側は 1946 年 2 月 13 日の国交樹立までの交渉過程では、一貫して中ソ友好同盟条約の対象外としながら、相互の使節の交換が実現した後に協議すると提案していた。

本史料集には、1946 年 3 月に、国防部に改組される前の軍事委員会の軍令部が、中蒙国境を確定するための資料調査をするよう蒋介石に要請していた、興味深い文書が含まれている [No.153]。この要請は、ヤルタ「密約」の公表で中ソ友好同盟条約の内幕が暴露されたことによる国内における反ソ・反政府運動、モンゴルの軍隊が内モンゴルと東北から撤退せず、ソ連からの東北の接收も難航、という状況の中で、軍側が強硬になっていたことの表われであろう。これに対して、蒋介石は当時「可緩」(暫時棚上げてよい)という慎重な指示を出していた。しかし、国民政府が 5 月に「親米反ソ」路線へ転じ、続けて 6 月に全面的な国共内戦が勃発すると、国民政府側は中蒙の国交樹立を否定していくようになっていく。その理由として、相互に使節を交換しておらず、通商関係をもっていないことのほか、国境問題の未解決をも挙げている。国境問題に関するもう一つの興味深い史料は、1946 年

12月31日、国防部長白崇禧・外交部長王世杰・蒙蔵委員会委員長羅良鑑が連名で蒋介石に対して、「辺情訪問組」という名義で中蒙国境確定の調査をするよう要請していることである〔No.153〕。国民党が内戦で優勢にあった状況のもとで、国境交渉の準備をしておこうということであろう。なお、1946年の中蒙国交樹立については、相互に照会を交わしていることから、関係正常化は実現しなかったというのが適切だと考える。また、繰り返し強調しておきたいのは、国民政府が国境問題で特にこだわっていたのは、新疆省北部のアルタイ区と外モンゴルとの境界であったことである。この問題には領土問題、民族問題だけではなく、資源の問題もあることを指摘しておきたい。

国境問題となると、有名な1947年の北塔山事件に関するものはどうなっているのか、という疑問が当然出てこよう。この史料集には該当するものは僅少である。以前の筆者の調査と研究で示したように、該当する文書は外交部檔案⁽⁵⁾の中にあり、現在、それらは中央研究院近代史研究所の図書館で閲覧できるようになっている。

2) ソ連・外モンゴルの動きに関する情報機関からの文書

国民党が共産党との内戦で敗北することが見えはじめた頃、国防部第二庁・保密局・中統局からは、ソ連・モンゴルの軍隊が中国の新疆・内モンゴルの国境地帯で行なった警備の配置や中国側軍事情報の収集に関する情報が、多く蒋介石に寄せられている。

上記の情報機関からのもののうち、国防部第二庁庁長侯騰が1948年8月24日に蒋介石に宛てた、「聯共東方局蒙古共產主義委員会及奸匪中央政治局対蒙新等地之動態」という主旨の情報〔No.178〕があり、謎が多いものであるが、当時のソ連の対外戦略やチョイバルサンを中心とした「大モンゴル主義」⁽⁶⁾などと照らして考えると、或は何らかの可能性が出てくるかもしれないので、原文を以下に訳しておく。

極東コミンフォルム⁽⁷⁾ モンゴル共產主義委員会は、プリアート・モンゴル

人民共和国及びモンゴル人民共和国を中心に、五つのモンゴル族国家を樹立しようとしている。すなわち、

- (一) 内モンゴル共和国(王爺廟の「偽内モンゴル自治政府」を指しているようである)
- (二) 新疆共和国(外モンゴルと隣接しているアルタイ・モンゴルを指しているようである)
- (三) トルキスタン共和国(新疆の北部の伊寧・塔城地区にいるトルグート・モンゴル)
- (四) ハルハ共和国(興安・遼寧と外モンゴルの間のハルハ河流域のモンゴル族部族を指しているようである。当該部族は1939年のノモンハン事件以降、すでに外モンゴルによって越境して占領された)
- (五) バルガ共和国(ホロンポイル辺りのモンゴル族を指しているようである)。

察するに、当該部族は民国の初めに外モンゴルの自治運動に呼応し、また1929年の中東鉄道事件の時、ソ連がハイラルに出兵した時に、ソビエト政府を組織し、すぐに瓦解した)

当該文書では、さらに続けて、以下のような判断を示している。

甲方(ソ連)がその安全圏を拡大するために、周辺で衛星国家を作ることは一貫した常套であり、極東コミンフォルムによって、諸モンゴル国の設立を策動する可能性がある。

その他、ソ連と外モンゴルが連合して、ハイラルでソ蒙銀行を設立したこと [No.179], ソ連が外モンゴルの内モンゴル統合を支持していること [No.180], 外モンゴルがウラン・ウデーウランパートル間の鉄道建設⁽⁸⁾に力を入れているのは、内モンゴルの合併、中国共産党との関係の強化、ソ連の南進のための運輸幹線とするのが目的であること [No.181], などの関連情報もある。

これらの情報の真偽を判断する手がかりの一つとして、最近ロシア語史料によってわかったことを紹介しておこう。モンゴル人民共和国が中華民国と国交を樹立した後も、スターリンがチョイバルサンに対して「こっそりと」

内モンゴルで民族運動を進めてよいと指示していたという⁹⁾。少なくとも、このような動きとの関連を明らかにすることができれば、新たな視点を得られる可能性があるであろう。

おわりに

本史料集の研究史における意義や問題点について、大まかにテーマに分けて紹介してきたが、今後の最大の課題は、内戦で国民党の敗戦の色が濃くなるにともなって、情報機関からの情報の信憑性を如何に判断するかだと考える。そのためには、今後、モンゴル側史料・ロシア側史料・共産党側史料などの発掘及びそれらとの読み合わせが最も求められよう。

(注)

- (1) 第 39・40 冊，1955 年編。二冊のうち，第 39 冊は新疆関係，第 40 冊は内・外モンゴル関係とチベット関係である。
- (2) 拙稿「第二次世界大戦後の中蒙関係に関する試論 1945-1946」(石川禎浩編『現代中国文化の深層構造』，京都大学現代中国研究センター，2015 年 5 月刊行予定)を参照。
- (3) 拙稿「国民政府による戦後内モンゴル統合の試み」(『アジア研究』第 47 巻第 2 号，2001 年 4 月)を参照。なお，共産党の内モンゴル政策に関する最も重要な史料は中共中央統戦部編『民族問題文献彙編』である(拙稿「戦後中国共産党の内モンゴル民族運動への対応—中国国民党の憲法制定国民大会まで」，『史学雑誌』第 111 編第 10 号，2002 年。拙稿「中国共産党の国家統合における内モンゴル自治政府の位置—『高度の自治』から『民族区域自治』へ」，『東洋学報』第 83 巻第 3 号，2001 年)。
- (4) 拙稿「“内外交困”下蒋介石的对蘇外交—從阿山事件至華萊士使節团訪華前後(1944 年 3-7 月)」，吳景平主編『民国人物的再研究与再評價』，復旦大学出版社，2013 年。拙稿「民族主義与现实主義之間的權衡与抉選—1945 年中蘇条約締結過程中国民政府之因応」，樂景河・張俊儀主編『近代中国：思想与外交』，社会科学文献出版社，2014 年。
- (5) 拙稿「轉換期国民政府の対米ソ政策」，石川禎浩『中国社会文化の研究』，京都大学現代中国研究センター，2010 年。

- (6) Sergey Radchenko, “Carving the Steps: Borders, Territory and Nationalism in Mongolia, 1943-1949”, *Eurasia Border Review Special Issue* (Spring, 2012), Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University.
- (7) 最近の研究によれば, コミンフォルムの成立が宣言された後, 極東コミンフォルムが設立されたという情報があったが, 実際には, 当時も, その後も, 設立はされていない (沈志華「毛沢東与斯大林商建東方情報局始末」, 人民網, 2015年1月9日)。
- (8) 寺島恭輔『1930年代ソ連の対モンゴル政策 満洲事変からノモンハンへ』(東北大学東北アジア研究センター叢書, 第32号)を参照。
- (9) 沈志華『冷戦の起源』, 九州出版社, 2012年。

内モンゴル近現代文学研究からみた『青旗（フフ・トグ）』紙 モンゴル語定期刊行物の研究現況に言及しつつ

内田 孝

はじめに

20 世紀初頭、ロシアと対峙するため内モンゴル東部地域に足がかりを求めた日本と、モンゴル社会の立ち遅れを認識し日本を手本として近代化に着手しようと考えた内モンゴル東部の王侯は、それぞれに利があるとみなし協力的関係を結んだ。それから 30 年後、中国東北部に權益を獲得し、それを一層強化・拡大させることを望んだ日本は傀儡国家である満洲国を建国し、さらに蒙疆政権の成立を後押しした。そうした状況で、1930 年代以降の内モンゴル地域のほとんどは満洲国、もしくは蒙疆政権の領域に含まれ、1945 年 8 月の日本の敗戦と内モンゴル地域からの撤退までの間、実質的に日本の支配下に置かれた。

この 20 世紀初頭から 1945 年までの間、内モンゴル地域をはじめ清朝・中華民国の東北部、北京、南京などでは多数のモンゴル語定期刊行物が生み出され、モンゴル人の教育、学術、文化、社会に一定の影響を及ぼしたと考えられる。その一例が、モンゴル近現代文学への影響である。本稿では、20 世紀前半期の特に日本と関わりのあるモンゴル語定期刊行物を中心にその歴史をまとめながらそれら刊行物に関する研究の現況を述べ、最後に『青旗（フフ・トグ）』新聞を用いた文学研究について紹介することとする。

1. 20世紀初頭におけるモンゴル語定期刊行物の歴史

内モンゴル地域における最初のモンゴル語定期刊行物は、ジョスト盟ハラチン右旗（現在の赤峰市ハラチン旗）にて発刊された。農業・鉱業調査のため同旗を訪れた日本人は帰国後に「喀喇沁王府見聞録」をまとめたが、そこには1905年9月に現地の「守正学堂」（武備教育を行う学校）で『星期公報』という謄写版モンゴル語・漢語新聞が発刊されており、刊行の目的として「此新聞紙ヲ以テ王へ八下情ヲ通シ下へ八王ノ意ヲ伝ヘント」することであると記されていたと述べている〔忒莫勒 2010：128〕⁽¹⁾。また、1905年冬から同旗の「崇正学堂」（初等教育を行う学校）では『嬰報』という石版モンゴル語新聞を隔日刊で刊行し、無料配布していたとする記録がある〔吳恩和ほか 1979：109〕。これらの新聞は現存が確認されていないが、1906年4月から約10ヶ月間、ハラチン右旗に滞在して女学堂の教師を務めていた鳥居きみ子は、「王府にては謄写版にて蒙文の機関新聞を毎月二回発行せられ、其記事は大方は教育に関することのみにして、就中女子の教育を大に奨励され「今日我喀喇沁の女子教育のやうやう盛なるは祝す可き事にて、やがては我全蒙三百万の同胞の為ぞ、我蒙古百年の後の強盛こそ、之等良妻賢母の手によりてこそならめ」と云ふが如き意味にて其志あるところ真によるこぶ可し」〔鳥居 1927：929〕と、モンゴル民族の興隆を念頭に置いた教育の振興が主な内容であったと記している。

当時の内モンゴルは旗ごとに王侯貴族が支配者として君臨する封建的身分社会であったが、ハラチン右旗のグンサンノルブ郡王（チンギス・ハーンの功臣ジェルメの末裔）とその妃（清朝皇族の肅親王の妹）は開明的な人物であり、旗の近代化に向けた社会改革を積極的に推進していた。例えば、初等教育・武備教育・女性教育を目的とする3つの学堂の創設、絨毯・石鹼・蠟燭を自旗内で製造する工場の建設、電信・郵便制度の開設などを行っていた。同旗における新聞の刊行もまたこうした近代的な社会基盤の整備の一環であり、上意下達によって教育の振興に力を注ぎ、立ち遅れたモンゴル社会を発展させようと志向する活動なのであった。旗内で新聞を発行するのであれ

ば、識字率を向上させ、民衆の一人一人が自分で文字を読める状態にならなければ意味がない。グンサンノルブ王はモンゴル文字(縦書きのウイグル式モンゴル文字)にラテン文字を加えた新しい文字表記を創出し、簡単に読めるように工夫した。そして旗民である老若男女に対して識字運動を行い、成果をあげたという[吳恩和ほか1979:109]。

それから間もない1908年には吉林省にて最初のモンゴル語官報と言える『蒙話報 Mongxul Üsüg-ün Bodurul』(1908年4月?~?)⁽²⁾が創刊され、1912年に中華民国が成立してからは、北京、南京などでモンゴル語定期刊行物が刊行された。それらの中には、一つの雑誌・新聞がモンゴル語部分と漢語部分に分かれて完全対訳形式になっている蒙漢合璧形式や、完全ではないが部分的に漢語とモンゴル語が併記されている部分的対訳形式が多数存在した⁽³⁾。中国や日本においてモンゴル語定期刊行物の所蔵調査を網羅的に行ったフフバートル氏は、20世紀前半期に発刊されたモンゴル語定期刊行物を109種類確認しており、うち約半数の53種類が蒙漢合璧形式(部分的対訳の形式も含む数字と思われる)であったと述べている[フフバートル1997a:9,19]。それはつまり、そうした冊子が配布される地域にはモンゴル語話者であるモンゴル人だけが居住していたのではなく、漢語話者である漢民族もしくはモンゴル語で文章を読むことよりも漢語で読むことに熟達した漢民族・満洲民族の文化的影響を強く受けたモンゴル人たちも多く混在していたことを示している。

また、この20世紀前半期におけるモンゴル語出版史において特筆されている出来事がある。それは上述のハラチン右旗から1906年に日本に派遣され、医学を学んで帰国したテムゲト(汪睿昌)というモンゴル人青年が、1919年頃から天津にいる日本人の元を訪れて活字の製作・印刷技術を学び、1922年にモンゴル文字の鉛活字の創出に成功したことである。これが中国内のモンゴル人による最初のモンゴル文字活字の製作であり、彼は北京に「蒙文書社」を設立してモンゴル語の文学作品や学習教材など50種余りを刊行し、モンゴル語出版物市場を開拓した。テムゲトが作成したこの活字はその後北京を離れて1930年に南京へ運ばれ、1936年には満洲国の王爺廟へ、さらに

1937年には蒙疆政権下のフフホトへ、そして1939年に張家口へと転々と移動しながら、様々な組織が発行する新聞・雑誌に用いられ続け、モンゴル語活字メディアを担う重要な器材として存在感を示した(例えば、注3にあげた刊行物のうち、『蒙古旬刊』と『蒙古週刊』はテムゲト作成の活字によって印刷されたものである)。

ただし、中国内におけるモンゴル文字の活字印刷物はそれ以前からも存在していた。最も古いものでは1890年代後半から1930年代前半にかけて、上海にあった英国外国聖書協会が発行していたモンゴル語訳聖書シリーズが活字印刷で作られていた。また、活字新聞もすでに2種類刊行されていたもののその発行母体はいずれもモンゴル人ではなかった。まず帝政ロシアの東清鉄道が、1906年3月からハルビンで漢語新聞『遼東報』を刊行したのに続き、1909年5月頃から同じハルビンにて『(モンゴル新聞)⁽⁴⁾ Mongyul-un Sonin Bičig』を創刊した⁽⁵⁾。この新聞は当初は半月刊であったが、辛亥革命によって清朝が滅びた後の1912年11月からは発行回数を増やして週刊となり、ロシア革命後もしばらくは停刊せず、1919年4月までは発行されていたことが確認されている[ボルジギン2012:40]。ロシア人が約10年に及んでモンゴル語新聞を刊行し続けたのは、この新聞を通じてモンゴル人の間に親ロシア的感情を醸成することを目的としていたからであった。一方、これに対抗した日本も、漢語、モンゴル語の新聞を刊行した。南満洲鉄道株式会社や外務省の支援を受けた中島真雄は奉天(瀋陽)にて1906年10月から漢語新聞『盛京時報』を発刊していたが、1918年8月になるとモンゴル語新聞『奉天蒙文報 Mügden-ü Mongyul Sedkül』を活字で刊行した⁽⁶⁾。このモンゴル語新聞もモンゴル人の中に親日的傾向を作り出すことを目的として配布したもので、利益をあげることを目的とした商業新聞ではなかった。配布先は「主に奉天の喇嘛廟即ち黄寺と、当時赤峰の領事であつた北條太洋氏とに囑して東蒙一帯の配達機関に充てた」[中島1944:46]という。当時のモンゴル社会においてモンゴル語の読み書きができたのは主にラマ僧であり、民衆から崇敬の念を受けていたので、特にラマ僧たちに対し宣伝活動を行っていたと考えられる。この新聞の発行がいつまで続いていたかは不明だ

が、石濱文庫所蔵分によれば 97 号（1920 年 6 月 12 日付）までは継続していたことが確認される。

このように 20 世紀初頭の内モンゴル東部およびその周域においては、モンゴル人自身以外にも、ロシアおよび日本が戦略的必要性から、モンゴル人向けの活字新聞を発行し、モンゴル人に配布していた。それらはモンゴル自身の発案や資金によって主体的に作られた新聞ではなかったが、新聞の記事執筆・製版・印刷には内モンゴル人自身も加わっていたことから、彼らがモンゴル語新聞の作成に実際に関与することで、新聞発行の意義や効果を認識し、また、編集・印刷の技術を習得していったことは確かであったろう。

2. 満洲国・蒙疆政権期におけるモンゴル語定期刊行物とその研究状況

1930 年代に入ると、日本は内モンゴル東部地域およびフルンボイル地域を支配し、傀儡国家「満洲国」（1932-45）の一部とした。さらに関東軍は内モンゴル中部地域（満洲国に含まれたモンゴル地域を東部内モンゴル、蒙疆政権域を西部内モンゴルと呼ぶ場合もある）へと勢力を拡大し、「蒙疆政権」（1937.10～：蒙古聯盟自治政府，1939.9～：蒙古聯合自治政府，1941.8～1945.8：蒙古自治邦）を成立させた。日本によるモンゴル語新聞・出版物刊行の政策もこの両地域において区分され、それぞれ異なるモンゴル語定期刊行物が発行された。大阪大学附属図書館（旧大阪外国語大学図書館）が所蔵している石濱文庫のモンゴル語定期刊行物も、外モンゴルで刊行された『（首都フレー（庫倫）新聞）Neyislel Küriyen-ü Sonin Biçig』（1910 年代後半期に刊行）と『朔方日報 Šuwě Fang-un Edür-ün Sedkül』（1920 年に刊行）の 2 種、そして上述の『奉天蒙文報』⁽⁷⁾を除けば、ほかはすべて満洲国・蒙疆政権において 1930 年から 1945 年の間に発行されていた新聞であった（石濱純太郎氏がこれらモンゴル語刊行物をいかなる経路で入手し得たのかは定かでないが、この点についても今後解明が望まれる）。

満洲国、蒙疆政権において継続的に刊行されていた主要な雑誌、新聞には

以下のものがある。雑誌・新聞の区分、誌紙名、〔 〕内に発行機関と発行地、そして発行号数と発行期間を以下に記す（出版物の発行年の表記は、満洲国では「康徳」、蒙疆政権では「チンギスハーン紀元」が用いられていたが、本稿では西暦表記で統一した。また、現存が確認されておらず創刊および廃刊の年月が不明である場合は「?」を付した）。また、石瀆文庫が所蔵する刊行物については、筆者が所蔵を確認した号を【 】内に付す。

まず、満洲国では下の新聞、雑誌が刊行されていた⁽⁸⁾。

1) 雑誌(月刊誌)『丙寅 Ulaγan Bars』〔モンゴル文学会, 北京→開魯〕, 4号(1936.11?) ~ 1944年

もともとは1927年1月にブフヘシグらが北京に設立した民間文芸団体であり、機関誌を計3号刊行して停刊していた。その後満洲国の開魯に移転して4号を発行し、1939年1月からは月刊誌を石版で刊行した⁽⁹⁾。

2) 雑誌(月刊)『蒙古報 Mongγul Sedkül』〔興安総署総務処調査科→蒙政部総務司調査科, 新京〕, 1号(1934.5) ~ 29号?(1936.9)^{(10)?}

3) 新聞(週刊)『蒙古新報 Mongγul Sin_e Sedkül』〔蒙政部総務司文書科新聞班→興安局→蒙古会館, 新京〕, 1号(1937.1) ~ 200号(1940.12.6)? 【2(1937.1.22), 66(1938.5.13), 67(同.5.20), 137(1939.9.22) ~ 200(1940.12.6)の各号: 179号は欠号】

4) 新聞(週刊)『兒童新聞』Keüked-ün Sin_e Sedkül』(『蒙古新報』付録)〔蒙古会館, 新京〕, 1号(1938.8.19) ~ 107号余り(1940.12)? 【58(1939.9.22) ~ 107(1940.9.6)の各号: 99号は欠号⁽¹¹⁾】

5) 新聞(週刊→旬刊)『青旗 Köke Tux』〔青旗報社, 新京〕, 1号(1941.1.6) ~ 178号(1945.7.23)? 【1 ~ 178の各号: 16, 41, 49, 159, 176の各号は欠号。2号7・8面, 61号3・4面は欠面もしくは図書館が未複製】⁽¹²⁾

6) 雑誌(隔月刊)『大青旗 Yeke Köke Tux』〔青旗報社, 新京〕, 1号(1943.1) ~ 13号(1945.1)^{(13)?}

また、蒙疆政権においては下の新聞、雑誌が刊行されていた⁽¹⁴⁾。

1) 新聞『蒙古週刊 Mongγul-un Doluxan edür-ün Sedkül』〔蒙古聯盟自治政府外交処, 厚和〕1号(1938.6 ~ ?)

2) 新聞(週刊)『蒙古新聞 Mongxul-un Sonin Sedkül』〔蒙疆新聞社, 張家口〕, 1940.6? ~ → 1942.10〕

3) 新聞(週刊)『蒙古新報 Mongxul Sin_e Sedkül』〔蒙疆新聞社蒙文部, 張家口〕, 1号(1942.10) ~ ?号(1945?) 【223(1944.9.18), 227(同.10.16), 230(同.10.30。紙面に記された号数は誤記で正しくは229号), 231(同.11.6。紙面に記された号数は誤記で正しくは230号), 231(同.11.13), 236(同.12.18), 237(同.12.25)】

4) 雑誌(月刊, 蒙漢合璧)『文化專刊 Ud_q a Soyul-un Tusqai Darumlal』『蒙古文化 Mongxul-un Ud_q a Soyul-un Darumal』〔フフホト, 1939.4? ~ 1940.2?〕

5) 雑誌(月刊)『(復興蒙古の声) Dakin Manduxsan Mongxul-un Čimege』〔張家口, 1号(1940.10?) ~ 1942.1?〕

なお、このほか日本国内においても1930年以降、日本留学しているモンゴル人学生が組織した学生会、それに日本で働いているモンゴル人(例えば駐日満洲国大使館に勤務していたハーフンガー)が加わった同郷会が組織され、3種類の機関誌が刊行されていたことが確認できる。『祖国 Ijaxurtan Ulus⁽¹⁵⁾』創刊号(1930.夏)・2号(1931.1.1), 『漢声 Mangq_a-yin Qongq_a』創刊号(1935.4.13, 宗文社), 『(新モンゴル) Sin_e Mongxul』創刊号(1941.7.5) ~ 4号(1944.9.15)(1~3号は東京の文聖舎, 4号は張家口で印刷)⁽¹⁶⁾である。また、日本が軍事力を誇示する目的で作られたグラフ雑誌『FRONT』もモンゴル語版が作られ、海軍号と陸軍号の2冊が刊行された(1942?, 東方社。訳者は服部四郎, サイチンガー)⁽¹⁷⁾。

これら満洲国および蒙疆政権で刊行された新聞の多くは商業的利益や刊行の採算を取ることは念頭に置いていなかったと考えられる。民間であれ公的機関であれ新聞発行事業を起こして、印刷機材を整備し、記者や印刷技術者を雇用し、郵便・鉄道などの輸送手段を用いて各地に配布し、定期的刊行を継続するには、資本が必要となる。また、読み手側も国内外の政治・経済・社会・教育などの時事問題に関して最新情報を得たいと欲し、そのために現金を支払える家計状態になれば、新聞発行事業は成立し得ない。この点を考えると、当時の内モンゴル地域ではモンゴル語新聞を販売する民間新聞社

の誕生は望むべくもなかった。日本国内で発行されていた日本語雑誌『蒙古』には、1943年1月14日の情報として、興安北省域内でガリ版印刷のモンゴル語新聞の発刊を決定したというニュースが掲載されている。そこには新聞の内容について、「大東亜戦争のニュースだけでなく省の施策方針はもとより蒙古地帯のあらゆる問題を戴録する筈である」と述べた後で、モンゴル語新聞の発行意義と読者層に関し、「従来は蒙古人には字の読めるものが少い[原文ママ：引用者]から新聞発行は無駄であると云つた様な意見もあつたが、蒙古人の間に字を読むものが少ければ少いだけ字を読むものが尊ばれ、その人達の言つたことは信用されることになるので、字を読む人達の手に渡るだけでも印刷して配布することになつたものである」[『蒙古』1943-3：130]と記されている。この記事からは、1943年初頭時点においても、字を読めないモンゴル人が大半を占めており⁽¹⁸⁾、日本がモンゴル語活字新聞を用いてモンゴル人に対し官製の情報を流布することの効果について、疑問視する声も根強く存在していたことが明らかとなる。

満洲国・蒙疆政権期の定期刊行物は、中国では文化大革命のような政治的混乱の中で処分されたケースも多かったと考えられ、中国国内に現存されているものは少ない。一方日本国内には、モンゴル語教育が行われ内モンゴルと関わりが深かった大阪大学(旧大阪外国語大学)と東京外国語大学、また東洋学研究機関である東洋文庫などに一部が保管されている。満洲国時代の新聞を例にとると、『青旗』新聞は数年前までは石濱文庫と東京外国語大学以外には所蔵が確認されていなかった(注12で述べたように、現在は新たに中国および日本国内からも見つかっている)。また、『児童新聞』の場合は内モンゴル自治区図書館に計4号分所蔵されているほかは日本の東洋文庫に計20号分と石濱文庫に計48号分(東洋文庫と石濱文庫の号数は重複しない)が所蔵されているのみである。しかし近年、大学や研究機関の図書館の蔵書整理や故人となったモンゴル関係者の蔵書の中などから、モンゴル語定期刊行物が新たに発見され、欠号を補ったり、これまで知られていなかった新しい刊行物が見つかる事例もある⁽¹⁹⁾。さらに、データベース化・情報ネットワーク化の向上によって、各機関の所蔵資料情報を確認しやすくなった

こともこうした資料調査の進捗に寄与している。

20 世紀前半期に発刊されたモンゴル語定期刊行物資料の収集・調査作業と平行して、刊行物そのものに関する研究あるいは刊行物に掲載されている情報を用いた多様な研究もなされ、その成果が公表されつつある。次にそうした研究成果の主要なものを述べる（漢語で書かれた研究資料は〔漢〕、日本語で書かれた研究は〔日〕、モンゴル語で書かれた研究は〔モ〕と付す）。

まず、20 世紀前半期のモンゴル語定期刊行物に関する研究に最も早く着手し、以後研究を重ねている内モンゴル自治区図書館研究員のトゥイメル（忒莫勒，白燎原）氏は定期刊行物それぞれの個別研究〔忒莫勒 2001〕〔漢〕，〔忒莫勒 2002a〕〔漢〕などを行いつつ，〔内蒙古自治区图书馆 1987〕〔漢〕，〔忒莫勒 2010〕〔漢〕という 2 冊の書籍を刊行し、当時の刊行物の全体像を把握しようとしている。特に後者では、中国内で刊行されたモンゴル語定期刊行物と内モンゴル域内で刊行された漢語・日本語・ロシア語を含む定期刊行物について所蔵している機関と所蔵号数、そして書誌情報をまとめている。筆者が同書のモンゴル語刊行物の索引〔忒莫勒 2010：466-474〕によって数えたところ、1905 年から 1949 年 9 月までの間にモンゴル語新聞は 52 種類（うち現存未確認 22 種類）、モンゴル語雑誌は 72 種類（うち現存未確認 16 種類）が発刊されていたことになる。また、日本においてもフフバートル氏が 1990 年代以降に日本国内をも含めて広範な所蔵調査を行い、モンゴル語刊行物の全体像をまとめている（〔フフバートル 1997a〕〔日〕，〔同 2007〕〔日〕など）。また、北京図書館から刊行された〔中国蒙古文古籍総目 1999（下巻）：2221～2239〕〔モ〕には「定期刊行物」の項目があり、書誌情報と所蔵機関情報がまとめられている。さらにモンゴル学百科全書シリーズの文学巻と新聞出版巻（〔蒙古学百科全書・文学巻 2002〕〔モ〕，〔蒙古学百科全書・新聞出版巻 2003〕〔モ〕）の中にも、1945 年以前の定期刊行物に関する見出しが多く立てられ、詳細な解説が付されている。

満洲国期における主要定期刊行物の変遷と紙誌面の考察を行った研究として〔広川 2007〕〔日〕、満洲国・蒙疆政権期の主要定期刊行物と出版社について概説した研究として〔金海 2008〕〔漢〕などがある。

定期刊行物を用いた個別分野研究としては、日本のラマ教政策を分析した〔広川 1998〕〔日〕、『蒙話報』紙や『丙寅』誌を用いてモンゴル語近代語彙の形成を考察したフフバートル氏の研究〔フフバートル 1997b〕〔日〕、〔同 2012〕〔日〕など）、『青旗』新聞の掲載記事を用いた教育・民族意識に関する研究〔娜仁格日勒 2012a〕〔漢〕、〔同 2012b〕〔漢〕）がある。

文学関連では、『大青旗』に掲載されたエルデムトゥグスの戯曲「ホンゴルジョルの出征」を論じた〔二木 1998〕、『奉天蒙文報』に掲載された文学者ヘーシンゲーの作品を論じた〔Fütaki2002〕〔モ〕、『青旗』新聞に掲載されたサイチンガーの作品研究〔拙稿 2002〕〔日〕、〔拙稿 2004a〕〔日〕）、『青旗』紙および『大青旗』誌の大要と一部翻訳紹介〔ウリジバヤル 2007〕〔日〕、〔同 2009〕〔日〕、〔同 2010〕〔日〕）、満洲国・蒙疆政権期にモンゴル語に翻訳紹介された文学作品に関する研究〔拙稿 2008〕〔日〕、20 世紀前半期の内モンゴル文学作品を啓蒙性という視点から論じた〔Otqunbayar2009〕〔モ〕、満洲国期の定期刊行物に掲載された児童文学に関する研究〔永花 2009〕〔漢〕、〔Konagaya ほか 2013〕〔モ〕）がある。

また、定期刊行物の刊行に関わっていた人物について、刊行物の記述を傍証として用いつつ考察した研究として、『奉天蒙文報』紙を用いたボヤンマンガフ研究〔二木 2002〕〔日〕、同紙を用いたヘーシンゲー研究〔ウユンゴフ 2010〕〔日〕がある。

さらに近年、『青旗』新聞の紙面の見出しをリスト化する作業も行われるようになった。1941 年刊行分の紙面から民族教育および民族意識の覚醒に関する記事タイトルをリスト化した〔娜仁格日勒 2012〕〔漢〕、全号の主要見出しをリスト化した〔Nondavul_a2013〕〔モ〕である。

今後も満洲国・蒙疆政権期を含む 20 世紀前半期のモンゴル語定期刊行物を用いて、当時の出版活動の状況、さらにモンゴル社会、教育、文化、歴史、言語、政治、経済、日本との関係、日本の対モンゴル政策などに関する多様な研究が進められていくであろう。そのためには、こうした貴重資料を研究者らが利用しやすい環境を整備することも欠かせない。現状では、こうした資料は現存する巻号が極めて少なく、中国や日本の大学、研究機関、個人の

蔵書などに分散して保管されているため、自ら各地を訪れて個別に閲覧・複写を行う以外に方法はない。そのため、時間的・労力的・経済的手間も多くかかる。また、資料を所蔵する機関の予算的制約などから、閲覧しやすい環境の整備や資料の整理・保管などの諸作業が追い付いていない場合もある⁽²⁰⁾。こうした中で近年内モンゴルにおいて、定期刊行物を影印版書籍として出版する取り組みが増えており、閲覧の利便性が向上すると同時に資料の劣化破損・散逸消失対策という観点から考えても歓迎すべきことである。まず、日本に留学していたモンゴル人学生らが刊行していた機関誌『漢声』1号、『新モンゴル』1号(ただし奥付が欠)・3号・4号を1冊にまとめた書籍[呼和浩特市民族事務委員会 2003]が出版された。次に、綏遠(現・フフホト)で1929年から1935年にかけて刊行されていた3種類の定期刊行物、『綏遠蒙文半月刊 Süi Yuwan Mongxul Üsüg-ün Qaras Sarayin Darumal』1号(1929.11.15)~5号(1930.1.15)、『蒙文週報 Mongxul Udq_a-yin Doluxan Edürün Sedkül』1号(1933.6.30)、『月刊誌』蒙文嚮導 Mongxul Gajarči』3号(1935.5.31)、『6・7合併号(1935.9.30)』を1冊にまとめた[呼和浩特市民族事務委員会 2006]、さらに、内モンゴル人民革命党が張家口で発行した『内蒙古国民旬刊 Doturadu Mongxul-un Arad-un Sedkül』1号(1925.11.16)~8号(1926.4.10)を1冊にまとめた[ツェデブ、王満特嘎 2007]が出版された。日本国内においても、満洲国時代の刊行物である『蒙古報 Mongxul Sedkül』1号(1934.5.1)、興安北分省が配布したモンゴル語・満洲語合璧形式による公報冊子『布告 Sonsyal』(1934.2.7)、ジャラン・アイル(札幌屯)師道学校校友会の日本語会誌『興安 Kingyan』5号(日本語)の3冊を含む[新潟大学 2013]が刊行された。

活字印刷物の勃興期であった当時、書写のための正書法は確定的ではなかった。そのため当時の出版物には、執筆者や編集者によって異なる語彙の表記や誤植と思われる表記が散見される。研究者がそうした資料を利用する際に、誤読したまま引用したり、注釈なしに現代表記へ改めている場合も見られる。また、満洲国・蒙疆政権期のモンゴル語刊行物には、新たに創出され用いられた新単語も含まれており(例えば、日本語の漢字熟語の漢字を1字

ずつモンゴル語に置き換えるという方法で生み出された新語彙(国名・地名・人名について日本語のカタカナ表記をモンゴル語表記に移した語彙など)、今日ではそうした語彙は消滅して用いられないことから編纂担当者は表記を把握できず、そのため当時の出版物を活字やパソコン入力で再刊する際に、間違った文字表記で出版してしまうケースがある。こうしたミス避けるには影印で刊行し、文字の判読は読者にゆだねるのが妥当である。

3. 『青旗』紙と内モンゴル近現代文学研究

1980年半ばになると、1945年以前の内モンゴル文学作品や出版社に対しても関心が向けられ始めた。例えば、青年時代に日本とモンゴル人民共和国に留学し、内モンゴル自治区成立後は中国モンゴル民族を代表する詩人として活躍し、文化大革命中に迫害を受け1973年に59歳で死去したNa.サインチョグト(1914-73。1947年以前はサイチンガーという名前を用いていた)の1945年以前の著作集『(サイチンガー) Sayičunγ_a』が1987年に刊行された⁽²¹⁾。また、初期日本留学生であり蒙文書社を設立、満洲国時代には興安軍官学校でモンゴル語教員を務めたテムゲトの経歴と蒙文書社に関する資料をまとめた研究書『(テムゲト伝) Temgetü-yin Namtar』が1989年に刊行された。この頃から1945年以前の定期刊行物を用いた内モンゴル近現代文学研究が本格的に開始されるのである。内モンゴル近現代文学の研究者が1945年以前のモンゴル語刊行物に出会い、さらにその中にそれまでの文学史からは抜け落ちていたすぐれた文学作品が埋もれていることを知って衝撃と感動を受けている様子が伝わってくる文章を、ここで2つ紹介したい。

まず、文学研究者の故ショガラー氏(元・内モンゴル師範大学教授)は1988年秋、モンゴル族文学史研究に関する国家プロジェクトの一環として、中国国内に所蔵されているモンゴル語新聞・雑誌資料の総合的調査を行った。そして1990年、文芸誌に「(大洋から真珠をすくい上げた記録) Dalai-ača subud šügügsen temdeglel」と題する記事を掲載した[Šuyar_a1990]。その文章の中でショガラー氏は、1939年7月刊行の『(蒙古学院成立一周年記念誌) Mongxul-

un Surulxa-yin Qorijan-u Sural Negegegsen Jil-ün Oi-yin Durasqal-un Sedkül』の中から「(ゴビに咲く花) Gobi mangq_a-yin čečeg」というタイトルの短篇小説を発見したこと、この作品が内モンゴル近代文学の珠玉の名作として高く評価できることを驚きと喜びを込めて報告し、作品の全文を紹介した。小説には、モンゴル民族の復興という大きな目的のために外国に留学している主人公である青年「私」と、彼を無私の心で支える恋人と養父母の姿、彼らの葛藤、そして恋人の病死という悲劇的結末を迎える仮構世界が描かれている。作者は厚和(フフホト)の蒙古学院や大阪外国語学校(大阪外国語大学の前身)で教員を務めていたエルデムバートルである⁽²²⁾。この作品はその後、『青旗』紙36号(1941.11.22)にも転載され、全文が紹介された。

次に、文学研究者ゲレルト氏(元・内モンゴル大学教授)が『青旗』紙と出会った時の光景を、当時大阪外国語大学大学院で学んでいたテクスバヤル氏は次のように描写している。1994年秋にゲレルト氏が大阪外国語大学附属図書館(当時)へ文献調査に訪れた時のことである。「ゲレルト先生とオヨン先生(引用者注:ゲレルト氏夫人)を橋本先生が引きつれ、私は先生方のお供として、図書館に入った。間もなく『青旗』新聞がゲレルト先生の眼前に広げられた。その瞬間、先生は身震いし手足が小刻みに震えている様子が見てとれた。しばらくの間、新聞が目の前に並べられており自分も手に持っていることすら分かっていないようだった。それからやっとカメラを取り出したが、カメラを持つ手はまだ震えていた。(改行)隣にいたオヨン先生はこのことに気付かなかったかもしれない。ゲレルト先生自身も知らなかったのではないか。しかし、すぐ横に仕えていた私はすべて見ていた。(改行)それはゲレルト先生の内奥から出た、自然的な、長い時間探し回っていた自分の乗用馬を連れ戻すことができた時のそうした震えであった」[Tegüsbayar2008:23]。ゲレルト氏はこの訪日時に収集した満洲国・蒙疆政権期の定期刊行物の中から、文学作品を選び出し、注釈を加えて、1998年11月、『異草集(モンゴル語タイトルの直訳は「谷間の青草」,またサブタイトルは「1931-1945年期におけるモンゴル文学選」) Soxu-yin Novux_a』を刊行した。同書の中で、詩歌、散文、短篇小説、物語(民話・童話を指す)

の4項目に分類し、出典、作品解説、ゲレルト氏が調査し把握し得た作者の経歴を記している。本に紹介されているのは計62人(ほかに無署名5人)で、詩歌84作品、散文22作品、短篇小説11作品、物語15作品の計132作品が含まれる。これらは主に『青旗』紙から抜粋した作品であり、ゲレルト氏が数えたところでは『青旗』に文学作品を寄稿していた人は計約180人いた[Gereltü : 4]。この1冊によって満洲国・蒙疆政権期のモンゴル語文学作品が初めて人々に知られるようになり、以来内モンゴル近現代文学の研究者、修士課程および博士課程の院生らがこの時期の文学作品に関心を抱き、研究テーマとして選ぶ人が現れるようになった。こうしてみると、『青旗』紙を用いたモンゴル研究がまず文学の分野から始まったのも当然の流れであったと言える。内モンゴルの研究者や院生の多くは原資料を閲覧するために石濱文庫まで訪れることはせずに、この書籍『異草集』を用いて研究を行う場合が多い。ただし、注意しなければならない点は、同書に紹介されている作品と『青旗』新聞に掲載されている原文とを比較すると、同一でない表記も少なくないという点である。この原因について筆者は、新聞紙面を撮影した写真の中の文字が小さかったためにそれを文字に復元する過程において、誤記が生じたのであろうと考えている。この理由から、今なお『青旗』紙に掲載された文学作品の研究をする場合には、オリジナルの原文を確認する作業は欠かせない。

筆者は『青旗』紙を用いた文学研究として、サイチンガーという人物の作品研究とモンゴル語翻訳作品研究の二点を主に行った。前者は[拙稿 2002]と[同 2004a]に、後者は[拙稿 2008]にまとめられているので、ここでは前者について簡略に述べることにする。

サイチンガーは1937年4月に蒙疆政権からの留学生として日本へ派遣され、東洋大学の専門部倫理教育科で教育学を学び、1941年12月に帰国、その後は女学校の教員や徳王秘書を務めた人物であった。日本留学中の1941年1月に満洲国で『青旗』新聞が創刊されると、彼は蒙疆政権側の出身であったにもかかわらず積極的に記事を投稿し、第2号(1941.1.13)から第55号(1942.4.4)までの計19号に31篇の詩や散文を発表した。筆者は特にそ

これらのうちの科学知識を紹介した短文 12 篇（例えば、「火を作る法」、「電気」、「科学の元祖 ターレス」などと題する短文）に注目し、それらが日本の科学ジャーナリスト原田三夫が著した『子供に聞かせる発明発見の話』（誠光堂、1937）という書籍からの翻訳文であることを明らかにした。また、54号（1942.3.28）と55号（1942.4.4）に連載された世界著名人の名言集『心の光』の原典が文庫本『天の声地の声』（大日本雄弁会講談社・キング文庫、1935）であることを明らかにした。前者は彼の全集に未収録、後者は1943年に書籍化され全集に収録された訳文とは異なる初稿版である。日本留学中の彼は、上述の2種類のほか、歴史研究書（矢野仁一『近代蒙古史研究』、弘文堂書房、1917）の部分訳、文学作品（北原白秋『雀の生活』、新潮社、1920。武者小路実篤『自己を生かす為に』、新潮社、1919）のそれぞれ部分訳、日本のプロパガンダ誌『FRONT』を翻訳していた（『FRONT』は翻訳の依頼を受けて、モンゴル研究者・服部四郎と共訳）。こうした翻訳活動から、彼が日本滞在中に広い分野の書物に関心を示し、日本語を通じて新しい知識を吸収するとともに、そうした新知識をモンゴル人たちにモンゴル語で紹介する意義を認識していたことが明らかとなる。モンゴル社会を発展させる責務を強く自覚し、積極的に翻訳活動に取り組み、活字印刷物による普及というそれまでにない新しい手段を用いて、モンゴル地域の人々に科学知識や新しい思想・価値観を普及させようと尽力していたのであった。また、『青旗』紙に掲載された科学知識や世界の名言を日本語からモンゴル語に翻訳する過程で、彼はモンゴル語の新しい語彙を創出する必要性に迫られ、実際に新単語を作り出していたと推測される。今後は突き止めた日本語原典と彼の訳文の比較なども必要となる。彼は一般に詩人・作家として高く評価されているが、『青旗』紙に掲載された翻訳文を通じて日本留学期の彼の翻訳活動に着目すると、教育者・啓蒙活動家としての一面が鮮明に見えてくる。

次にサイチンガーと並んで『青旗』紙に文学作品を積極的に投稿していたもう一人の青年について述べる。満洲国側のモンゴル青年の中で最も活発に創作活動を行っていたのは、興安学院学生のエルデムトゥグスであり、彼は『青旗』新聞、文芸誌である『大青旗』誌や『丙寅』誌、興安学院校誌『興

安嶺』などに詩・短篇小説・戯曲⁽²³⁾を好んで寄稿していた[Čavan2001:36]。『青旗』紙上には3号(1941.4.3)から97号(1943.4.3)のうちの計29号分に短篇小説, 詩歌, 散文, 翻訳⁽²⁴⁾を掲載していたことが確認される。また彼は, 1941年の第一回全満洲男女青少年「生活記」という綴方コンテストに応募し, モンゴル語部門で入選を果たしている。「私の日常生活」と題した彼の作文はモンゴル語で書かれていた原文が服部四郎によって日本語に訳され, ほかの入選者と合わせて書籍化された[満洲国協和青少年団中央統監部1942]⁽²⁵⁾。その中で彼は次のように書いている。「学科は毎日大いに勉強してゐるのですけれど, ちつとも興味がありませんし, 私の読んだり書いたりする欲望を押さへることができませんので, 私の心はすぐ別のことへ走ります。(改行)物語, 雑誌, 文学は私の最も好きなものでして, 私の心はこれらのものから離れることなく, 毎日読書し, 寝た間も忘れないほどです。(改行)文章はまづいのですけれど, 私はたゆみなく努力するやうに心がけてみます。ですからものを書くことも私の好きな習慣となりました。一日に何か少しでも書かないとすべきことを忘れたやうな気がします」。ここからは, 創作活動に一途に励む文学青年の姿を見て取れよう。上述したように, この時期, 文字が読めないモンゴル人も多くいたはずであるが, 一方ではこのように読書と文学創作の活動に夢中になる若者も現れていたのである⁽²⁶⁾。

この『青旗』新聞にはサイチンガー, エルデムトゥグス以外にも多くの日本留学中の学生, 満洲国にあった興安学院, 育成学院, 陸軍興安軍官学校, 建国大学などのモンゴル人学生や国民学校の生徒, そのほか多数の人々が文学作品や論考, 図画, ニュース記事などを寄稿していた。何らかのルートで積極的な寄稿を依頼したと思われる人物を「青旗の友 Köke tuy-un nöbür」に任じ, 彼らが寄稿する際には名前の前に「青旗の友」と記される場合が多く見られる。8号(1941.5.10)3面には「青旗の友」への任命証書の写真を掲載しており(Köke tuy-un nöbürを漢字表記で「青旗報社社友」と記している), その人数は刊行初期には70数名であったのが[青旗34号(1941.11.8)6面]1年余り後には118人[青旗88号(1943.1.3)3面]へと急増している。一般の寄稿者や「青旗の友」の中には, 内モンゴル自治区, 中華人民共和国の

成立後に活躍する作家、学者、教育関係者らも多数確認される。『青旗』紙編集部もまた読者からの寄稿を積極的に募っていた。例えば、1号(1941.1.6)3面には読者から原稿を募集する旨簡略に記している。また1号4面には『青旗』創刊に際し、論説文を募集すると述べ、モンゴル関連の4つのテーマ(教育とモンゴル民族、体育とモンゴル民族、宗教とモンゴル民族、国軍とモンゴル民族)の中から選んで、文章を書いて郵送するよう伝えている。2号(同年1.13)5面では、モンゴル人皆で紙面を作っていこうと読者に呼びかけ、日本留学中の学生に対し、日本の様子、学生生活についての記事を投稿すれば、親兄弟が読んで喜ぶだろうと提案している。そのほかにも、読者は昔話、評論、牧畜・農業、旗で起きた出来事などを投稿するよう呼びかけた。6面には、投稿する文章は簡潔に書くこと、小さい子供でも読めること、きれいな字で書くことの3点に留意するよう注意点を伝えている。3か月休刊したあとに発行された3号6面には、第1号で募集した論説文の優秀作を掲載し、優秀執筆者には賞金を送付した旨述べられている。また7面には、第2号刊行後に社内調整のためしばらく休刊したが、本号より刊行を再開するので、読者はニュース・文章・図画などを送付するよう呼びかけた。当時日本に留学しながら『青旗』新聞に投稿していたアルバジン氏からの聞き取りによると⁽²⁷⁾、寄稿して掲載されると原稿料が支払われ、そのお金が学生にとってはうれしい小遣いになったという。

このように読者の投稿を増やし、紙面を作成していこうという編集方針は、それ以前の『蒙古新報』および『児童新聞』とは大きく異なる。一方、子供向け読み物であった『児童新聞』は『青旗』新聞の毎号最終1ページを『児童青旗 Keiked-ün Köke Tuv』と名付け、再び子供向け記事を掲載した。図画や写真を多用し、視覚的楽しみも盛り込んだこうした児童向けページの中に、科学知識を紹介する記事が多く掲載されている。こうしたモンゴル語文章の中には日本語からの翻訳が多く存在すると思われるが、一体誰がどんな本から翻訳していたのかなど未解明な点は多く残されている。

当初全8ページの週刊であった『青旗』紙は76号(1942.9.3)から旬刊に減り、89号(1943.1.13)からはページが半減して全4ページとなった。これ

は戦局の悪化により紙の供給が欠乏してきたことと関連する。一方で 1943 年 1 月からは有料のモンゴル語文芸誌『大青旗』が『青旗』と同じ青旗報社から隔月刊で創刊された。『青旗』94 号(1943.3.3)2 面に、講読代金を封筒に入れて送付してこないよう注意を呼びかける記事も見られる。125 号(1944.1.13)2 面、136 号(1944.5.3)2 面などに紙不足の現状を述べて未払いの『青旗』紙、『大青旗』誌の購読料を支払うよう求める記事が掲載されていることから、『青旗』紙もある段階から有料に変わっていたことが分かる。150 号(1944.9.23)2 面には『大青旗』1 冊の値段がモンゴル人 1.2 円、モンゴル人以外 1 冊 2 円と記されており、モンゴル人に対しては購読料の優遇策が講じられていたことも知ることができる。さらに、170 号(1945.4.13)4 面には『青旗』紙の年間購読料が 3.6 円(『大青旗』は年 7.2 円で同じ)とある。戦局が悪化し、新聞の刊行存続すら危うい状況に陥っていた様子がうかがえるが、『青旗』紙および『大青旗』誌の刊行に付随する寄稿者への原稿料の提供や有料でもモンゴル語刊行物を購読しようという読者が生まれていた状況は、活字文化の定着および職業作家の誕生に向かう社会変化の大きな流れが生まれつつあったことが明らかとなる。

おわりに

以上、『青旗』新聞をはじめとする満洲国・蒙疆政権期、さらには 20 世紀前半期のモンゴル語定期刊行物に関する刊行の経緯、研究の現況、資料の現存状況などを述べた。また、『青旗』新聞を用いた文学研究の状況についても紹介した。

日本国内の大学図書館や研究機関に保存されてきた貴重なモンゴル文化遺産であるこうした刊行物が国内外の人々によって活用される環境が一層整い、より多くの研究成果が生み出されるよう期待したい。

注

- (1) この見聞録は JACAR 公開資料「蒙古喀喇沁王ノ依頼ニ依リ本邦技師農業鉱山調査一件」[Ref : B04011142900, p.50] で閲覧可能である。なお、この時の鉱山調査をまとめた書籍『清国内蒙古喀喇沁王部鉱業調査報文』（出版社不明，1906）は国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。
- (2) 『蒙話報』の研究は [フフバートル 2012] などを参照。
- (3) 中華民国期のモンゴル語定期刊行物は大阪大学外国学図書館（旧大阪外国語大学図書館）の書庫にもまとまって所蔵されているが、十分知られておらず、[フフバートル 1997a] および [忒莫勒 2010] の所蔵データにも含まれていない。筆者が確認した大阪大学外国学図書館が所蔵する（石瀆文庫の所蔵ではない）中華民国期モンゴル語定期刊行物の書誌名・所蔵号数などのデータは下記の通りである。これら資料も他所に現存が確認されていない、もしくは数部しか現存しない貴重資料である。
 - 『蒙文白話報 Mongxul Yerü Üge-yin Sedgöl』（中華民国政府蒙蔵事務局弁報処編輯発行，北京）1（1913.1月）～18（1914.6月）
 - 『蒙文報 Mongxul Udq_a-yin Sedgöl』（中華民国政府蒙蔵院弁報処編輯発行，北京。『蒙文白話報』の後続誌）第2期（1915.5.15），第3期（同年6.15），第3巻第2期（1916.2月），同巻第4期（1916.4月）
 - 『蒙旗旬刊 Mongxul Qosiyun-dur Tarqavaqu Arban Edür-ün Darumal』（東北政務委員会蒙旗処，瀋陽）第3巻第13期（1931年）
 - 『蒙蔵週報 Mongxul Töbed-ün Dolun Edürün Sedgöl』（蒙蔵週報社，南京）第1巻第4期（1929.10.6）
 - 『蒙蔵周報 Mongxul Töbed-ün Dolun Edürün Sedgöl』（蒙蔵周報社，南京。『蒙蔵週報』の漢語タイトル変更）26（1930.5.10）～81（1931.8.21）：28，29，31-36，38，39，49，52，53，57，61の各号は欠号。
 - 『蒙古旬刊 Mongxul-un Arban Edür-ün Darumal』（蒙古各盟旗聯合駐京弁事処，南京）13（1931.2.10）～35（同年9.30）
 - 『蒙古週刊 Mongxul-un Dolun Edür-ün Darumal』（蒙古各盟旗聯合駐京弁事処，南京。『蒙古旬刊』の後続誌）37（1931.10.17）～50（1932.1.23）
 - 『蒙蔵旬刊 Mongxul Töbed-ün Arban Edürün Sedgöl』（蒙蔵旬刊社，南京）1（1931.9.20）～10（同年12.20），14（1932.5.20）～26（同年9.20）
- (4) 本稿でモンゴル語の定期刊行物・書籍・記事のタイトルを記す際に日本語タイトルが明記されておらず、筆者による仮訳の場合は括弧付き日本語とモンゴル文字転写文字で記す。ただし、漢語タイトルが記されている場合はその漢語タイトルを、簡体字を日本漢字にした上で表記する。また、同一タイトルについて再度言及する際には漢語・日本語のタイトルのみ表記する。

- (5) 『モンゴル新聞』の研究は [ボルジギン 2012]などを参照。
- (6) 中島真雄はモンゴル語活字の入手方法について、「前年満鉄会社が [原文ママ：引用者] 蒙古語の単行本を編成したことを想起し、その活字が凡て満洲日日新聞社の印刷部に於て鑄造せられたことを聞込み得たので、交渉の結果遂に蒙古活字を得るに至った」[中島 1944: 45]と回想している。この「蒙古語の単行本」というのは、[南滿州鉄道株式会社総務部交渉局第一課(同課内 佐藤富江): 編 『蒙古語 Mongxul Üge』, 満洲日日新聞社: 印刷(大連), 1915年5月発行]であったと考えられる。なお、『奉天蒙文報』が刊行された1918年には同じ大連の印刷所で別のモンゴル語会話書[関東都督府民生部殖産課(関東都督府囑託 宮崎吉蔵: 編述) 『蒙古語旅行用会話 Mongxul Üge Kelelčikü Bičig-ün Debter』, 満洲日日新聞社: 印刷(大連), 1918年3月]も出版されている。どちらにも同じモンゴル文字活字が用いられているが、前者は子音の j と y に同じ活字が用いられているのに対し、後者では改良が加えられ新たに y の活字が作られ、区別されている。また筆者は、テムゲトが活字印刷の技術を学んだのは実は天津ではなく、大連のこの満洲日日新聞社の印刷所であった可能性もあると考えている。
- (7) 石濱文庫では、『首都フレ新聞』は2号~14号(各号の年月日未確認, 7号は欠号), 『奉天蒙文報』は2号(1918.8.17)~97号(1920.6.12)(1号と思われる5~16面もあり。10号, 11号, 60号は欠号)を所蔵。『朔方日報』は未確認だが、図書館より得た情報によれば3号~5号(各号の年月日未確認)を所蔵している。
- (8) 満洲国における主要モンゴル語定期刊行物に関する研究として [広川 2007]がある。
- (9) フフヘシグおよびモンゴル文学会に関する日本国内の研究として, [フフバートル 1997b], [宇野 1998]などがある。
- (10) 筆者が把握した範囲で、現存する『蒙古報』のうち巻号が最も新しいのは、島根県立大学服部四郎ウラル・アルタイ文庫が所蔵する第29号(3-9, 1936.9月発行)である。
- (11) 筆者の手元には『児童新聞』99号(1940.7.12)がある。これは大阪外国語学校蒙古語部第17回(1941年3月)卒業生である故・澤正信氏の遺族より譲り受けたものである。
- (12) 『青旗』新聞は石濱文庫所蔵分だけが現存するものとして知られていたが、近年他からも新たに見つかり、石濱文庫の欠号を補うことも可能となっている。まず、周太平・ナランゲレル両氏からの情報によれば、中国国内から発見された分によって49号および159号が補える。次に、堤一昭氏からの情報によれば京都大学人文科学研究所の現代中国研究セ

ンターが一部所蔵しているということで、そこから16号が補える。さらに堤氏からの御教示を受けて二木博史氏に確認したところ、東京外国語大学所蔵分から41号が補えることを確認した。

- (13) 『大青旗』誌は内モンゴル自治区図書館、東京外国語大学モンゴル語科研究室、首都大学東京図書館が所蔵しているが、8号と9号が欠号となっていた。筆者は2014年7月に故精松源一・元大阪外国語大学モンゴル語科教授の蔵書を調査し、そこに9号が存在することを確認した（その後、精松氏遺族の好意により滋賀県立大学図書情報センターに寄贈された）。なお、[ウリジバヤル2013]には『大青旗』誌各号（8・9号除く）の目次の日本語訳が紹介されている。
- (14) 蒙疆政権における主なモンゴル語定期刊物および出版物に関する研究として[金海2008]がある。なお、特に蒙疆政権のモンゴル語定期刊物は現存されているものが少ないため、不明点は多い。
- (15) 『祖国』を発行した「蒙古留日学生会」は1930年春に成立し、『祖国』創刊号の発刊は1930年夏頃であった[JACAR B04011358900:7]、『祖国』のモンゴル語タイトルについては、[拙稿2008:227]参照。『祖国』1号および2号は現存しないが、日本の警察関係者が抄訳したとみられる第2号の日本語訳は[JACAR B04011358900]で読むことができる。
- (16) 筆者は島根県立大学メディアセンターの「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」より、『新モンゴル』誌1号および2号を見つけた[拙稿2008]。また、注13で述べた精松蔵書にも『新モンゴル』誌1~3号の3冊が含まれていることを確認した。
- (17) モンゴル語版『FRONT』の海軍号および陸軍号2冊も「服部四郎ウラル・アルタイ文庫」が所蔵している[井上2005]。
- (18) 神尾弑春によれば、この時期満洲国ではモンゴル語の文字改革も検討されていた[広川2008:45]。それはモンゴル人民共和国においてキリル式文字表記が採用されてキリル式文字で経済・工業関連の書籍が刊行され始めていた状況に対抗するため、神尾(当時満洲国総務庁参事官)、菊竹実蔵(当時青旗報社社長、東京外国語学校蒙古語学科1期生)、注6で触れた佐藤富江(当時蒙古実務学院院長、東京外国語学校蒙古語学科1期生[包2015:6,7])の3人が委員を務め、モンゴル語学者と実務家が幹事として加わって始まったが、満洲国の瓦解により中止となった[神尾1983:105]。この文字改革の検討作業がいつのことであったかを神尾は記していないが、モンゴル人民共和国でキリル式文字導入のための正書法を決定したのが1941年末であった点や神尾らが結論を出す前に満洲国瓦解で中止になった点を考え合わせると、1944年頃の出来事と想定される。

神尾らの文字改革論議と関連するかは明らかでないが、ちょうどこの1944年に刊行された『新モンゴル』第4号には、チョグジラン、チンゲルテイら日本留学中の学生4人が「(新しいモンゴル文化教育を興隆させるには新しいモンゴル文字を用いることが妥当であるという論説) Sin_e mongxul-un soyul bolbasural-i delgeregülküi-dür sin_e mongxul üsügi kereglebesü jokiqu sigümjilel」[Čoxjilang ほか1944]という一文を掲載し、モンゴル語の表記にラテン文字を採用すべきという見解も表明している。この論考の中で、ウイグル式モンゴル文字の習得が困難な原因として、語頭・語中・語末で一つの文字の形が変化する点、異なる母音・子音を同じ文字で表記することがある点などを挙げ、ラテン文字の採用でこうした欠点を克服できると述べた。さらに、横書きになれば数式を含む文などが表記しやすくなること、欧米言語から借用した外来語をモンゴル語に翻訳せずにそのまま表記できることなどの利点を主張していた。

- (19) 例えば筆者は、満洲国で刊行されたモンゴル語月刊誌『鉄騎 Temür Moritu』の第1期第3号(康德6(1939)年2月号)〔満洲国治安部参謀司調査課、菊版、全92頁〕、モンゴル語新聞『精軍 Qurča Čirig』第25号(康德6(1939).5.1)〔満洲国治安部参謀司調査課、タブロイド版、全4面〕をそれぞれ1号分所蔵する。満洲国で『鉄騎』誌が刊行されていたとの情報は[Šuxar_a1987:22],[忒莫勒2010:384]に記されている(忒莫勒氏は誌名のモンゴル語を「Temür Moritu Čirig」、編輯者を「満洲国軍事部」と誤記している)。同誌は大阪外国語学校蒙古語部第10回(1934年3月)卒業生で、満洲国の蒙古会館に勤務しモンゴル語新聞の編集に携わっていた故・徳廣彌十郎氏の遺族より譲り受けたものである。また、『精軍』紙は注11に述べた澤正信氏の遺族より譲り受けたものである。なお、『青旗』14号(1941.6.21)7面のエルデムテウグスのモンゴル語小説『(春風)Qaburun salkin』の前言の中には、モンゴル語刊行物として『青旗』、『精軍』、『鉄騎』(ただしモンゴル語表記は「Temür Mori」)の3紙誌が挙げられているので、当時は広く知られた雑誌であったと思われる。
- (20) 石瀆文庫が所蔵するモンゴル語定期刊行物について言えば、利用者がマイクロフィルム化された『青旗』紙、『児童新聞』、『蒙古新報』を閲覧できるようになったのが1990年代後半からで、それ以前は書庫の中の普段は施錠された囲いの中で図書館員立会いのもとで閲覧していた。その後、2005年頃には、マイクロフィルムから複写したと思われるA3サイズの紙面を閲覧室で落ちていて閲覧できるようになった。また、『奉天蒙文報』は1990年代にはマイクロフィルム化されていなかったが、2002年に筆者の要望に応じてマイクロフィルム化がなされ、その後A3サイズ

に印刷されたものを閲覧可能となった。なお、石濱文庫モンゴル語貴重資料は昨秋より大阪大学総合図書館に移ったが、閲覧用の複写物が用意できていない資料は閲覧不可という状況にある。

- (21) 1987年刊行の書籍『(サイチンガー)』に含まれる世界著名人の名言集『(心の光) Jirüken-ü Gerel』は、1999年刊行の『(サインチョグト全集) Na. Sayinçoxtu-yin Bürin Jokiyal』第7巻にも収録されている。しかし、全集版では、1943年版および1987年版にあった176句のうち6句が削除され(乃木希典の3句すべて、ムッソリーニの2句すべて、チンギス・ハーンの1句)ほかにも4句の中の一部が削除されている[拙稿2004a]。全集版にはこうした削除や改竄が見られるため、1987年版のほうが信頼のおけるテキストであると言える。
- (22) エルデムバートルは雑誌『蒙古文化』第2巻第1期(1940.1)と翌第2期(1940.2)にモーパッサンの代表的短篇小説の1つ「首飾り La Parure」を漢語訳からモンゴル語に重訳し、発表した([Šuyar a1990:50]、[二木2001:30]、[拙稿2008:50])。このように西洋文学作品に接し、自ら翻訳まで行っていたからこそ、モンゴルを舞台に、近代的自我を有し民族の発展を希求しつつも恋人との幸福を望まずにいられない青年を一人称で描いた短篇作品を生み出すことができたと考えられる。彼は1939年9月から43年3月まで3年半、大阪外国語学校(途中、大阪外事専門学校に改称)でモンゴル語を教え、学生時代の故・福田定一(作家の司馬遼太郎)も彼の教え子であった。福田はエルデムバートルが来日前にアメリカ留学していたと述べている([司馬1978:207]など)。一方、「ロシアの軍人の学校を出て日本に渡り、軍の通訳」をしていたとの記録[高橋1970:8]や、南京の中央政治学校で学んだ後すぐに百霊廟に新設した小学校の校長を務めていたとする資料もある([拙稿2004b]、[『朝日新聞』1941年2月26日付朝刊])。また、モンゴル語教師を辞して帰国した後の彼の動向も一切不明で、彼の経歴に関しては未解明な点が多く残されている。
- (23) エルデムテグスの戯曲「(ホンゴルジョルの出征) Qongxur Jula ökin-ü čirig-tü davaysan jüčige」は『大青旗』5号(1943.9)に掲載された[二木1998]。二木氏はその後半部が6号に掲載されている可能性を指摘している。『青旗』131号(1944.3.13)2面には「初めてのモンゴル劇」と題した記事が掲載されており、3月4日に建国大学の新入生歓迎会が開かれ、日本人・漢人・モンゴル人・ロシア人がそれぞれ劇を上演したこと、モンゴル人は「ホンゴルジョルの出征」を上演して好評を博し、またこの劇が満洲国で最初のモンゴル劇となったこと、脚本は『大青旗』8号(1944.3)に掲載されることが記されている。しかし、8号は現存が確認

されていないので、この劇の後半部は不明のままである。

- (24) 翻訳は米国の作家・詩人ヘンリー・ヴァン・ダイクの短篇小説『A handful of clay』で、石井桃子：訳「一握りの土」（山本有三：編『世界名作選2』日本少国民文庫第15巻，新潮社，1936）という日本語翻訳文からの重訳であった〔内田2008：67〕。
- (25) 第1回入選作については〔田中寛2002〕，第3回入選作については〔川村1998：9-18〕，〔川村2000：82,83〕を参照。なお、『青旗』98号（1943.4.13）4面には第3回募集要項がモンゴル語で掲載されている。
- (26) 彼は1945年以降は創作活動から離れた。しかし一度だけ、1960年代に長篇小説執筆のためにペンをとったが、文化大革命が始まると自ら原稿を処分したという〔Čavan2001：40〕。
- (27) 2003年9月10日、フフホトの内蒙古医学院内のアルバジン氏宅での聞き取りによる。日本で医学を学んでいたアルバジン氏は、『青旗』紙34号（1941.11.8）から134号（1944.4.13）の間の計14号分に科学知識・医療の紹介，散文，翻訳詩を掲載していた。

参考文献

- 井上治（2005）『『FRONT』モンゴル語版をめぐる』『平成14年度～平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）（2）「戦時下，対東アジア戦略と広告宣伝」研究成果報告書』，pp.11-34
- 内田孝（2002）「内モンゴルの詩人サイチングの日本留学期における著作」『日本モンゴル学会紀要』32，pp.1-12
- 同上（2004a）「サイチング『心の光』各版の比較研究」『日本モンゴル学会紀要』第34号，pp.43-56
- 同上（2004b）「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師（1922-1950）」『内陸アジア史研究』34，pp.43-64
- 同上（2008）『『新モンゴル』誌第2号とモンゴル人留学生による文芸活動』『北東アジア研究』14・15，鳥根県立大学北東アジア地域研究センター，pp.225-243
- 同上（2008）「近代内モンゴルにおける文学活動と表現意識」，大阪大学博士論文
- 宇野章1998「インジナシとブフヘシク：近代内モンゴル二知識人の軌跡」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』19，pp.79-93
- ウユンゴワ（2010）「ヘーシンゲーのモンゴル民族啓蒙思想について：『奉天蒙文報（ムグデニー=モンゴル=セトグール）』を中心に」『言語・地域文化研究』15，東京外国語大学大学院，p.393-409
- ウリジバヤル（2007）「蒙疆政権期被占領地域のモンゴル文学：『青旗』新

- 聞の作家と作品：」『人文学報』388，首都大学東京都市教養学部
 同上（2009）「『フフ・トグ』紙とは何だったか：「新京」で発行されたモン
 ゴル語新聞の紹介」『中国東北文化研究の広場』2，「満洲国」文学研究
 会
 同上（2010）「「満洲国」時代モンゴル作家の創作 『別れ』（翻訳）」『植
 民地文化研究』9，植民地文化学会
 同上（2013）「『イフ・フフ・トグ』誌について」『新潟産業大学経済学部
 紀要』42
 川村湊（1998）『文学から見る「満洲」』，吉川弘文館
 同上（2000）『作文の中の大日本帝国』，岩波書店
 神尾弐春（1983）『まぼろしの満洲国』，日中出版
 司馬遼太郎（1978）「数千年の重み」（あとがき），司馬遼太郎・陳舜臣：共
 著『対談 中国を考える』，文芸春秋，pp.207-209
 高橋盛孝（1970）「戦前蒙古留学生懐旧談」，鴻山俊雄：編『日華月報』50，
 pp.8-9
 田中寛（2002）「『満洲國の私たち』に描かれた真実」『大東文化大学紀
 要・人文科学』第40号，pp.121-145
 鳥居さきみ子（1927）『土俗学上より観たる蒙古』，大鐙閣
 中島真雄（1944）『不退庵の一生：中島真雄翁自叙伝』，出版社記録なし
 新潟大学人文社会・教育科学系附置環東アジア研究センター：編（広川佐
 保：解説）（2013）『満洲国期におけるモンゴル語刊行物』（環東アジ
 ア研究叢書3）
 広川佐保（1998）「1940年代の日本の対内モンゴル政策と『フフ・トグ』
 紙」『日本モンゴル学会紀要』28，pp.29-41
 同上（2007）「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」『環日
 本海研究年報』14，pp.104-126
 同上（2008）「満洲国のモンゴル語教育政策についての一考察」『近現代
 東北アジア地域史研究会 NEWS LETTER』20，近現代東北アジア地域
 史研究会，pp.38-46
 二木博史（1998）「満洲国時代のモンゴル人文学者エルテムトゥグスの新
 発見の作品」『日本モンゴル学会紀要』29，pp.1-21
 同上（2001）「蒙疆政権時代のモンゴル語定期刊行物について」『日本モン
 ゴル学会紀要』31，pp.17-43
 同上（2002）「ボヤンマンガフと内モンゴル自治運動」『東京外国語大学論
 集』64，pp.67-88
 フフバートル（1997a）「資料編 中国領内発行古いモンゴル語定期刊行物
 （1905～1950）カタログ」『漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙

- の形成』(一橋大学博士論文)
- 同上(1997b)「植民地のことば—日本語がモンゴル語に与えた影響:『満洲国』におけるモンゴル語近代語彙の形成と淘汰」『和光大学人間関係学部紀要』2, 1997, pp.17-27
- 同上(2005a)「モンゴル語近代語彙登場の母体 - 『蒙話報』誌(一):漢字語直訳から始まったモンゴル語語彙の近代化」『学苑』775, pp.1-13
- 同上(2005b)「モンゴル語近代語彙登場の母体 - 『蒙話報』誌(二):吉林蒙話報目録モンゴル文字転写」(上)『学苑』779, pp.A10-A27
- 同上(2005c)「モンゴル語近代語彙登場の母体 - 『蒙話報』誌(三):吉林蒙話報目録モンゴル文字転写」(下)『学苑』780, pp.A10-A27
- 同上(2005d)「モンゴル語近代語彙登場の母体 - 『蒙話報』誌(四):内モンゴル自治区図書館蔵残本二冊と吉林省档案馆蔵『蒙文報』誌」『学苑』781, pp.A20-A31
- 同上(2006)「モンゴル語近代語彙登場の母体 - 『蒙話報』誌(五):近代語彙の抽出・分類及び存廃の時代別考察」『学苑』787, pp.13-25
- 同上(2007)「中国領内発行の古いモンゴル語定期行物」『学苑』799, pp.76-89
- 同上(2008)「モンゴル語近代語彙登場の母体 - 『蒙話報』誌(六):資料比較にみる外国語固有名詞のモンゴル語表記」『学苑』816, pp.A31-A39
- 同上(2012)『モンゴル語近代語彙登場の母体:『蒙話報』誌研究』, 青山社
- ボルジギン・ブレン(2012)「『モンゴリン・ソニン・ビチグ』(1909-1919)の発行状況と論調:近代モンゴルの活字メディアとナショナリズムの萌芽」『内陸アジア史研究』27, 内陸アジア史学会, pp.35-56
- 満洲国協和青少年団中央統監部:編(1942)『満洲国の私たち』, 中央公論社
- 『朝日新聞』「昔は蔣の『愛弟子』いま日本の学園に」, 朝日新聞社, 1941年2月26日付大阪版朝刊
- 『蒙古』「蒙字紙発刊」, 1943年3月号, 善隣協会機関誌, p.130
- JACAR(アジア歴史資料センター)「蒙古喀喇沁王ノ依頼ニ依リ本邦技師農業鉱山調査一件」(外務省外交史料館), Ref: B04011142900
- 同上「在本邦中国留学生関係雑件 15. 蒙古人学生ヲ収容スル学園二関スル件」(外務省外交資料館), Ref: B04011358900
- Otqunbayar (2009) <1941 on-u Köke Tur sonin deger_e neyitelegdegsen udq_a jokiyal-un sinjilel > Öbür Mongyul-un Yeke Surxavuli Erdem Sinjilegen-ü Sedkül 3, pp. 95-104
- Otqunbayar (2009) <蒙古族现代启蒙文学:1902-1947Odu üy_e-yin soyun gegeregülkü mongyul udq_a jokiyal: 1902-1947> (内蒙古大学 博士学位

論文)

- Narusayinküü, Narınyulküü (1989) Temgetü-yin Namtar , Öbür mongxul-un sinjilekü uqayan teknig mergejil-ün keblel-ün qoriy-a
- Nondaxul_a (2013) <日本殖民统治时期的《青旗》报研究 Yapun-u koluniilal-un noyarqal-un üy_e-yin Köke Tur sonin-u sudulul> (中央民族大学博士学位論文)
- Fütaki Kiroši (2002) <Sin_e-ber oldaxsan Kesingge-yin bütügel-üd> Öbür Mongxul-un Neyigem-ün Sinjileku Uqagan 2002-1 (116) , pp.50-57
- B.Gereltü (ゲレルト) (1998) 異草集 Suxu-yin Noxug_a : 1931-1945 on-u qoxurunduki mongxul uran jokiyal-un songxuburi , Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a
- Mongxul sudulul-un nebterkei toli nayiraxulqu jöblel <Udq_a jokiyal-un boti> nayiraxulqu jöblel (2002) 蒙古学百科全書・文学卷 Mongxul Sudulul-un Nebterkei Toli : Udq_a jokiyal-un boti , Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a
- Mongxul sudulul-un nebterkei toli nayiraxulqu jöblel <Sonin medege keblel-ün boti> nayiraxulqu jöblel (2003) 蒙古学百科全書・新聞出版卷 Mongxul Sudulul-un Nebterkei Toli : Sonin medege keblel-ün boti , Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a
- S.Sambuu, Kücün emkitgen nayiraxulba (1987) (サイチンガー) Sayičungx-a , Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy-a
- Na.Sayinčoxtu(Sayičungx-a)(1999) (サインチョグト全集) Na. Sayinčoxtu-yin Bürin Jokiyal , Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy-a
- Ü.Şuxar_a (ショガラー) (1987) Mongxul Ündüsüten-ü Orčin Üy_e-yin Uran Jokiyal-un Teüke , Öbür mongxul-un yeke surxavuli-yin keblel-ün qoriy_a
- Ü.Şuxar_a (ショガラー) (1990) <(大洋から真珠をすくい上げた記録) Dalai-ača subud şügügsen temdeglel> Öñir Čečeg 1, pp.49-55・64
- Tegüsbayar (2008) <Soyul-daxan doxduluvsan salxanal> 実録 巴・格日勒图教授学术研究与创作文学作研讨会 , pp.22-25
- Dumdadu Ulus-un Erten-ü Mongxul Nom Bičig- ün Yer üngkei Farčag -un nayiraxulqu jöblel nayiraxulba (1999) 中国蒙古文古籍総目 Dumdadu Ulus-un Erten-ü Mongxul Nom Bičig-ün Yerüngkei Farčag (Douratu) , Begejing-ün nom-un sang keblel-ün qoriy_a
- D.Čedeb (ツエデブ) , Wang Mandur_a (王満特嘎) nayiraxulun jokiyaju qarxuvulun jasaba (2007) Dotuxadu Mongxul-un Arad-un Sedkül -ün Gerel Jirux-un Bavulxaburiari Ariyudqal Sigüdeg (S・Buyannemekü sudulul 1) , Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a

- Čorjilang · Sečinbatu · Činggeltei · Öljejbürin (1944) <Sin_e mongxul-un soyul bolbasural-i delgeregülküi-dür sin_e mongxul üsüg-i hereglebesü jokiju sigümjile> Sin_e Mongxul 4 , Nibpun-dur büküi mongxul_čud-un qural , pp.16-27
- Konaxaya yüki, Sarangerel, Yüng Quwa nayiraxulun jokiyaba (2013) Qaxurmax Manju Ulus-un Üy_e-yin Mongxul Ündüsüten-ü Uran Jokiyal-un Sudulul , Öbür mongxul-un arad-un keblel-ün qoriy_a
- 包 贺喜格图「关于新京蒙古实务学院的设立及其特殊性的考察」『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』2015-1 , pp.1-12
- 呼和浩特市民族事务委员会：编辑（2003） 民族古籍与蒙古文化 3·4
- 呼和浩特市民族事务委员会：编辑（2006） 民族古籍与蒙古文化 9
- 金海（2008）<日本占领时期蒙古族新闻出版活动述略>『中央民族大学学报（哲学社会科学版）』4
- 娜仁格日勒（2012a）<《青旗》（Küke tuᠠ）：珍贵的近代蒙古民族启蒙思想文献> 蒙古学集刊 2, pp.1-17
- 娜仁格日勒（2012b）<《青旗》所见近代蒙古民族女子教育> 内蒙古师范大学学报：教育科学版 , pp.26-29
- 内蒙古自治区图书馆：编（1987）『建国前内蒙古地方报刊考录』
- 忒莫勒（2001）<《蒙话报》研究>『蒙古学信息』3
- 同（2002a）<民国初年的《蒙文白话报》和《蒙文报》>『内蒙古师范大学学报（哲学社会科学版）』1
- 同（2002b）<伪满蒙政部的第一个综合性蒙文月刊《蒙古报》>『蒙古学信息』2
- 同（2002c）<民国年间的几种蒙文旧报刊>『蒙古学信息』3
- 同（2004）<伪蒙疆时期的《文化专刊》和《蒙古文化》>『蒙古学信息』1
- 同（2005）<绥远蒙古文化促进会及其《醒蒙月刊》>，齐木德道尔吉：主编『蒙古史研究』8，中国蒙古史学会，内蒙古大学出版社
- 同（2006）<喀喇沁克兴额与蒙文铅字印刷>『内蒙古师范大学学报（哲学社会科学版）』1
- 同（2009）<关于清末民初哈尔滨的《蒙古新闻》>『内蒙古师范大学学报（哲学社会科学版）』3
- 同：编著（2010）『内蒙古旧报刊考录：1905-1949.9』，远方出版社
- 永花（2009）<伪满时期的蒙古族儿童文学研究>（中央民族大学博士学位论文）
- 吴恩和，刑复礼（1979）<贡桑诺尔布>，中国人民政治协商会议内蒙古自治区委员会·文史资料研究委员会：编（1979） 内蒙古文史资料 1，内蒙古人民出版社，pp.101-117

東洋文庫所蔵の近代中国資料のデジタル化事業について

相原佳之

1. はじめに

1) 東洋文庫について

公益財団法人東洋文庫は東京都文京区本駒込にある研究図書館である。東洋学分野における日本最古・最大の研究図書館であり、東洋学に関する世界五大機関の一つに数えられる。設立の契機は1917年に三菱財閥第三代当主岩崎久彌が、ロンドン・タイムズの特派員や中華民国総統府顧問をつとめたオーストラリア人ジャーナリスト、ジョージ・アーネストモリソン (George Ernest Morrison) の蔵書を購入したことにあり、1924年、モリソン旧蔵書を基礎に、岩崎久彌自身が収集した和漢書を追加して、東洋文庫が設立された。その後も計画的に蔵書が拡充され、現在の蔵書数は約100万冊、資料が書かれた言語の種類は約80言語にのぼる。東洋文庫では蔵書を閲覧室において無料で閲覧に供しているほか、客員を含めた約250名の研究員による資料研究活動を行っている。また2011年には建物の新築にともない「東洋文庫ミュージアム」が同所に開館し、企画展や公開講座などをつうじて、より多くの人々に対して、アジアの歴史や文化に触れる機会を提供している。

2) 東洋文庫 NIHU 現代中国拠点(東洋文庫現代中国研究資料室)について
東洋文庫には、人間文化研究機構(略称は NIHU)との共同研究組織として現代中国研究資料室が設置されている。

NIHU では 2007 年度に地域研究推進事業「現代中国地域研究」を開始した。共通テーマは「現代中国の学際的研究——新しい大国をどう捉えるか」であり、現在早稲田大学を中心拠点到、京都大学、慶應義塾大学、東京大学、総合地球環境学研究所、東洋文庫、愛知大学、法政大学、神戸大学の 9 拠点が連携して研究を行っている。設置から 2012 年 3 月までの第 1 期事業に引き続き、2012 年 4 月より 2017 年 3 月までの予定で、現在第 2 期事業が進行中である。

東洋文庫現代中国研究資料室は、上記事業により 2007 年に設置された拠点である。研究図書館に設置された拠点であるという特性を生かし、とくに資料研究に重点を置き、(1)現代中国の構造的・歴史的な研究に必要な一次資料を収集すること、(2)資料の長期的系統的分析による現代中国変容を解明すること、(3)上記の目的に合わせ国内外諸機関との連携を行っていくことを目標に掲げている。

具体的には、江南地域社会班・図画像資料班・ジェンダー資料班・政治史資料班・1950 年代資料班という 5 つの資料研究班を設け、資料室所属の各研究員が諸機関・大学の研究者と連携しながら資料研究を進めている。また、東洋文庫所蔵の近現代中国に関連する資料について、デジタル化してインターネットを通じて公開する事業も行っている。

本報告では、東洋文庫現代中国研究資料室が、このデジタル化事業をどのように進めてきたのかを述べ、またそこから得られた知見や将来にむけての課題などについても触れていく。

2. 現代中国研究資料室による近現代資料のデジタル化

現代中国研究資料室では、これまでに 3 つのデジタルコンテンツを公開し

てきた。以下、公開開始の年代順に記していく。

1) 図書資料公開ライブラリー(東洋文庫近代中国関係資料デジタルライブラリー)

本資料室が最初に公開したデジタルライブラリーであり、2012年1月に124タイトルで公開を開始した。その後計画的に公開数を増加し、2014年12月現在、489タイトル39,916画像を公開中である。

公開する資料は、旧近代中国研究委員会(現・近代中国研究班)収集の日本語資料20000件あまりのなかから、以下の公開方針に基づいて選んでいる。

まず、インターネット上で公開するに際して著作権上の問題がないことが大前提である。そして、他機関ですでにデジタル化していないことを原則としている。現在、国立国会図書館・アジア経済研究所・国立公文書館アジア歴史資料センターなどの機関で戦前期の日本語資料について大規模なデジタル化がすすめられているのをはじめ、他の図書館のウェブサイトやGoogle Booksなどでも資料公開が行われている。これらのサイトですでにデジタル化された画像が公開されている場合、東洋文庫で同様の作業を行う意義は薄いため、デジタル化の対象から除外している。また同様の理由から、復刻出版されている資料についても除外することを原則としている。

この資料選定方針の結果、選定された書籍は国内では東洋文庫のみが所蔵しているものの割合が比較的高くなり、小規模ながら特色あるデジタルライブラリーに仕上がっている。これは他の機関からも高く評価されている部分である。

資料公開には、Infocom社製のデジタルアーカイブシステム Infolib-DBR (Ver. 1.0) を用いている。同社製の図書館システム Hello Library に附属するライセンスによる使用である。なお、Hello Library は NII (国立情報学研究所) が運営する NACSIS-CAT へ東洋文庫の近代中国関係資料の書誌情報を登録する際に使用している。

デジタル公開に際して作成したデータは、以下のとおりである。(a)公開用

画像 (JPEG 画像で作成。文字情報のみのページはモノクロで、地図やグラフなどカラーによる情報があるページは、カラーで作成)、(b)メタデータ (CSV ファイルで作成。書誌情報、画像へのリンク URL、検索用目次テキスト、目次情報 HTML へのリンク URL を記入)、(c) 目次情報 ((b) に追加するための検索用テキストのほか、閲覧の便のため別に HTML ファイルも作成)、(d)画像公開資料一覧 (PDF ファイルで作成)。

これらのうち(a)、(b)はデジタルアーカイブシステムに追加し、(c)の HTML ファイルと(d)は FTP ソフトでレンタルサーバーにアップしている。レンタルサーバーへのアップはもちろん、デジタルアーカイブシステムへのデータの追加や更新も、メンテナンス業者やシステム担当者を介さずに行えるため、追加データが出来上がった場合や、誤りが発見された時に素早く対処できる利点がある。また、データがシステムに依存しない形式であるため、将来的に他システムへの移行も行いやすい。

現行のこのシステムは、個別のデジタルコンテンツとして公開するには利便性が高いものの、他のデータベースとの連携等を視野に入れた場合には課題もある。一つは、書誌詳細画面への固有の URL が生成されないため、他機関作成のデータベースとの連携が困難な点である。また、メタデータが東洋文庫の書誌情報や NACSIS の書誌情報と独立した CSV ファイルとして存在しているため、書誌情報に変更が生じた場合に、それを手動で反映させる必要がある。このような課題には、他機関や東洋文庫のデータベース担当者と連携をとりながらシステムの改善・入れ替えを含めて検討していく予定である。

2) 写真公開ライブラリー (1) 柏原英一写真帳

現代中国研究資料室が構築するライブラリーのもう一つの柱として、写真帳の公開がある。その第一弾が「柏原英一写真帳ライブラリー」である。故柏原英一氏が遺したアルバム、市販のスクラップブックで7冊、約800枚の写真を2013年8月に公開した。

柏原英一氏は1914年生まれで、1938年～1942年にかけて漢口に駐留して

いた部隊で断続的に報道部員として活動した。写真はこの中国滞在時に氏が撮影し、帰国後に自ら整理したものである。柏原氏が2009年に没した後、共同通信の上嶋茂太氏を通じてご遺族から現代中国研究資料室がこのアルバムの寄贈を受け、京都大学地域研究統合情報センターと共同で整理・公開する運びとなった。

現代中国研究資料室では、写真帳を簡便に公開できる方法として、ロゴスウェア社のデジタルブック作成ソフト Flipper U を用いてデジタルブックを作成し、ウェブサイト用サーバーにアップすることとした。ブックの作成に用いたのは、公開用 JPEG 画像と、検索用 CSV ファイルである。検索用には、柏原氏が写真に付した写真解説文をすべて入力した。

このライブラリーは、簡便なシステムでの写真帳公開の試行事例としての位置付けであった。また、国内・国外の民間に多く所蔵されているであろう同様な個人写真帳を公開するための呼び水となることも期待して、ウェブサイト公開時に情報提供の呼びかけも行った。

なお、公開後の反応として、柏原氏が滞在した漢口のある中国湖北省武漢市からのサイトへのアクセスが非常に多かったことも特筆される。

3) 写真公開ライブラリー(2) 亜東印画輯データベース

写真帳公開の第二番目として2014年3月に公開したのが、「亜東印画輯データベース」である。

『亜東印画輯』は、大連に本部を置いた亜東印画協会が1924年～1944年に刊行した写真資料である。1枚の写真が100～250文字程度の解説とともに台紙に貼られ、10種類の写真を1セット(1回)として購読会員に毎月頒布されていた。内容は、同協会に所属する日本人写真家が中国・朝鮮・モンゴル地域において撮影した風俗や民情、自然風景、歴史的建造物などであり、当時の様子を伝える貴重な資料であるといえる。また、印刷写真ではなく現像した生写真を用いている点で、写真技術等の面においても興味深い資料である。東洋文庫では『亜東印画輯』の第1回～212回(1924～42年)を所蔵しているが、購入記録等から、同時代的に毎回購入していたことが分かる。

現代中国研究資料室がデジタル公開したのは、東洋文庫が所蔵する第1回～212回(1924～42年)、および京大人文研が所蔵する第213回～230回(1942～44年)である。また、東洋文庫所蔵分の中で写真が欠落しているものについて、京大人文研で補充撮影し、別冊として公開した。分量は16冊、約2000枚である。

公開は柏原英一写真帳と同じ手法で、Flipper U を用いてデジタルブックを作成し、ウェブサイト用サーバーにアップした。デジタルブックには、画像のみではなく、写真解説文と、写真一枚ごとのタイトル等を CSV ファイルで追加し、検索の便を供した。また別に写真タイトル一覧を PDF ファイルで、全体の入口となるページを html ファイルで作成した。

写真解説文を全て入力し、検索できるようにしたのは、本ライブラリーの大きな特色となっている。検索の便を図るため、旧漢字を中心とする原文どおりのテキストのほか、新漢字に変換したテキストも追加している。これらのテキスト入力には、多数の方々の協力を得た。

今後の課題としては、現在1冊ごとにしかできない解説文検索について横断検索を可能にすること、および検索方法の多様化があげられる。多様化の方法としては、撮影された地点や時期、撮影者、被写体の種類などによってタグ付けをすることが、利用者によりよい情報を提供することになる。またタグ付けに際しては、他との連携を考え、普遍的に提供されている共通化したタグを用いることが求められるであろう。

またこのデータベース構築と並行して、東洋文庫の所蔵する『亜東印画輯』と、日本大学・東北学院大学・京都大学で所蔵する『亜東印画輯』の撮影画像や現物との比較作業を行った。日本大学文理学部を通じて、日本大学・東北学院大学所蔵分の撮影画像を提供していただいた。また京都大学地域研究統合情報センターを通じて京大人文学研究所図書館に便宜を図っていただき、所蔵する現物を閲覧した。

それぞれの比較作業の結果、各館が所蔵する『亜東印画輯』に、書誌情報だけでは分からない違いがあることが認識された。解説文、写真のトリミング、写真の残存状況の違いなどである。こうした違いは主として頒布時の版

の違いによるものと考えられ、未だ不明な部分の残る写真帳の頒布状況を知る手掛かりになる可能性もある。また東洋文庫所蔵のものの一部写真は軍事機密法により剥がされて持ち去られたという記録があるのに対し、京大所蔵分は剥がされていないということも、着目すべき情報である。本デジタルライブラリーは、こうした比較作業をするためにも大いに貢献できるであろう。

なお、現代中国研究資料室では現在、『亜東印画輯』と同様の工程で同時期に出された写真帳『亜細亜大観』のデータベースを作成中であり、2015年3月に公開予定である。

4) 資料撮影作業について

最後に、デジタルライブラリーを構築するための資料撮影作業についてまとめて述べておきたい。

現代中国研究資料室では、資料の保存活用やデジタル化を専門とするNPO 法人デジタルヘリテージデザインにデジタル化のコンサルティングおよび撮影・画像加工の実務を委託している。

撮影は、移送にともなう資料への負担を最小限にするために東洋文庫内の専用スペースで行っている。撮影後には、保管用としてRAW データおよびTIFF 画像、利活用向けとして圧縮率の低いカラー・モノクロのJPEG 画像、公開用として加工したJPEG 画像の納入を受けている。画像加工方法は公開方式により変え、図書公開ライブラリー向けには東洋文庫の透かしを入れた高圧縮JPEG 画像、写真公開ライブラリー向けにはデジタルブック作成時に最適な見栄えになるようにトリミング加工した高圧縮JPEG 画像としている。なお、画像加工作業も東洋文庫内でおこなっている。

業務委託先のNPO 法人とは、撮影のみならずコンサルティングを含めておこなう契約になっており、継続的な関係のもと、撮影方法、納入画像の仕上がり、公開方法などについて常に話し合いをしながら作業をおこなっている。これはデジタルライブラリーを比較的順調に構築できた大きな要因の一つである。

また、同法人は資料保全技術に関する専門知識を有しているため、デジタ

ル化作業と同時に資料の保全作業も適宜おこなっている。とりわけ 2015 年 3 月公開予定の『亜細亜大観』は、写真や台紙が汚れていたり、写真どうしや写真と台紙が貼り付くなど状態が劣悪であったため、撮影と併行して大規模に保全作業を実施した。同法人に所属する専門家の手ほどきを受けながら、東洋文庫の人員が保全のためのクリーニングや、写真用ゼラチン等を用いた写真補修作業をおこない、デジタルライブラリー公開後は、『亜細亜大観』の原本を貴重書庫に収蔵し閲覧禁止の措置をとることとした。

この事例は、資料の保全とデジタル化を同時に実行できた事例であり、今後も参考にしていきたい。

3. 今後に向けて

以上、東洋文庫現代中国研究資料室がおこなってきた近代中国資料のデジタル化について述べてきた。さまざまな形での協力者に恵まれたこともあり、小規模ではあるが、特色のあるものが構築できた。

公開後の反応については、決してアクセスが殺到するほどにはならないが、一定の評価を得ている。とりわけ、外国語対応のページを作っていないにもかかわらず、中国大陆や台湾、米国等からのアクセスが相当数あるのは、公開している資料が価値をもっているためであろう。また、サーバーの不具合や公開資料の誤りを利用者から指摘されることで、きちんと利用されていることを感じることもある。

今後は、利用者の声に耳を傾けつつ、外国語対応ページの作成や検索方法の多様化などに注力していく必要がある。さらには、公開したデータベースを利用した研究者との緩やかな連携や協力も視野に入れていきたい。

また、東洋文庫の蔵書検索データベースとの連動、「東洋文庫ミュージアム」におけるデジタルコンテンツを利用した展示などをおこなうことで、さらなる利用者の増加を図ることができるであろう。

さらなる課題として、同種の資料を所蔵する機関との連携がある。周知の

ごとく、近現代に日本の政府や諸機関がアジアと関わるなかで作成された資料は膨大にあるものの、多くが各地の諸機関に分散所蔵されている。資料のデジタル化と公開を契機として、こうした情報をできるかぎり一元化していくことが求められるであろうし、実際にいくつかの試みも始まっている。現代中国資料室としては、これまで単独での閲覧を基本に構築してきたデータベースそのものを連携しやすいものに構築し直していくと同時に、各機関との恒常的な情報交換をさらに積極的に行っていく予定である。

なお前記のように、現代中国地域研究推進事業の第2期は2017年3月で終了する。その後の事業のあり方については現在検討が進められているが、いずれにしる構築したデジタルライブラリーのデータや更新作業の引き継ぎが必要になるであろう。今後は諸機関との連携と合わせ、この引き継ぎを支障なく実行するという課題にも対応していく必要があると考えている。

附録：関連 URL 一覧

[現代中国資料室関連]

- * 人間文化研究機構 (NIHU) 現代中国地域研究
<http://www.china-waseda.jp/>
- * 現代中国研究資料室
<http://www.tbcas.jp/>
- * デジタルライブラリー集 (各デジタルライブラリーへの入口)
<http://www.tbcas.jp/ja/lib/>
- ・ 東洋文庫近代中国関係資料デジタルライブラリー
<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib1/>
- ・ 柏原英一 (1914~2009) 写真帳
<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib2/>
- ・ 『亜東印画輯』 データベース
<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib3/>

[東洋文庫の近代中国資料デジタル化 (現代中国研究資料室作成成分以外)]

- * 全データベース入口
http://192.168.0.22/db_select.html
もしくは、東洋文庫 <http://www.toyo-bunko.or.jp/> より「蔵書・資料検索」

- * 国立情報学研究所デジタル・シルクロード・プロジェクト 『東洋文庫所蔵』
貴重書デジタルアーカイブ
<http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/>
- * モリソンパンフレット
<http://124.33.215.236/morison/MorisonListTop.php>
- * 雑誌 『北支』 (昭和 14 年 ~ 18 年)
<http://124.33.215.236/research/hokushi/hokushi.php>
- * 中国祭祀演劇関係写真資料データベース
<http://124.33.215.236/cnsaigisaienchigi/chugokusaishiengeki.php>
- * 中国祭祀演劇関係写真動画
http://124.33.215.236/movie/index_movie.html
- * 中国経済史用語データベース
<http://192.168.0.22/yogokaiopen/index.php>

討 論

堤一昭：これから約1時間余り討論ということで、時間を取ってごさいます。先生方のご発表に対し、質疑の時間を取りたいと思います。

今日は、堤から次に周太平先生、吉田豊子先生、内田孝先生、相原佳之先生が話をされました。その間に『フフ・トグ』の参観もありました。質問がございましたら、お願いします。ご質問のある方は、挙手されて、お名前と今どこにいらっしゃるかを最初におっしゃった上でお願いいたします。

最初の「石濱純太郎と石濱文庫：整理・調査・研究の現状」で話した内容に関してお願いいたします。レジユメの頁数が多かったのは、資料として役立つかと思い、詳しくにしました。

窪田新一：大正大学の窪田と申します。今日は大変面白い話の会に参加させていただいて、ありがとうございました。堤先生の話の中で、教えを乞いたいところがあります。村上正二氏⁽¹⁾の所蔵、書籍その他をすべて、大正大学の図書館が引き受けまして、この整理をやっと今年から始めました。頭を痛めているのは原稿類、メモ類です。どのように整理を今後される予定なのか、その先のデジタル化をどうするのかをお聞かせ下さい。

堤：ありがとうございます。今、窪田先生のおっしゃったメモ類、原稿類

が石瀆文庫においても、整理の中で一番立ち遅れて、手がつけれないままだった部分です。石瀆先生の場合、晩年あまり整理されていなかったらしく、訪ねられた加藤九祚先生が「(ご自宅は)ほとんど手入れはされていなかった」⁽²⁾と書かれています。そっくり受け取って、最初の計画では、石瀆家の書斎を再現する案があったようでしたが、無理でした。目録は作ったけれども、難しい部分は、直接の専門の方がいらっしゃらなかったのも、何もしていない。日本近代史の先生に、近代の書簡や原稿類は、どんな扱いが適当なのか教を乞おうと思っています。書簡、原稿に関しては、今日をご覧くださいだけませんでした、持ってきたままです。石瀆先生の東大の卒論もそこに混じっている状態です。まずはそういうものを、「もんじょ箱」という、『フフ・トグ』が入っていたような材質の箱に、全部ともかく移しかえよう。そこからスタートです。原稿類は、古稀記念⁽³⁾に、詳細な著作目録がありますので、それと照らし合わせる形で、対応するものを整理していく。西夏語研究のメモ類がありますので、分かる限りはまとめていく。それ以外はどうか今のところ方針は立っていません。

窪田：ありがとうございます。

堤：次に周先生の「近年の内モンゴルにおける『満蒙』関係資料研究の現状」のお話でお聞きになりたいことございましたら、いかがでしょうか。発表者のほうから補足がありましたら、お願いします。

周：ハンドアウトの最後の部分に「課題」として書いたのですが、今後のデジタルアーカイブを考える際に、デジタル化に馴染まない資料をどうするかという問題があります。

堤：そうですね。

周：文字資料については、とりあえず現在のプロジェクトで着手し、復刻版の刊行を実現しました。これに対して、実物資料と個人情報にかかわる問題にどう対処するかという問題があるように思います。実物資料については、例えばモンゴル医学の道具とか、薬を作るためのいろいろな道具とか、乳製品加工の道具とか、また古い時代に使われていた印刷機とかですが、これらは今日、保存方法が定まらず、消失の危機にあります。こうした状況をどう

すればよいかという問題です。

堤：私もこのあたりどうかと思っておりました。

周：もう一つの問題は、複製版の刊行やデジタル化にともなう知的財産権の問題です。もちろん私たちの仕事は、売れる本を出すことではなく、資料の社会的活用という目的が主眼にあります。このことと著作権や知的所有権の問題は別問題で、しかるべく処方しなければなりません。中国の法律では、著作権は死後 50 年経てば消滅することになっていますが、それで知的所有権の問題がすべてクリアされたということになりません。従って、北京の著作権保護センター（中国版權保護中心）に登録し、著作権や知的財産権に関わる問題が生じた場合に対応するよう検討を進めています。

堤：これは、デジタル化に馴染まない資料の保存、今、周先生が、医学の道具とか、乳製品を作るためのいろいろな道具、印刷機械。こういった参照すべき価値がある物の公開や保存。こういう問題は、今日、小長谷先生がいらっしゃっています。民博では、何か参考になるようなことがあるでしょうか。

小長谷有紀：人間文化研究機構の小長谷と申します。先ほどご紹介いただいた地域研究推進センター長をしています。現代中国、現代インド、イスラームという3つの地域研究推進事業を実施しています。

私の前の職場の民博(国立民族学博物館)のことを聞いてくださいました。標本資料と呼ばれる物質文化について、現在、民博が進めているのは、物の情報を研究者だけが作るのではなく、それを使っていた人たちが情報を加えられるシステムを作りつつあります。でも、ウェブ上で自由に加えられるようにしたら、Wikipedia になってしまいます。そこで、コレクションをまず限定して、そのコレクションについて、書き込み内容を拡充する国際共同研究チームを編成して、書き込み内容を固めていく。そのように部分的なコレクション単位で進めていく。予算がついて、今年はこれ、次はこれという形です。何万点、何十万点というのをいっぺんには無理なので、公にできる物からやっていくという形になっていて、フォーラム型と称しています。デジタル化は、物については、ぐるりとまわりを見せたり、現地語での発音をつ

けたり等、QTVR (QuickTime VR) を使って「見せる化」に取り組んでいます。情報が増えると回線が細い場合はたいへんでしたが、環境の改善にともない、情報はますます増えてもよくなっています。三次元データとか、カラーだとか、重くなくても対応できていると思います。このように情報環境がよくなると、結局、それを有効に使いこなすだけの、書き込める内容があるかどうかということが大切なので、そちらを増やす必要があります。写真を撮った人が生きている間に聞けばたくさん書けるけれど、撮影者が亡くなると書けることは消えてしまいますね。他の人には人が映っているとか、木が映っているとしか付けられません。それはメタ資料なのですけれど、そんなタグを付けるにしても、画像自体を画像として検索できる技術開発を待つよりも、やはりタグがどれだけ付いているかで検索できるほうが速いわけです。そうすると、タグをどれだけ付けられるのかという、書き込みの共同研究というのがないと、すごく貧弱なデジタル化になってしまうだろうと思います。

それとは別に聞いてもよろしいですか。

堤：お願いします。

小長谷：周先生のお話の冒頭に「溝」があると。この時期を研究することの微妙な問題をお話になりました。最初に資料の問題の違いをおっしゃいましたけれども、研究すること自体について、こんな時代のこんなことを研究しているという点が問題視されるかどうか、現状はどうでしょうか。教えてください。

周：そうですね。日本では、近代の植民地時代とか、現地でのかつての回想とか色々な目的で満洲国研究が行われ、資料の公開や吟味も盛んに行われていますね。中国の場合、満蒙地域が歴史上中央政府から自立したというプロセスもありますし、またいろんな民族、主に満洲族、漢族、モンゴル族の複雑な関係もありましたので、それはやはり歴史観というより、国家の歴史認識の観点からデリケートな問題とならざるを得ない部分があると思います。先ほど述べたように、1990年代なかばに一部の研究者たちが満洲国の時代とそれにかかわる満蒙資料は非常に重要であると提起しましたが、このこととは別に、国家の科学研究指導部門が個々のプロジェクトや研究を認可

するか否かの審査において少なからず影響を与えることとなります。もちろん、個人的興味から何かを研究してもそれを公開しない場合には問題とはなりません。公開の場面では問題化することがあります。例えば、2011年に田中先生たちが、堤先生もいらっしゃった内モンゴル大学での国際シンポジウムにおいて、日本からの研究者が「偽満洲国」の「偽」を使わなかったことが、後になってちょっと問題になりました。私は、著者が便宜的にそのように書いてしまっただけで、何らかの政治的意図があるわけではない、と説明しました。この点では、内田さんが紹介されたように、満蒙時代資料、モンゴル語新聞『フフ・トグ』についても利用者による改ざんや改編による公開という事例がよくあります。満洲国期はまさにそのような時代であり、かつ今日の歴史的記憶の問題もあるため、それを研究したいという動きは、中国の本土にも内モンゴル地域にも存在します。内モンゴルでは、このような研究テーマは、毎年行われる研究プロジェクトについての審査によくあがってきますが、その際に、重要な課題ではあるがデリケートな内容を含んでいるために、「擱いておく」という判断がなされることはよくあります。

小長谷：ありがとうございます。

堤：今出てきましたが、実際に使っている人の書き込み、情報がなければ、それが分からなくなってしまうというのは確かにあります。写真でも、デジタル化されたものでも、分からなくなる。周先生が例に挙げた医学道具、乳製品を作るための道具とか、デジタル化に行く前に、そういう情報をためておく。それがすごく大事だなと思います。そのお話の時に思い出したのが、日本では民俗学の宮本常一がたくさん写真を撮って、晩年にこの写真は何を意味しているのかを教育しようとして、しきらないうちに亡くなった。今、故郷の山口になるかな。

小長谷：島ですね。

堤：周防大島の何町かな。そこに全部の写真資料があるのです⁽⁴⁾。その写真から読み取れる情報のタグ付けまでなされているかは分からない。同じようなことが彼の先生である澁澤敬三の写真についても、いつ頃でしたか、神奈川大学の大きなプロジェクト⁽⁵⁾で...

小長谷：非文字資料。

堤：非文字資料で試行錯誤した know-how が、この場合は「溝」なしで情報交換できるかなと思いました。ありがとうございました。

田中仁：この話題に関連するかもしれませんが、議論の出発点として発言させていただきます。このセミナーでは、『フフ・トグ』という満洲国時代のモンゴル語新聞を素材として、その保存とデジタル化による公開、公開する場合も館内での公開とするかあるいはウェブ上での公開とするかという課題があり、さらにそのことを考えるうえで知的財産権の問題をどのように議論の俎上に上げていくのかの問題、さらに交流と共同研究をどのように構築しうることかという問題、あるいは課題群の広がりイメージしておりました。

そこで、ここまでの話題との関連から『フフ・トグ』のデジタル化に当たって、それぞれのデータにどのようなタグをどのように貼りつけていくのかという問題があるように思います。『フフ・トグ』の場合、モンゴル語でメタデータが整理されることは当然であり、そのこと自体とても重要であると考えますが。その一方で、これを利用できる人というのは限られてしまいます。実際に、大阪大学において『フフ・トグ』をどのように保存し、公開し、デジタル・データを構築しながら共同利用と共同研究をどのように構想するのかというふうに考える際に、はたして何語で、またどのようなタグを整理していくことが好ましいのか。このような問題群について、東洋文庫の先駆的事例を参照したい、このこととともに中国での事例とどのような接点をもちうるのかを構想してみたいと考えました。まずは「ことば」の問題をどのように考え、どのように整理していけばよいのでしょうか。

堤：どうでしょう。これは発表者の先生方にも向けられた話でもあるし、全員で。

小長谷：私の持論を言っていていいですか。

堤：はい。

小長谷：やはり、研究者のあいだでは緻密に、完璧にやりたいという気持ちがあると思うのですが、完璧主義をめざして、全部ローマ字で転写というのをし始めたら、なかなか完成せず、途中で終わってしまうかもしれあ

ません。あれだけやろうと思ったら何年もかかってしまいますね。

鉄綱：そうですね。

小長谷：けれども、自分の研究のためにどうせ読むわけですよ。読むだけだったら速いから、読む時に、せめてキーワード、ここに何が書いてあるというようにキーワードだけを本文のところにラインを引いて、それをラテン文字にしておいて、翻訳してというように、最低限、人に役立つ見出しというか、タグを一頁に二箇所ぐらいとか、記事ごとに一つぐらいに付けておけば、次の人はここを読むというように、全部読まなくても、探せるようになるわけです。もちろん、研究は全部読んでからやれということになるのだけれど、前の人勉強のプロセスが次の人に役立つというような形で、みんなで蓄積していければ便利だと思うのです。一人が見たときに、そういう資料を見た人は次に見る人のために残すようなシステムを作っておけばいいと思います。

実は人類学では、フラーフというシステムがあったのです。フラーフはHRAFで、Human Relations Area Filesです。委員会が世界中の研究をするのに、世界全体をカバーして、地域ごとに一押しの本をあらかじめ選んでおきます。そして、その本を全部裁断して、読みながら見出しを付けていくわけです。この本のこの辺には何が書いてあるという見出しを付けていきます。その項目は全部番号が決まっているのです。赤ん坊・子育ては何番で、その揺りかごのことだったら何番というふうに、全項目が番号になっていて、それが全部ページのスリップとして分断してコピーして収納されているのです。実物を見たい方は、民博と京大(京都大学附属図書館)にありますので、見てください。だけど、今はそのシステムがなくなりました。というのは、検索で読めるようになったから。新しく出される本に、いちいち誰かがつけてくれた索引が必要ないわけです。時代ですね。しかし、地域研究のための歴史資料にタグ付けすることは、みんなで後世のために付加価値を財産として残していく。満蒙だけではなく、デジタル化する時に、何か一つのknow-howとして取り組んでいく。それ自体は研究ではないけれど、研究支援体制というのがすごく厚くなるのではないかなと思います。

堤：ありがとうございます。では、何語がいいですか。

小長谷：そうか。それは言語がなくてはいけないし、日本がやっている以上、日本語がいるし、それで最低、その国、内モンゴルが中国にあるということを考えれば、中国語と後は、英語を付けとくか。

堤：後もう一つ大事なキーワードがありますね。あまり完璧すぎるとできない。

小長谷：そうですね。そう思います。

田中：ありがとうございます。いまのお話は、資料をどのように利用し継承していくのかという立ち位置が重要であって、タグの整理についてはあまり完璧を目指さないほうがよいと伺いました。ナランゲレル先生は、『フフ・トグ』紙の細目索引をモンゴル語で完成されたと伺っています。その概要について、このセミナーでご紹介くださるよう、お願いいたしました。

堤：ナランゲレル先生、お願いします。

ナランゲレル：ナランゲレルと申します。内モンゴル大学の教師をしていますけれども、今は民博に滞在しています。一年間なので、来年の3月にフフホトへ帰る予定です。『フフ・トグ』について、いままで少し作業を進めてきました。今、田中先生のご紹介、そして先ほど内田先生のご発表の中でもご紹介いただいたのですが、1941年分について、論文を二本ぐらい書きました。それから、民族教育、民族の啓蒙とかについてのタイトルを一応抽出して発表しました。その作業を基礎にして、去年までに完成した作業としては、ご承知のように、『フフ・トグ』の発行の期間がとても長いということと、あと情報がとても豊かで、いろんな情報が入ってしまっていて、それが最も大事だと思います。内モンゴルに関しては、日本語の資料は大量にあります。しかし、モンゴル語の資料はそれほど多くないという点で、『フフ・トグ』は、日本語が読めない、あるいはモンゴル語で研究をするという人、研究者、学者にとっては、とても大事な文献だと思います。そういうことだけを考えても、その公開というのが大きな意味を持つと私たちは、モンゴル人としてはこのように認識しています。最も関係が深い内モンゴルには、『フフ・トグ』の保存ということ、コピーの一部分しか今は持っていない。多分日

本から帰国された人たちが持って帰ったものだと思います。それから、そういう事情も含めて、日本と長春（新京）、それからウランホト（内モンゴル東部の王爺廟）で資料の調査をしました。今まで集めたのが、欠号が四号あります。先ほど内田さんのご発表の中にありましたように、61号がもし内田さんのところで確認できたら、欠号は三号になります。それから京都大学に16号もあるかもしれないといえます。

堤：ええ、1号から41号までであると。

ナランゲレル：1号から41号まで全部ありますか。

堤：全部あると書いてありました。

ナランゲレル：それがもし確認できましたら、16号もありますから、あと二号が欠号になります。それでほぼ完全というか、かなり集まっていますので、その公開に向かって、現物の確認作業がまた一歩進んだということになります。私が何をしたかという、一つは収集の確認、もう一つはタイトルの目録を作りました。その作業は今完成しています。写真もそして色々な図もありまして、漫画みたいな、書道、モンゴル文字を書道ふうにしたものを絵の形で表現したりしたものをすべて含めて目次を作りました。ただし、今のご発言の中にありましたように、何語でそれを公開するのか、デジタル化の過程で、データベースのようなものを作るという時に、書き込みは何語でするのかというのが、多分これからまた考えなければいけないことになります。細目編集という、目録整理作業はモンゴル語だけで作りましたので、それを少なくとも、今からはラテン文字での転写、まだそういう作業が必要となると思います。こういったことも含めて、大阪大学と東洋文庫などとの共同研究を今後もまた進めていきたいと思っています。以上です。

堤：ナランゲレル先生、ありがとうございました。

周：すいません、ちょっといいですか。

堤：はい、どうぞ。

周：さきほどの田中先生の問題提起は、とても重要であると考えます。まず、これを日本でね、内モンゴルの場合は、ナランゲレルさんは完全な細目を完成させていますが、これを日本で用いる場合、あるいは『フフ・トグ』

の資料的重要性についての国際的認知を獲得し、また多くの研究者のアクセスを促すことを考えれば、モンゴル文字のラテン文字転写はどうしても必要でしょう。それから『フフ・トグ』の特徴として、ほとんどタイトルを拾うことができるのですが、タイトルのないコンテンツも存在します。さらに写真や漫画などを多用しています。これらの豊富な素材については、工夫して日本語訳をつけて見るのもよいかも知れません。もうひとつ、この間、桜美林大学のバイカル先生による『フフ・トグ』研究会があり、そこでは同紙所載のタイトルの日本語訳とラテン文字転写の蓄積があることを知りました。この研究会との交流から、同紙のデジタル化と公開について、新たな展望を得ることができるかも知れません。

堤：ありがとうございます。いろいろ取り組みがある場合、これは相原先生のほうが詳しいでしょうか。東洋文庫で作業をされていた時に、後からデータ、タグを付け足しやすいか、付け足しにくいかという問題、システムの問題とか、後から情報を付け足しやすくするためにはどうしたらいいか、こういう仕事を合体して新たにより良い形にする時の工夫について、何かお気づきのことを教えていただけますか。

相原佳之：そうですね。タグ付けとか、情報追加に関しては、東洋文庫のほうでも、本当にこれからの課題ということになります。ただ一つ、最近では、図書資料にしる、写真資料にしる、その機関だけではなくて、いくつかの機関が共有で使えるようなタグ付けやフィールド設定の方式が公開されています。そういうものを少し情報共有といいましょうか、みんなで学んだ上でですね、そこに合わせられるものは合わせた形で入力していくとか、そういったことも考えていく必要があるのかなとは思いますが。あと、言語の問題に関して、一つ考えたことがあります。今までの話のなかで、どの言語でタグを付けるかという課題が挙げられていました。例えば、先ほどのお話しでは英語、中国語、モンゴル語、日本語の、その四つ全部のフィールドに入力していくという形が想定されていたかと思います。ただもう一つの方式として、言語の変換テーブルを用いる方式も考えられると思います。システム上うまく行かない場合もあると思いますが、例えば、日本語の単語と英語

の単語の変換テーブルを一つかませることで、英語を使う人は英語用の検索窓から検索したら、日本語の対応する言葉が検索できるようにすることもできます。例えば、英語で「レッド」という単語を検索語として入力したら、日本語で書いてある「赤」のタグがついている資料を検索することができるようにする、といったものです。そういった変換をかませるという方式でも考えられるかなと。もちろん、基礎となるモンゴル語とか、中国語とか、日本語などは、入力してもいいのかなと思いますけれども、仮にもっと多言語に対応する必要があった場合は、今は辞書の単語変換リストなどもいい形でできていますので、こういった言語のテーブル変換をかませて検索するというのも一つのアイデアとしてはあるかなと思います。

小長谷：つまり、言語が障壁にならないということですね。コンピューターが文章を理解するのはかなり難しいですけど、単語レベルでしたら、簡単に自動的に置き換わるので、将来的には何語に入れても何の問題もない。入れたい言語を入れればいいということになるということですよ。だから、基本は何れかの言語で書いているかという、その本来のオリジナル言語というのが大事ですね。

堤：それも全部一気に揃ってから入れるのではなく、まずすでに言語があるのならそれでやって、システムの、後から日本語なり、英語なり、漢語なりを足していける。そんなものが出来たらいいなと思います。

相原：もちろん、その単語のリストのほうに限界があれば得られる検索結果にも限界があるので、完全に多言語対応というのは難しいと思いますが、それを足掛かりとするには非常に効果があるかと思います。

小長谷：専門用語の辞書は別に作らなければならないかもしれないけれども、一般用語だったら、辞書さえも持つ必要ないわけですよ。システムの中にあるから。

ところで、東アジア近・現代史資料所蔵文書館の国際連携ネットワークのちょうどキックオフが始まったばかりみたいなので、これについて、詳しく説明していただけますでしょうか。

堤：相原先生ですね。

相原：すみません。実はですね、発表の中で言い忘れたのですが、この山口大学の会議には、私は都合で参加できませんでした。ただ東洋文庫のほうから、別の担当の者が二名参加いたしました。その方の話によれば、山口大学のほうで何かこういった題目のプロジェクトを開始するために開かれたキックオフ会議だとのこと。

小長谷：山口大学では、科研での取り組みでしょうか。

相原：科研だったかどうかについてはよく知りません。このキックオフミーティングにおいては、アジア経済研究所図書館の泉沢久美子先生など何人かが報告をなさったということです。聞いたところでは、やはり課題として認識されているのは、いわゆる同時期に同じような過程で作られた調査資料が、様々な理由により、国内外含めて分散所蔵されている状況があるということ、そしてその情報共有や公開をどういう形でやっていくのかということだったそうです。アジ研のほうでは多分 2000 年代ははじめぐらいにさまざまな機関と連携してやっていたと思うのです。ただそれがかなり止まっている状態になっていると思います。今回のものは、それとはまた別の形でちょっと動き出したのかなという認識です。詳しい情報がありましたら、共有させていただきたいと思います。

小長谷：ありがとうございます。似たような動きなのですが、方法論としてちょっと違うかな。館を決めて、連携相手を決めて組もうとするわけではないですか。けれども、例えば今日の内田さんのご報告のように、『フフ・トグ』に焦点を当てて、『フフ・トグ』の欠号のここと、ここを足せたら欠号がなくなるというように、コンテンツについてターゲットと決めて、それに必要な相手をそのつど探してという方法もありますね。研究者にとっては、そちらのほうが、意味が大きいと思います。

堤：そうですね。

小長谷：だから、似たようなものがこれからも出てくるだろうけれど、後発でも他を抜いていく方法があるとするれば、次は何の資料をやります、なぜなら、この資料は重要だからと宣言し、ある資料に的をしぼって、それが終わったら次はこの資料というふうには、また全然違うのを扱う。そういうやり

方が、研究者ベースのやり方になるのではないのでしょうか。

堤：発表者からも質問をお願いします。吉田先生、相原先生の話には、どのくらい大変なのか、大概なされた上で研究されているかとか、仕事の共有とか、こういう仕事で皆がされていることとか、素人くさい質問をしようと思ったのですが。

小長谷：もしよければ、「革命文献」の全体像をご教示ください。他にどのようなものがありますか。

吉田豊子：『革命文献』というと、昔は赤いカバーのものが大量に出版されましたが、それに関しては、分厚い目録も出版されています。但し、今回取り上げた『蔣中正總統檔案 革命文献』それ自体は、1990年代のなかばに公開されるまでは知られていませんでしたので、それとは別物です。この『蔣中正總統檔案』における「革命文献」は実に膨大な量がありまして、その中のごく一部はプリント版が出されていましたが、その後、なんらかの事情でこの事業は中断したみたいです。私が収集したものについては、現在でもプリント版は出されていません。

堤：ということは、写真か、マイクロから全部入力された。

吉田：そうですね。今日持ってきたものは学生時代に写してきたものです。当時、実物そのものを貸し出して、書き写すか、パソコンに打ち込むことが許されていました。今はデジタル化されてきて、パソコン画面での閲覧を申請してから、昔と同様な作業で史料収集を行なうことしかできなきないです。

窪田：プリントアウトはできない？

吉田：そうです。プリントアウトは許可されていません。

小長谷：昔の、リストができていない『革命文献』の中には載っていないということですが、ほかにも載っていないものというのはあるのですか。それとも、これだけが…。

内田さんのご発表では、改ざんというふうにおっしゃいましたけど、そういう厳しい、悪いイメージでとらなくてもよいのではないのでしょうか。そうしなければ、刊行できなかったわけですよね。一種の取引ですよね。これを

削る代わりに出す、というある種の取引が行われたとも想定されます。政治的な環境の中で、作者がやむを得ずしている取引なわけです。取引は歴史的資料では、常にいつの時代も行われている。つまり、あるものの一部を入れられないということは常に行われていて、後から見る人はそのずれを見ることが歴史を見ることになる。そういう関係にあって、アーカイブズ、生のもは、そのずれを検出するための重要なものになる。

堤：今、小長谷先生がおっしゃっていたのは、内田先生の発表のハンドアウトの4頁の「おわりに」のすぐ前あたりのことですよ。

小長谷：そうですね。文学研究だけではなく、アーカイブズの研究をする人にとっては、位置付けを教えてくれる。元本のズレとか、生資料と刊行物のズレとか、所蔵されている版ごと、京大版と東洋文庫版のズレとか。

堤：おっしゃっていたのは、（内田孝氏発表レジュメの）5）「原文の表記ミス・改ざん・削除・改ざんの問題」とある部分だと思います。ご報告の時だったか、80年代には許されていた部分が90年代になると削除されていたと。どこが許されていて、どこが削除されたかを見ることによって、当時それぞれの時期のスタンスというか、政策のスタンスが分かるということでもあるのですよね。しかし、80年代版、90年代版を見るだけではなく、その最後に書かれたように、原資料を直接確認しうる条件があって、よりくっきりと見える。ですから、原資料が見られる環境をどう提供していけるか、できる環境であればしていくということが、資料を持っているところの責任でしょうか。それがないと、相対でしか見えない。改ざんしているかもしれない、または間違っているというのは、原版が見られる環境があるからこそ見えてくる。政治的でなくても、経済的な、時間的な制約もあったのかなということが分かる。そういう原典の大事さが、内田さんの報告でこの部分を見た時に、強く感じたところでした。

小長谷：相原先生の報告でも、同じ写真でも所蔵者によって違ったり、剥がされたり、とかですね。それが人の持っている歴史の面白さなので、ということ全体が、この仕事なのではないですか。

堤：はい。その後の資料の変遷そのものも記録したり。相原先生のお話の

中で、どちらが剥がされたか、東洋文庫で剥がされたのか。

相原：そうですね。

堤：剥がされて、そこに何か書き込みがあった。そういうものも提供していくのが大切かな。あとはそれが分かる人がタグを付けるのが大事。何語でするかの問題も大変です。実現できたということがすごいなと思っていました。

小長谷：堤さんのまとめ方だと、オリジナルのほうに戻ることに意味があるように聞こえてしまいます。そうではなくて、版の利用によって変わっていくほうの後ろ、後ろにも意味があるというわけです。そういう違い、バリエーションができていくというのは、大変な仕事だけど、ネットワークでやっていらっしゃるわけですね。

相原：そうです。

小長谷：つまり、協同関係にあるということなのですか。

相原：そうですね。この所蔵館による『亜東印画輯』写真の版や状態の違いという問題については、まだ完全に比較作業が終わっていないので、ホームページで公開しているデータベースには反映していないものです。ただ、作業過程で気が付いたことを問題提起としてお話ししました。おそらく、いくつかの機関において所蔵されるものは、書誌情報は同じだけれども、刷りとか、その他の状況が違うという感じの扱いになるかと思います。私どもが今回写真帳を公開したのは、これを用いて他機関で比較していただくための材料としても利用することができるものになるかと思います。

小長谷：それがターゲット志向だと思います。この雑誌をやるうとか、このアルバムをやるうとか、優先順位を決めてやっていく。やっていくためのネットワークは別々に出てくる。最初からどこの機関とやるという形ではなく、例えば石濱文庫の資料とかにターゲットを絞って、そのための連携というような組み方をしていく。そういうやり方が研究者ベースのプロジェクトの組み方だろうという印象を強く持ちました。

堤：田中先生、どうぞ。

田中：今回『フフ・トグ』を素材に、このような研究セミナーを企画いた

しましたが、それには二つの契機がありました。一つは、堤先生による石濱文庫の整理とご研究のなかで『フフ・トグ』の重要性を強調されていたことです。もう一つは、今年度法学研究科の外国人招へい研究員として周太平先生をお招きしたことです。周先生とは、先生が旧大阪外国語大学で博士の学位をとられたとき以来の交流があり、またご専門の内モンゴル近代史の立ち位置から、歴史学者として『フフ・トグ』の重要性を伺いました。お二人が共有する課題を、20世紀中国政治史の史資料的課題として捉えなおすという東洋文庫政治史資料研究班（NIHU 現代現代中国研究・東洋文庫拠点）のミッションとして捉えなおしてみたいということが、今回の企画のそもそもの出発点でした。先日、周先生から、内モンゴルの近代にとって、牧畜管理や科学的概念の多くが日本語を経由してモンゴル語に持ち込まれたこと、そしてそれを媒介したのが『フフ・トグ』紙（と『ウラン・バルス』誌）であったという話を聞きました。このことは、明治維新以降の日訳漢語が中国にもちこまれていったことと、そのインパクトに比することができるような現象が内モンゴルにおいても存在し、かつその核心にあったのが『フフ・トグ』であったことを、実感した次第です。さらにここまでの討論を通して、20世紀東アジア地域研究にとって、『フフ・トグ』のもつ極めて重要な資料的価値を私なりに再確認することができました。

堤：ありがとうございます。今のやり取りの中で、内田先生の発表に関わることがいろいろ出てきたと思いますが、補足の事柄があるでしょうか。

内田：はい。そうしましたら、私のほうから少しお話します。『フフ・トグ』新聞については、90年頃から内モンゴルから研究者が留学生として来るようになって、その後私もこういう新聞があるというのを知って、文学研究にも活用できるということも知りまして、では使ってみようかと考え始めたんですけど。その頃は図書館も、私がコピーしようとしたら、「あなたはこの前もコピーしましたね、全部コピーする気なんですか。今日はここでストップしてください」と言われて、追い出されたことがあるのです。図書館側もそういう立場ですから、勿論これも分かるのですけれども。でもこうして私も利用して、ナランゲレルさん、タイブン（周太平）さん、それから先

ほど私の発表の中で紹介しました,リスト化作業をしているノンダグラさん,みんな大阪外大の留学生,大阪外大の関係者なんですね。みんながこういう資料の価値に気づいて,まず自分から利用して,そしてその後,ほかの人に自分はだいたいある程度使ったということで,ほかの人にも多分届くようになって,研究が広がりつつあると思います。確かに,大阪大学図書館が公開してくれて,もう少し利用しやすくなったら,さらに研究が深まっていくだろうと思っています。

堤:ありがとうございます。内田先生,周太平先生が利用されたあたりで,マイクロフィルム化とか,今日ご覧いただいたようなCD化はもっと後でしょうけども,図書館側との交渉で苦労されたと思います。何代か前の人たちに「宝物だが(未整理なので)見せない」ところがあったりして,それを乗り越えて来られたわけです。現物を見て,タイトルを写すだけというのをお聞きして,苦労されたと思いました。一方で,(所蔵資料が)大事だと気付いたために,(貴重書庫に)入ることすら大変になった。旧大阪外大図書館にあった時分も,実は檻のような格子に囲われていて,(普通の)書庫の中からも見えるけれど,そこには入れてもらえない。教員でも入れない。でも『フフ・トグ』の場合は幸い,マイクロ化したり,来た留学生,研究者に便宜を図って見せてやってくれという関係者の努力があったわけです。利用できるようにした時のお話をモンゴル語の橋本勝先生がお出でになっていたのも,最後にお伺いしようかなと思っていました。先にお帰りで聞けないのが残念です。最後に西村先生に,最初の頃,利用される時のことを,『フフ・トグ』に限らず,思い出されたこと等があれば,お伺いして,この場を閉めたいかと思います。西村先生のお世話になって,見られたという話を何人から聞いたのです。

西村成雄:三つほど,話題を提供させていただきます。石瀆純太郎氏は,市岡中学校の出身で,私は市岡高校の出身で,高等学校の同窓会でも石瀆氏の話はよく出たのですね。ですから,有名人の一人でありました。石瀆文庫との関係で言いますと,全部それを受け入れ,目録をお作りになるときに,図書館長を務められたのが外山軍治先生で,その後館長を引き継がれたのは

芝池靖夫先生でした。先生はもと満鉄調査部の方にいらっしやったので、こういう資料については、同時代的資料としてとにかくまとめる必要があると考えておられました。もちろん前任は外山先生で、金朝史研究の専門家ということもあり、満蒙研究の資料として大阪外大が全部それを収蔵できたということについては、大変喜んでおられました。それで我々も、そういう環境の中で、割合自由に閲覧することができました。中国関係では、1920年代の『申報』新聞などを見たことがありました。中央ユーラシアから東部ユーラシアにかけての歴史的な史資料が収蔵されていることに感銘を受けました。もちろん、モンゴル研究者の諸先生のご尽力はたいへん大きかったとお聞きしておりました。

二つ目は、外大が収蔵することになった『青旗』については、専門的に研究される方がおられなかったと仄聞していましたが、精松源一先生や荒井伸一先生、小貫雅男先生、橋本勝先生をはじめモンゴル研究の先生方が対応しておられたということだと思います。その後、モンゴル語学科出身の若い世代のなかで、歴史関係では、生駒雅則さんをはじめ、今岡良子さんや広川佐保さん、田淵陽子さんも石瀧文庫との関係があったと言えるでしょう。もちろん文学・言語専攻の方々も多くおられたとお聞きしておりました。広い意味で大阪という周辺の地域からそうした若手研究者が出てきたわけです。

それから、三つ目は、これはある意味では大阪という地域性に埋め込まれた中核(Core)との対比での周辺のメンタリティーが、グローバルな周辺であるモンゴルとの共鳴関係を生みだし、その周辺内部の自律性追求という共通の課題を発見してきたという論点です。ところが、周辺としての自律性をもう一度再確認する必要があるということで言いますと、ネイションステイト体系内での戦前期日本のアジアへの軍事的侵略は、自称コアからみたペリフェリーに対する軍事的・経済的な優越性の中に、それを展開しようとした論理が内在しているわけです。ですから、今後の課題としては、コアとペリフェリーという暗黙の呪縛を突破する論理は一体どこにあるのかという論点が出てくることとなります。その意味では、今日の現実の世界は、ワシントン中核との関係で東京中央政府は周边的存在であり、その限りで事大的

に対応しつつ、他方アジアにおいては、逆に自らが政治的・経済的コアであると自認しつつ、回復・回帰しつつある。もと東アジア政治中枢の中国に対する優越性が崩れることに対する恐怖心という、心理的な意味での自己防禦的政治行動のパターンに陥りつつあるとも言えます。このような周辺のメンタリティーの二重性と相互関係のあり方をリアルにもう一度認識しなおす必要があるのではないか。このシンポジウムで出していただいたさまざまな原資料に基づく分析は、周辺内部の自律性を再確認・再理解・再文脈化することによって、そのコア=ペリフェリーの自己呪縛から逃れるための重要な「視点」を提起されたのではないかと、聞かせていただいた次第です。

堀：ありがとうございます。最初、石濱文庫はかなりオープンな形でアクセスできたいです。オープンすぎて問題もあったようです。(『石濱文庫目録』の)写真の部に載っているけれど、現物が見当たらないものが若干あるようです。それが問題化したときか、直接の因果関係がどうか分からないのですが、有名な先生が「こんな甘いこと(管理)ではだめだ」とお叱りしたらしく、檻(のような格子状のパーティション)ができたという話を伺ったことがあります。その先生からは満洲語の資料、石濱文庫ではないですが『百二十老人語録』、天下の孤本です。あれはきちんと世に出さないとだめだよということも聞きました。モンゴル語の橋本先生が図書館報で紹介されています⁽⁶⁾。

最後に西村先生がいいお話をしてくださいました。この後、懇親会も開いております。この場はお開きにしたいと思います。今日は悪天候の中で来ていただき、皆さまどうもありがとうございました。発表者の方々、今日ありがとうございました。

注

- (1) 村上正二(むらかみ・まさつぐ 1913~1999)。モンゴル帝国史研究者。東京都立大学教授、大正大学教授。『モンゴル秘史 1~3』(平凡社東洋文庫)。
- (2) 加藤九祚『完本天の蛇ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社、

2011年，p.282。

- (3) 『石濱先生古稀記念東洋学論叢』同記念会，1958年。
- (4) 山口県大島郡周防大島町の「周防大島文化交流センター」所蔵の宮本常一関係資料。
- (5) 神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」、『手段としての写真 澁澤写真の追跡調査を中心に』同プログラム研究推進会議，2007年。
- (6) 橋本勝「本学貴重図書『百二十老人語録』について」『大阪外国語大学附属図書館報 Library Information』第9号，1997年，p.7。

研究

《青旗》報关于成吉思汗廟的記載

娜仁格日勒

滿洲國時期，蒙民厚生會のきもいりで，モンゴル人の総意にもとづき，金川耕作らの日本人の尽力によって東部内モンゴルの中心地王爺廟（現ウランホト）の台地にチンギス・ハーン廟（成吉思汗廟/チンギススム）が建立された。この廟にはチベット仏教寺院の建築様式と清朝宮殿や日本の皇室建築などの建築様式が取り入れられている。この廟の創建は，のちに「東のチンギス・ハーン廟，西のチンギス・ハーン陵」といわれるように近代モンゴル人の精神世界に対して持つ意味が大きく，モンゴル民族のアイデンティティーにもかかわり，民族的意識を喚起するものである。しかし，この廟が創建された経緯とその文化遺産としての性格については，不明な点が多い。今日の内モンゴルにチンギス・ハーンの廟に関する資料は残されていない。戦後，中国の政治情勢のなかで関係資料は紛失されたのである。こうした状況のなかで，日本側に保存されている文献資料は貴重である。本稿では満洲国時代のモンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』紙に記載された関連情報を確認し，その内容の一端について述べる。

奉建成吉思汗廟是对近代蒙古民众的精神世界产生了巨大影响的历史创举。“西有成陵东有成庙”或“东庙西陵”的意识观念，作为近代蒙古人的历史记忆，已经构成了成吉思汗祭祀礼仪中的一个重要表征。1956年重新建造的鄂尔多斯成吉思汗陵继承了成吉思汗廟的结构和布局。2006年为纪念成吉思汗即位八百周年在乌兰巴托建起了成吉思汗宮殿，其外形与成吉思汗廟极其相似。成吉思汗廟作为成吉思汗紀念碑这一“不朽作品”的祖型一直得以传承。但是，有关建造成吉思汗廟的历史研究尚未深入，专题论文极少。其中原因固

然很多，资料欠缺是根本原因。相关研究工作不尽如人意，成吉思汗庙建造过程中的诸多细节未得以明确，众说纷纭。

笔者在搜集整理 20 世纪 40 年代相关文献资料时发现不少有关成吉思汗庙的记载，但是这些史料还没有引起学界足够的重视。本文主要根据《kōke tuy》（青旗）报的记载，力求进一步具体了解成吉思汗庙的创建过程，以期解答学术界尚存争议的一些问题。

1 . 奉建成吉思汗庙设想的提出

对成吉思汗庙建造背景，日本人编写的《满洲国史》中有这样的记载：“作为特殊事项，宗务院成立后，蒙民厚生会几经斡旋及根据满洲国内蒙古人的全体意志，1944 年 10 月在兴安（原王爷庙）的高地上建起了壮丽的成吉思汗庙。自那以后，不仅国内蒙古人，以蒙疆的德王为首的国外蒙古人也前来参拜，参拜者年年增加，对振兴喇嘛教做出了贡献”[满洲国史編纂刊行会 1971 :1283] 。

实际上，在当时的东蒙古政治文化中心王爷庙（今乌兰浩特），成吉思汗庙奉建之前，相关祭祀活动一直在进行。但是，当时成吉思汗祭祀活动存在规模较小，祭祀时间不统一等情况。《青旗》报指出：“以前开展纪念成吉思汗诞辰活动都选择阳历五月一日或者阴历四月初六，是不准确的。应该统一在阴历四月十六日进行纪念成吉思汗诞辰活动”[kt.7,1941.4.28(3)]。1941 年兴安南省在王爷庙举行成吉思汗诞辰祭祀活动，兴安省省长寿明阿，少将甘珠尔扎布和教导队长金川耕作带领王爷庙千余蒙古人参加了活动，省长寿明阿宣读了祭文[kt.10,1941.5.24(2)]。同一期《青旗》报还刊登了蒙疆政府开展纪念成吉思汗诞辰祭祀活动的消息。从这些记载可见，最晚从这一时期起，东蒙古与西蒙古统一选定在阴历四月十六日进行成吉思汗诞辰的纪念活动。

在此稍做复述，以王爷庙为中心的东蒙古成吉思汗诞辰祭祀活动从 1939 年开始逐年扩大。自 1940 年起，成为王爷庙固定的祭祀典礼。由于以前每年进行祭祀活动时，人们感觉到没有固定场所进行祭祀，活动规模小、影响也受较大限制[kt.152,1944.10.13(2)(3)]。因此，1941 年 11 月 6 日，由“兴安军官学校校长甘珠尔扎布、兴安南省省长寿明阿和玛尼巴达喇先生出面邀请王爷庙特

务机关长金川耕作等各部长官召开座谈会，商讨并决定建设成吉思汗庙，准备召开筹建委员会会议”[kt.33,1941.11.1(3)]。据《蒙民厚生会留学生会报》记载，先由蒙古方面代表提议创建成吉思汗庙，以作蒙古民族的精神基础，与王爷庙特务机关长金川耕作进行协商，金川耕作表示赞成，并与政府中央及关东军交涉，获得了建设资金和物资。该庙的创建是由日本有识之士为帮助蒙古人统一而提出的⁽¹⁾。

于是在1941年12月20日召开了成吉思汗庙筹建委员会会议，制定了“成吉思汗庙筹建委员会制度”，成立了由巴达玛拉布坦（兴安局总裁）担任会长，甘珠尔扎布（兴安军官学校校长）担任副会长的“筹建委员会”，委员由第九军管区、第十军管区司令官、兴安各省省长和厅长、各旗长、蒙民厚生会和蒙民裕生会专务理事、青旗社长、喇嘛教宗团团长、总裁齐木德色木丕勒、扎噶尔参议等人组成。筹委会办事处设在蒙民厚生会，玛尼巴达喇担任主事官，下设总务股、基金股、建设股和会计股。王爷庙特务机关长金川耕作等日方官员担任顾问[kt.152,1944.10.13(3)]。《青旗》报的记载与那木斯赉扎布回忆录中“玛尼巴达喇担任筹建委员会副会长，并分成总务、资金、工程三个股”[涂波等1989]的说法略有出入。

2 . 成吉思汗庙的创建过程

关于成吉思汗庙的建设，1985年，张存余撰文指出：“成吉思汗庙是康德七年（1940年）5月5日破土兴建的，于康德十一年（1944年）10月10日举行落成典礼”[张存余1985]。1989年出版的《乌兰浩特成吉思汗庙》记载：“成吉思汗庙于1939年（康德七年）5月5日破土，1944年夏季集工，同年10月10日举行落成典礼”[涂波等1989]。2002年出版的《蒙古民族通史》则称“1941年5月破土兴建，1944年夏季竣工”。[白拉都格其等2002：436]2011年刊行的《蒙元文化研究》仍讹误，认为“乌兰浩特成吉思汗庙始建于1941年5月5日，1944年10月10日竣工”[古月2011]。

事实上，1942年5月5日，兴安南省省长博彦满都、蒙民厚生会会长玛尼巴达喇等军政要员齐集成吉思汗庙的建筑预定地点—王爷庙。这一天是阴历

3月21日，即成吉思汗大祭之日，参加者奉祭了成吉思汗，同时举行了奠基仪式[kt.60,1942.5.9(3)]。《盛京时报》曾报道预定动工日期为4月1日，但从《青旗》报道可知，后来改为5月5日。

成吉思汗庙建设工程于1942年5月5日开始动土，建设工程预计2年。王爷庙特务机关援助2万4千袋白灰。但由于建设方案由满洲国政府几次改动和审查，当年只完成了外围墙工程，翌年（1943）完成主殿第一层工程，1944年7月20日完成主体工程，因为预定当年10月份举行落成典礼，所以，施工者们日夜加班，加快了工程进度[kt.152,1944.10.13(3)]。

“计划成吉思汗庙筹建资金为100万圆”，后改为160万圆，后来又增加15万圆，共计175万[kt.152,1944.10.13(3)]。资金来源为“居住在满洲国境内的蒙古人每人捐资5角”以及其他捐献款项。对于各地蒙古人踊跃捐款的情形，《青旗》报及时作了报道。“科尔沁右翼中旗支持成立成吉思汗庙奉建委员会，并召集旗内社会名流举行会议，号召大家捐款建庙。结果，民众踊跃提供钱财，不出数十日，便募得超出预料的捐款”[kt.58,1942.4.25(3)]。兴安西省奉建委员会到各旗募捐，共获捐款15万圆，这只是阿鲁科尔沁旗、克什克腾旗、巴林右旗、巴林左旗的捐款，而扎鲁特旗、奈曼旗尚未统计在内[kt.87,1942.12.23(6)]。另外，“蒙疆政权”一次捐资10万圆，该政权还另作了1000万圆的捐资预算[kt.136,1944.5.3(1)]。

各地蒙古族青少年组成“成吉思汗庙奉建勤劳奉仕队”，赶赴施工现场进行义务劳动。预计10月份举行落成典礼，为了赶在计划内完工，从8月末开始夜间作业，夜以继日全力施工。成吉思汗庙比预定晚了约1年时间，于1944年秋落成。威容壮观的正殿是钢筋混凝土构造，正面中央矗立着高30米的“圆顶方基”大殿，两侧是延伸全长70米的回廊。两侧各有小殿一座，分别作为“参考室”和“博物室”，室内壁面上描绘成吉思汗一生事迹⁽²⁾。

成吉思汗庙的造型雄伟壮观，具有独特的民族风格，其正殿是明治神宫和藏传佛教寺院结合形式而构成。该庙设计及施工，实际上是由满洲国营缮建筑局的日本工程师完成的。设计单位为建筑局造营科，具体任务由葛冈正男等人承担[越泽明2002:252]。越泽明的《满洲国首都计划》中有这样一段文字：“日本败战的前一年，1944年10月，满洲国西部（东部内蒙古）的王爷庙之上竣

工了成吉思汗庙。建此庙时，采取了部分藏传佛教寺庙的建筑处理方法。建筑内部模仿东京神宫外苑圣德纪念绘画馆的做法，绘制了一组描绘成吉思汗一代记的壁画。该庙的建设使蒙古人对满洲国的感情好转方面起到了重要作用”[越澤明 2002 : 253]。另据春日行雄《日本与モンゴル一百年》记载，王爷庙成吉思汗庙的设计长为今村三郎，施工长为大石长次郎[春日行雄 1993 : 155]。这些记载与在内蒙古流传的“成吉思汗庙施工长为丁哈尔扎布，总设计为蒙古族画家耐勒图，该庙基本上是仿照伊金霍洛旗成吉思汗庙的建筑形式”[涂波等 1989 : 282]等说法有较大出入。

3 . 成吉思汗庙落成典礼盛况

1944 年 10 月 8-9 日，举行了盛大的成吉思汗庙落成典礼暨临时大祭[ykt. 2-6,1944,94]。此次盛典空前隆重，前来参拜者多达 5 万人[ykt.2-6,1944,107]。内地、军方及蒙古自治邦代表等贵宾 100 余人、各旗县代表 800 余人、蒙古青年团及各学校学生 500 名，还有自愿前来参拜及军人、公务人员，共计 50000 余人。乌珠穆沁、克什克腾和呼伦贝尔的牧民或骑马或赶着勒勒车经历一个多月的长途跋涉来到王爷庙，参拜成吉思汗庙，在洮儿河畔安营扎寨，牛羊成群，商贾云集。铁路方面在王爷庙附近临时设置站点，方便朝拜者出行[kt.152,1944.10.13(2) ; ykt.2-6,1944,107]。10 月 9 日，以藏传佛教和成吉思汗祭祀仪式形式举行了“临时大祭”。上午 9 时 30 分开始，1500 余人出席大祭仪式，由主祭巴达玛拉布坦奉读祭词，随后依次奉上哈达及各种供品，进行祭火、祭马、祭兵礼仪和献酒，接着将据传是长生天授予成吉思汗的梭镖 (tegri-yin yildu) 供奉灵前，并举行献灯、献炉等仪式后，合唱圣歌，整个仪式 11 时 50 分结束。下午进行了蒙古摔跤、赛马比赛和文艺演出等活动[kt.153,1943.10.23(3) ; kt.152,1943.10.13(2)]。

10 月 10 日上午 9 时，正在进行野营训练的蒙古青少年 4000 余人来到成吉思汗庙正殿前，在国内外来宾注目下举行了“蒙古青少年崛起大会”。大会总司令为博彦满都。上午大会结束。10 月 11 日，青少年野营团来到兴安学院

主办的展览会场，参观了蒙古青少年有关时局的作品，12日举行了解散仪式 [kt153,1943.10.23(3) ; kt152,1943.10.13(2) ; ykt,2-6,1944,94]。

为配合成吉思汗庙的落成典礼，筹建委员会编辑蒙古语小册子《成吉思汗箴言集》，分发给牧民，并制作了纪念章。1945年3月，兴安总省利用各旗旗长参加蒙民厚生会商议会的机会，商定了《成吉思汗庙祭奠纲要》。“成立成吉思汗庙祭奠委员会，会长由巴达玛拉布坦总裁担任，副会长由博彦满都总省长和兴安军官学校一名军官担任。成员由兴安北省，喇嘛教宗团、蒙民厚生会、蒙民裕生会、以及各旗县长、师旅团长组成”。主张祭祀仪式应遵循伊金霍洛的规矩，但应避免与国家法规发生冲突，摒弃陈旧繁文缛节。祭祀费用来源“以自主解决为本，总省适当补助”。祭祀活动坚持“年祭、月祭、日祭” [kt.166,1945.3.3(3)]。

在东蒙古人的心目中，奉建成吉思汗庙无疑成为全民族实现民族复兴、唤醒民族意识的精神依托。成吉思汗庙的影响超越了东蒙古的范围，在东西部蒙古沟通方面发挥了重要意义。1944年3月，蒙民厚生会专务理事玛尼巴达喇前往德王府，参加蒙疆政府兴蒙委员会月例会畅谈“提高决战之精神、统一振兴蒙古的认识、振奋自我精神、加速奉建成吉思汗庙工程进度”，并接受了蒙疆政府捐助奉建成吉思汗庙善款10万圆 [kt.136,1944.5.3]。成吉思汗庙落成典礼时，蒙疆政府高级首脑参拜团参加了典礼。

注

- (1) 《蒙民厚生会留学生会報》第3号，1944年11月135頁，转引自田中刚《成吉思汗廟の創建》，森時彦編《二十世紀中国の社会システム》2009年。
- (2) 关于成吉思汗庙落成庆典活动在田中刚的专题论文《成吉思汗廟の創建》（森時彦編《二十世紀中国の社会システム》2009年）中有较为详实的论述，其资料来源主要为《蒙疆新报》1944年10月25日-27日的报道《成吉思汗庙落成临时大祭・盛典参加记》(2)-(4)。

参考文献

- 《フフ・トグ (köketuy/青旗)》 [kt]: 7-166号 (1941-1945), 青旗報社, 満洲国・新京。
- 《イケ・フフ・トグ (yike köketuy/大青旗)》 [ykt]: 1卷6号 (1943), 2卷6号 (1944), 青旗報社, 満洲国・新京。

- 白拉都格其、金海、赛航（2002）《蒙古民族通史》第5卷（下册），内蒙古大学出版社。
- 达瓦敖斯尔（1988）《我的经历见闻》，内蒙古自治区文史资料委员会编《内蒙古文史资料》第31辑。
- 古月（2011）《成吉思汗庙祭祀仪式》，《蒙元文化研究》（内蒙古蒙元文化研究会主办）第3卷。
- 江川（1995）《反法西斯斗争的丰碑》（下），《兴安日报》1995年7月25日。
- 涂波、那木斯来扎布、佟巴图（1989）《乌兰浩特成吉思汗庙》，内蒙古自治区文史资料委员会编《伪满兴安史料》。
- 乌兰（2007）《兴安风情录》（上集），内蒙古人民出版社。
- 张存余（1985）《成吉思汗庙简史》，乌兰浩特市志编委会办公室编《乌兰浩特市志通讯》第2期。
- 春日行雄（1993）《日本とモンゴル 100年》アジア博物館・モンゴル館。
- 越澤明（2002）《満州国の首都計画》筑摩書房。
- 田中剛（2009）《成吉思汗廟の創建》，森時彦編《20世紀中国の社会システム》，京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター。
- 満洲国史編纂刊行会（1971）《満洲国史・各論》
- 楊海英（2004）《チンギス・ハーン祭祀：試みとしての歴史人類学的再構成》，風響社。

満洲国期・興安地域における医療衛生事業の展開

鉄 鋼

はじめに

満洲国の民族政策史研究については、それ自体には進展がありながらもモンゴル人地域である興安省統治はほとんど検討されてこなかった。研究の多くは、満洲国期の「民族協和」を、それを体現したと謳う建国大学の研究によって解明しようとした。同時に、鈴木仁麗、広川佐保らの若手研究者により進められた研究は、近年非常に広く注目されている。鈴木仁麗『満洲国と内モンゴル』（2012）では、興安省の統治機構と制度および疆域問題を取り上げ、満洲国の地方統治の様相を論じた。氏は先ず「満蒙」と一括りに称された「蒙」にあたる地域に注目し、日本の外交政策における満蒙問題登場から満洲国建国後まで一貫して「特殊地域」と位置付けられていた興安地域の統治の内実を明らかにした。そして満洲国の建国理念「民族協和」の実態に関する再考を試み、統治者である日本人らが満洲国の多民族性に鑑みて「民族協和」理念を強く意識し、モンゴル人らとの連携を図りながら民族統治政策を行っていたという見解を提示した。また広川佐保『蒙地奉上』（2005）では「（満洲国の）土地政策の展開を追うとともに、近代内モンゴル東部地域における重層的な土地権利関係の把握を目指し、さらに満洲国におけるモンゴル史を再構成すること」を研究の目的とした。著者の意図するところは、単なる土地制度史の分析にとどまらない。満洲国による内モンゴル東部地域の土地制度再編過程を整理することによって、この地域のモンゴル人の社会構造にも変容があったことを明らかにした。両氏の研究成果は満洲国興安地

域の研究,とくに内モンゴル近現代史の領域では,新たな分野を開拓したと評価できよう。同時に,内モンゴルが日本の植民地支配下に置かれたとはいえ,当時モンゴル人がいかなる意思を持ち,いかに行動したか,そしてそれがどういった結果を生み出したかについて,モンゴル人の立場から捉えなおすことが必要であろう。

本論で取り上げる医療衛生事業についての研究は極めて少ない。筆者の知るところ「興安地域」における医療関係の研究では伊力娜「巡回診療から見た『蒙疆』『興安蒙古』における日本の医療政策」(2007)があげられる。この論文は蒙疆における日本の植民地政策の一環である医療政策を巡回診療の角度から考察したものであり,巡回診療の真相を明らかにした。しかし,巡回診療に触れてはいるものの伝染病に関わる医療衛生事業を展開した全過程と診療内容,そして固有の伝統医学との相互作用,及びモンゴル人社会に与えた影響などを考察していない。

本稿では,満洲国における医療衛生事業について,『フフ・トグ』(Kökety /青旗)紙を手掛かりとして検討する。満洲地域では伝染病が流行し多数の犠牲者を出すばかりではなく,社会に大きな禍害を及ぼしたため,伝染病の予防は建国当初から喫緊の課題であった。満洲国は東モンゴルで伝染病の感染防止防治と医療・衛生状態の改善を目的とし,医療政策を実行しはじめた。医療政策その実例の一つである伝染病感染防止活動を検討した上で,『フフ・トグ』紙面上の実例を整理し,当時の日本の医療政策が興安地域のモンゴル人に与えた影響について分析する。

1. 衛生管理体制

建国当初,満洲国では医療普及に重点が置かれ,医療施設や医学教育施設の普及に力が注がれた。興安局内に民生庁衛生科を設け,東モンゴルの防疫,衛生,保健などの事業の管理を強化した。興安局が興安総署に改編したのもこの頃である。康德元年(1934)興安総署は蒙政部に昇格し,時にはその民

政司がモンゴルに関わる地方の衛生行政を司った。

康德4年(1937)7月、満洲国は機関の設置と調整を進め、蒙政部と民政部を廃止し新たに民生部を設けた。民生部保健司が全国の一般衛生に対して一元的管理を実行した事により、総務科を廃止して保健体育・医療・防疫の三科を設けた。新しく設置された興安局は顧問機関になり、元々蒙政部が管轄していた東モンゴルの衛生管理機構は興安局に移管されずに民生部保健司に統一された。東モンゴル各旗の衛生管理体制は不完全だったため、少数の旗や県には相応する機関ができたが、多数の旗や県の衛生行政管理は主に警務科が行使した。

康德6年(1939)に書かれた「赤峰事情」の中に衛生警察の職責が記されている。「衛生警察は国家衛生行政を司る警察であり、その職務はおおよそ4つに分けられる。1つ目に保健である。保健行政は疫病が未発生の場合でも民衆の健康を維持せねばならない。2つ目に防疫である。防疫行政は既に疫病が発生したらこの疫病を防止する。3つ目に医薬である。医薬行政は医師、漢方医、薬剤師、薬局及び病院などの取締り及び許可に関する事項を司る。4つ目に公共衛生である。公共衛生はその他一切の公共衛生事情を司る[赤峰市衛生局編印：151]。

主な衛生事業の実施事項は、「隔離病棟の建設、道路や水車の設備、ゴミ箱の設置、共同便所の設置、家の便所の設置、烏丹屠殺場の新設、下水改善実施と浚渫、井戸の夏季消毒、共同便所の消毒、諸営業の衛生検査、衛生宣伝、衛生連絡会議の開催、鼠疫防疫事業、井戸の建設、検疫疾病についての戸口調査、野犬の駆除、薬剤の散布、大掃除、屠殺や殺人の取締り、医薬営業の認可」などがある[赤峰市衛生局編印：151]。

二百数十年にわたる清王朝の愚民統治が、東モンゴル地区に文化の衰退、生活の貧困、人口減少などの全面的な衰退の厳しい結果を招いた。近代医療制度が未確立で衛生意識に格差があり、病気になればすぐラマ僧に読経を頼むような立ち遅れた状態に置かれたままであった。この実情に対し、満洲国は「モンゴル人の人口の増加、全国民の衛生意識の向上、徹底した梅毒駆逐、伝染病の減少、医療システムの整理拡大、ラマ僧の医学素質の向上」などの

東モンゴルの衛生政策を決定した [伊力娜2007]。各地に相次いで公立診療所や、蒙民厚生診療所などの医療機構ができ、東モンゴルの衛生事業に発展をもたらした。

康德7年(1940)、東モンゴルで500万元を予算とする「興安振興事業」の実施が始まった。実施期間は3年で、通遼を重点とする百斯特汚染区域が指定された。1941年には興安西省が「五か年梅毒駆逐計画」を制定・実施した [斯欽巴図2013]。

2. 行政機構

1) 中央行政機構

大同元年(1932)3月、建国とともに国务院官制により民政部に衛生司が置かれ、防疫、種痘及び公衆衛生に関する事項、保健及び医療に関する事項を司ることとなり、医政、防疫、保健の三科が設けられたが、康德元年(1934)さらに総務科が増置された。初代の衛生司長は張明勳で、これを補佐する簡任技正は黒井忠一であった [満洲国史：1180]。責任者も最初は滿人が多かったが、衛生行政の強化に伴って日系が多くなり、司長も日系に変わった。

一方、蒙政部では当初部内の民政司でモンゴル地方の衛生に関する行政を管掌していたが、1937年7月蒙政部が廃止となり、同時に民政部衛生司は新設の民生部保健司と改められた。こうして全国の一般衛生を一元的に司掌することとなり、総務科を廃して保健体育・医務・防疫の3科が置かれた [満洲国史：1180]。

翌38年1月には、阿片政策が重視されて保健司に煙政科が置かれたが、1940年1月民生部の外局として禁煙総局が誕生し、煙政科は廃止されて阿片行政は一段と強化されることになった。これと同時に、保健司の保健体育科は保健科と体育科に二分されたが、翌41年8月体育に関することと保健科の所管事項の大部分が厚生司に移管された。すなわち保健司には更にペス

トを専管する第二防疫科と医療資材料が増置され、さらに 1943 年には新たに保健司に開拓衛生科、厚生司に国民養護科が加えられた。このほか 1939 年から民生部に技監が置かれ、初代の技監として日本から大平得三を迎えた [満洲国史：1180]

康德 12 年 (1945) 3 月民生部は厚生部と改称され、保健司には薬政と防空衛生の二科が加えられた。なお厚生司には健民科、厚生科及び援護科があって保健衛生のほか生活援護を所管していた [満洲国史：1181]

2) 地方行政機構

建国当初の衛生行政は取締に重点が置かれたため、各省の警察庁、首都警察庁、ハルビン警察庁にそれぞれ衛生科が設けられ、その他の自治体でも主要都市に衛生科または衛生股が置かれた。新京特別市、奉天市及びハルビンの衛生科は後に衛生処となった。1938 年 12 月、各省の警務庁衛生科は廃止されて民生庁または開拓庁に保健科が設けられ、日本の場合と同じく指導衛生に重きをおくことになった。しかし県旗の衛生行政は主として警務科で行なわれた [満洲国史：1181]

3) 衛生技術廠

1934 年 11 月、衛生技術廠が開設され初代廠長に日本から阿部俊男を迎えた。当時同廠の業務は「 伝染病その他の病源の検索痘苗、血清その他予防治療剤の製造及び検査並びに格納に関する事項、衛生試験に関する事項 伝染病予防方法の講習に関する事項」と定められ、初めは伝染病の予防に関する業務が主体となっていた [満洲国史：1181]

これよりさき、1933 年 7 月に接收したハルビンの東北防疫所は衛生技術廠の設立によってその分廠ととなり、1936 年 5 月から各種のワクチン及び血清、診断液、農村常備薬等を製造販売した。さらに翌 37 年 1 月から、各種の衛生試験、消毒剤及び消毒器材の効力試験、薬局方薬品の適否検査等を行うことになった。

1938 年 11 月衛生技術廠は大陸科学院の所管に移り、翌 39 年 6 月には細菌、血清、毒素、痘苗、寄生虫及び衛生昆虫、製剤の各研究室が、さらに 1941

年 9 月にはペスト研究官が整備された。

1944 年 4 月、同廠は厚生研究所と改称され、従来の業務のほか国民栄養、国民体力並びに作業能力の向上、生活環境、人口の増殖及び妊産婦、乳幼児の保健等に関する研究を行った。1945 年 3 月厚生研究所は再び厚生部に属することとなり、厚生行政については厚生部大臣の指揮監督を受け、その他の科学的研究は大陸学院長の指揮を受けた。

3 . 伝染病・地方病対策

満洲は悪疫瘴癘の地といわれるだけに、伝染病、地方病、寄生虫病等が非常に多かった。急性伝染病としては、日本でも発生する赤痢、腸チフス、パラチフス、猩紅熱、ジフテリア等のほかペスト、発疹チフス、満洲チフス、アメーバ赤痢、痘瘡、再帰熱等が多発流行した。またマラリア（三日熱型）が南満に多発した。これらはしばしば「支那」から侵入し、特に 1919 年及び 1932 年には大連、營口方面から侵入して全満に流行し、それぞれ 5 万人、6400 人という多数の患者を出した。在満日本人がこれらの伝染病に罹って死亡する割合は、日本のそれに比べて著しく高かったが、「満人」の罹患率は日本人よりもはるかに低かった。これは「満人」が日本人に比べて抵抗力が強かったせいもあるが、「満人」の死亡診断書が正確でなかったことによると考えられる [満洲国史：1197]

以上の伝染病のほか、特に満洲には広大なペスト地帯があり、毎年夏季に流行して多数の犠牲者を出すばかりでなく、交通、産業、経済等に大きな禍害を及ぼすので、伝染病の予防は建国当初から喫緊の課題であった。しかし「満人」は一般に文化程度が低いとされ衛生思想も乏しかったので、伝染病予防のポスターやパンフレット等によって極力啓蒙に努めたが、肝心の医師の大多数が漢方医で、伝染病の報告すら迅速正確に行なわれない状態であった。一方、興安地域に住んでいるモンゴル人は衛生意識が低く、病気になる

とラマ僧の祈禱やラマ医の治療を受けていた。人口増加率も低く、民族的には衰亡の兆さえ示していた。

満洲国は東モンゴルの一部の旗や県で伝染病防治の医療・衛生状態の改善を目的とし、近代医療を普及させはじめた。建国当時は防疫機構もなく伝染病予防法も制定されていなかったため、1932年5月満洲国民生部と蒙政部の共催で連合防疫会議を開き、共同防疫漸行弁法を決議した。康德4年(1937)12月1日には「伝染病予防法」が公布された[満洲国史:1198]。同法では、伝染病種、予防接種、ペストの特殊な防疫機構について規定された。以下に、当時の東モンゴル地区の主な伝染病に関する統計数字を挙げる。

表1 興安北省蒙古人患病状況調査表 [Kt127,1944.2.3(4)]

疾病分類	旗県				
	ハイラル市	索倫旗	陳巴爾虎旗	新巴爾虎右旗	新巴爾虎左旗
眼病	30%	34%	31%	38%	35%
梅毒	-	-	-	12%	12%
淋病	-	13%	9%	16%	31%

1) トラホーム

大同2年(1933)の満州医科大学モンゴル医療班の統計によれば、トラホームの患者の割合は、眼病患者全体の61%で、これらの患者は軽い症状の時は自覚症状がないものの、ほとんどすべての患者は治癒できないまでの重症患者で、その中には合併症を併発している者もあり、白内障を発病する者もいた。1939年より満洲国文教部が国庫補助をもって特定の学校に眼科医師と洗眼婦を配置し、トラホームの無料診療を実施した[満洲国史:1199]。

東モンゴル人居住地は砂埃が舞い上がり、そのうえ夏の太陽光の強烈な刺激で、彼らはトラホームを伝染病とは考えず、不衛生な状態で成り行きにまかせており、それがトラホームの原因となっていた。索倫部族の居住する興安北省索倫旗の北部と西部は遊牧を生業とし、人口は4000人近くであり、その多数は西部のホンゴル(Khongor)というところに住んでいる。彼らの

眼病罹患率は高く、ほとんど全員が目を患い、それ故、旗公署はずっと宣伝や治療にあたっていたが、効果ははっきり出なかった。眼病の原因は調査によって判明したが、それは遊牧民の使用しているタオルが一家に一つで、共同で一つのタオルを使用していることで一人の眼病が10人になり、10人が100人にうつるということであった。とりわけ、幼子が同様のタオルで顔をこすれば、大人の眼病が子供にうつってしまう [Kt25,1941.9.6(3)] この種の眼科の伝染病の予防としては、各人それぞれの毛布を持つべきこと、何度も洗濯すること、衛生について説いていくことが必要であった。

2) 淋病

モンゴル人はラマ教の影響で、生理衛生科学の知識が乏しく、淋病が性病であるという認識はなかった。淋病には急激に悪化する一定の時期があり、大変な苦痛があるわけでもなく、冬の厳寒期に自覚症状がでるので、モンゴル語で「フイテンウブチン」(寒病)と称された。彼らは、この種の病気は乗馬により起こるものと考え、一生の間に一度は罹る病気だと考えていた [斯欽巴圖 2013]

淋病の危険をなくすため、東モンゴル各省、旗公署は迅速に行動を起こし、作業計画を立て関連する作業期間を設立した。

康德8年(1941)9月4日、興安北省陳巴爾虎旗は淋病をなくす医療団を組織するために、旗公署に淋病駆除委員会を成立させた。旗長は会長を兼任し、参事官は副会長を兼職、委員は旗検査団、ノタクーダ、ソム、ジャンギ、ラマ、および社会各界の有力者のなかから会長が選んだ。会長は、具体的な活動を手配し、メンバーを管理し、さらに関連する会議を主宰しなければならなかった。加えて、的確に淋病の検査、予防、治療等の駆除作業を行い、淋病に関する状況を主管責任者や上級組織に報告することを求められた [Kt29,1941.10.4(2)]

興安北省陳巴爾虎旗医院長パト・スへは過去数年、風雨も恐れず、北のダラ・ホジルト・ノールや南のダラ・グンゲル・ノールなどにゲルを建てて遊牧民の淋病の治療にあたり、予防と治療の知識の宣伝を行い、多くの人から

尊敬された。この結果、この地方のモンゴル人人口にかなりの増加が見られ、世間の好評を博した [Kt31,1941.10.18(2)]

康德 8 年 (1941) , 興安北省新巴爾虎旗は淋病根絶政策を制定し、ソムヤノタグの責任者たちを招集し会議を行った。宣伝をしっかりと同時に、旗内で民衆の淋病検査のために診療所を 4 か所に設置し、5 月 28 日より検査を開始した [Kt14,1941.6.21(2)]

康德 9 年 (1942) , 東科中旗公署は興安南省公署と協議して、東科中旗公署の巴彦塔拉街においてモンゴル漢方医学研究会を設立し、当該地域の全てのモンゴル医、漢方医は本研究会に参加するように指示した。研究会は国の法律を遵守し、モンゴル地域から病気をなくし、旗民の体質を強め、満洲国民の素質向上に貢献すべきであると決定した [Kt46, 1942.1.31(3)]

康德 8 年 (1941) , 興安西省は「根治淋病六年計画」(表 2。数字は対象人口) を制定した。すなわち「まず扎魯特旗より開始し、順をおってそのほかの地区に拡大し 6 年で完遂する。本省内のモンゴル人に対して血液検査を実施し、全ての淋病患者は厳格に治療を進め完治させる。本省は交通の便が悪く道路も泥道が多いので、大型トラックで一軒ずつ回り、3 月から 10 月までの 8 か月実施するが、基本検査は 7 月までとする」 [Kt21,1941.8.9(2)] とした。

表 2 「淋病根治六年計画」(開魯、林西県のモンゴル人を含む) [Kt21,1941.8.9(2)]

年	1941	1942	1943	1944	1945	1946
旗県区分	扎魯特旗	阿魯科爾沁旗	奈曼旗	巴林右旗	巴林左旗	克什克騰旗
男	7028	18091	23962	10683	7396	4972
女	5651	15134	20048	9986	6114	4249
計	12679	33225	44010	20669	13510	9221

扎魯特旗のモンゴル人の全面検査と徹底治療のために、興安西省公署は作業隊を派遣し、1941 年 6 月 29 日開魯から扎魯特旗に向かった。メンバーは、衛生保健科長の WU CHANG LI、技師のエリドンピリグ、日本人の

KUTSUZAWA JYUNICHI, 衛士の ZHANG YU TIAN, BAI XI TIAN, 総務科
刊行課の JIN BAO SHAN であった [K121,1941.8.9(2)]

興安西省公署は民衆に宣伝ピラを配布し、淋病を根絶する意義を宣伝した。宣伝ピラには、「扎魯特旗のモンゴル人の皆様、健康は貴重なものである。もし病気があれば、お金をたくさん使っても楽しい暮らしができず、どんなおいしい物でもおいしくなく、とりわけ淋病の悪い点は、あなたにだけ害をもたらすのでなく、子孫代々まで伝染する。彼らの成長や健康を脅かし本当に恐ろしい。この病気に罹った人の中には、人に知られるのを恐れて、治療に行かず病状が手遅れになり、病状が重篤なものになって隠し切れなくなり、メンツをなくしただけでなく、直接的に命の崖へ縁までいってしまう。我々モンゴル人夫婦は年を取るまで子供がいなければ、子供を持つてはいけなかったのだと考え、そのようであれば病気のために受胎しにくかったと考えていなかった。省公署の衛生保健科長は医者をごこへ連れてきて診察する機会があったにもかかわらず、治療に来なければ悲運であろう。もし兄弟姉妹たちに病気があれば、メンツにこだわらないで、早く治療し健康になり、モンゴル民族の淋病計画を達成させよう。決まりが悪く病状を隠し、一生もがき苦しむ死に至るより、積極的に治療を受け入れ、病苦を取り除き、健康な体になる方がよく、斬新な未来がむかえられる」 [K121,1941.8.9(2)] と書かれていた。

康德 8 年 (1941), 扎魯特旗の淋病検査は、南半分のモンゴル人の採血検査と注射による治療の作業が終わり、大きな成果をあげた。扎魯特旗の作業は、半分を残して完了せず、最初に規定された興安西省実施の「根治淋病六計画」に基づく阿魯科爾沁旗への移転ができず、扎魯特旗でさらに一年作業を行った。康德 9 年 (1942) には「省公署衛生保健科が成立した日より、蒙・漢の医師達が淋病根治グループを組織し、6 月 15 日に扎魯特旗公署に到着し、一か月余りを利用して、扎魯特旗北半分のモンゴル族民衆の採血作業をやり遂げた。検査用血液はすぐに新京に送られ、検査にかけられ、淋病に罹っているかどうかを確認した。淋病患者に対する注射治療は 10 月より始められた。注射の方法は、一か月に 1 回、重症患者には 3 回の注射を施し、健

康の回復を期した。今年(1942)本旗での治療は完了した。康德10年(1943)より阿魯科爾沁旗における治療を行う」[Kt76,1942.9.3(2)]とされた。

ここまで見たように、淋病を根治するために、満洲国政府は大量の物的人的資材を投入し、この計画の実質的効果を得るために、全て無料の治療政策を採った。「一人の患者の採血検査から注射治療まで、少なくとも100元必要で、ここからでも国家が多くの資金を投入したことがわかるし、庶民は一銭も使うことがなかった」[Kt76,1942.9.3(2)]のである。

淋病根治作業を円滑に行うために、興安総省は検査作業に力を注いだ。康德11年(1944)、満州医科大学と日本の九州帝大医学部の20名余りの学生の援助で、7月末より開始し、2か月間で、興安総省興中地区と興東地区モンゴル民衆および興安街、扎蘭屯中等学校の男女生徒などの大規模な範囲で検査を行った。満州医科大学のモンゴル族学生もこの調査に参加した [Kt144,1944.7.23(2)] 満州医科大学のモンゴル族学生が帰郷し、淋病治療に参加したことに対し、『青旗』は「これはモンゴル民族に対して非常に希望があることである」と称賛した [Kt144,1944.7.23(2)]

3) 梅毒

「モンゴルにおける梅毒の蔓延は、人口減少の原因となる」と興安北省公署は公告で指摘していた [満洲国史：1197] 梅毒は悪性の伝染病で、その死亡率は腸チフスと赤痢の倍である。この病気に罹り妊娠した場合、80-90%が早産あるいは死産となる。1000人当たりの統計では、梅毒患者は、索倫旗では100人、陳巴爾虎旗では219人、新巴爾虎右旗では338人、新巴爾虎左旗では424人であった [Kt13,1941.6.14(2)] 患者が産んだ子供は一般に短命で、懐胎すれば2回のうち1回は悪阻や流産となり、順調に出産しても早い者は3か月以内に、遅い者でも15歳にならないうちに死んでしまう。その父母の身体的感染からこの病気になったことを考えるべきである [斯欽巴圖2013]

興安北省はこの危険状況に康德8年(1941年)にいろいろな悪病の根絶方案を公表し、全省の範囲でキャンペーンをおこなった [Kt13,1941.6.14

(2)]

康德 8 年(1941)4 月 28 日付けの『青旗』紙の新聞記事によれば、興安北省は「衛生工作五年計画」を立てた。すなわち「5 月 1 日から計画を実施する。医院を設立して専門医が本省の梅毒患者の治療にあたり、以下のことを準備する。梅毒を根絶するため、妊婦の採血検査を進める。予防注射をする。駆梅管理文書を作成する。天然痘の発生を予防する。6 歳 19 歳 30 歳の 3 回予防注射をする。これらの費用は興安北省公署が負担する。康德 5 年(1938)より活動している陳巴爾虎旗、東西新巴爾虎旗の 3 つの工作隊(1 隊は 6 人で構成)に加えて新たに 7 つの工作隊を結成するとともに、人口の多い地域には病院を設立する。省・旗・県のそれぞれに駆梅委員会を組織し、10 名のモンゴル人を選抜して医学技術教育を進め、遊牧民対象の治療にあたらせる。5 年間の計画によって人口の減少状況を転換し、モンゴル人人口の増加を期す」[Kt7,1941.4.28(2)]とした。

興安北省は、遊牧を主とする旗民の居住地を選んで、索倫旗のシニー、新巴爾虎左旗のチャガン、陳巴爾虎旗のフジルト、新巴爾虎旗のスガイタイ等に厚生衛生院を建設し、梅毒の医療基地を設立し、各旗の住民の疾病治療にあたった。駆梅衛生院の拡大建設のために、興安北省公署は、衛生人員臨時養成所の創立を要請し、モンゴル人研修生を集め、人々の疾病を治療できる地元民を養成した。あわせて治療期限を制定し、梅毒等の伝染病予防の小冊子を配布し、治癒した患者の姓名も記載し、いかなる費用も徴収しなかった [Kt13,1941.6.14(2)]

数年の治療活動により、モンゴル民衆は進んで治療を受けるようになった。「興安北省公署は毎年、旗の中心部と人々が比較的集中する場所に臨時病院を設け、遊牧民の治療を行った。以前、新巴爾虎右・左旗の遊牧民は病院と聞けば逃げ回っていたが、今では進んで来院する人が増え、現代の医療技術が民衆の認められるところになった。この種の病気は、現代医療技術を用いず治療にあたって、仏を拝んで、お経を念じても何の役にも立たないことを理解するようになった」[Kt81,1942.10.23(4)]という記事からも、医療政策の成果が伺えよう。

4 . 医療機関の設立

康德 6 年 (1939), 満洲国政府は「北辺振興計画」を実施した。その中には、公立医院の調整計画も含まれていた。3 年計画に基づいて、北辺各地では、相次いで省立、旗立の医院が建設され、医療機構が大きく不足していた中心地から遠く離れている人々の歓迎するところとなった。計画は「民生部が掌握し、全国的な交流が進められた。人件費やその他の経費は国庫補助によるものとされた。康德 11 年 (1944), 全国公立医院の中で、省立は 10 か所、市・県・旗立は 139 か所に達した」[満洲国史 : 1193] ものとなった。

この時期、東モンゴル地区には政府により医療施設が設立され、公立医院、福民診療所 (1933 年から国家発行の福民奨券 [宝くじ] の収益金で創設されたのでこの名称となった) が設立された。以下、地域別に概観する。

1) 通遼

通遼公医院は、康德元年 (1934) 日本の公医制度により設立された。政府の医療機構であり、病床は 30 であった。同時期、奈曼旗、科左中旗、扎魯特旗、科左後旗、庫倫旗には、それぞれ大沁他拉福民診療所、巴彥他拉福民診療所、魯北福民診療所、吉爾嘎郎福民診療所と庫倫福民診療所が開設された。また康德 7 年 (1940) ごろ、通遼に病床 30 の康生医院が設けられた。

満鉄通遼公医院は鉄道系の官立病院である。康德 2 年 (1935) に作られ、多いときは病床 100 近くを有し、哲里木盟地区第一の鉄道員病院であった。1945 年日本の投降により解体された。

通遼治安部医院は、康德 3 年 (1936), 通遼の満洲国治安部が設立した官立病院である。

通遼医院は康德 9 年 (1942) に設立された哲里木盟地区第一の官立地方病院である。看護人 50 名余りで病床は 30、院長は日本人であった。内科、外科、婦人科、小児科があったが、薬代、手術費はとても高く (盲腸の手術 200 元、高粱に換算すると 40 石であった)、患者は軍政幹部と富豪であった。1945 年 8 月、日本投降後に閉鎖された。

2) 赤峰

満鉄赤峰医院は、鉄道系の官立病院である。康德元年(1934)に設立、所在地は赤峰南箭亭子廟であった。満洲国建国当初、満鉄が叶赤鉄道を敷設するにあたって南箭亭子の廟を解体して医院を建設した。叶赤鉄道の正式運行に先駆けて開業し、職員のほか平民も診察した。少数の雑役夫を除いて院長から看護人まで大部分は日本人であった。1945年日本の投降後、病院の人員や設備・器具は専用列車で撤収、建物などは戦争で破壊された。

赤峰公医院は、満洲国赤峰県公署職員のための官立医院である。平民には開放されなかったが、毎年夏、適齢期の兵役年齢の男性の身体検査に軍医が派遣され、時には定期的に娼妓の検査が行われた。

翁牛特右旗立医院は、満洲国熱河省翁牛特右旗職員のための官立病院である。診察室、病室、手術室はきちんとしており、レントゲン設備等の計測器械もそろっていた。院長は日本人で、職員は67名であった。この医院の開業後、赤峰公医院は閉鎖した。公費による治療のほか平民にも開放されていたが、言葉が通じないうえ態度も横柄だったので、患者とのトラブルが絶えなかった。1945年8月日本投降により閉鎖、建物などは戦争で破壊された [内蒙古自治区誌 2007 : 476]

3) 王爺廟

興安医院は、興安医学院の附属病院で、内科、外科、眼科、産婦人科が完備していた。1943年12月19日、文教部大臣代表、興安総省長、王爺廟特務機関長や関係各官吏と民間人らが出席して開業式典が行われた [Kt123,1943.12.23(3)]

奉天同善堂助産師学校の8名のモンゴル人女性生徒は3年間の修学を終え1942年6月に卒業、蒙民厚生会によって地方の助産所に配置された [Kt74,1942.8.15(3)] 同校を卒業した8名のうち、2人は科左中旗籍、2人は扎賚特旗籍、2人は索倫旗籍で、1人は王爺廟医学院に進学した [Kt74,1942.8.15(3)] 関係旗政府は蒙民厚生会と協力して助産所を設立し、助産師学校卒業生を割り当てた [Kt74,1942.8.15(3)] 1943年、助産所は16か所となり、

1944 年科爾沁右翼中旗，科爾沁右翼前旗，科爾沁右翼後旗，科爾沁左翼中旗（兩所），科爾沁左翼前旗，庫倫旗，郭爾羅斯前旗，郭爾羅斯後旗，布特哈旗，索倫旗，莫力達瓦旗すべてに助産所が設置された。前後して 30 名余りが同校を卒業し，各地の助産所で働いた [忒莫勒 2003 : 545] また 1944 年，興安南省には少なくとも 7 か所の助産所が設けられた [斯欽巴圖 2013]

5 . 伝統的ラマ医療の革新

日本の植民統治期，東モンゴル地区の医療活動はモンゴルの伝統医学であるラマ医療の革新と向上をめざして東モンゴル各地に相次いで蒙医研究会が成立した。

康德 5 年（1938）7 月，呼倫貝爾蒙医学の整理とレベルアップのため，海拉爾蒙医研究会は興安北省公署衛生科が所轄する社団として設立された。研究会は日夜蒙医学を研究し，北京から薬草，加工丸薬を購入し，省内のラマ医に分配し，庶民の治療に用いた。当時，ラマ医はモンゴル人が病人を治すほとんど唯一の手段であり，ラマ医の研究は重要であった。研究会のソドナム会長は 55 歳，ブリヤート・ソドナムの塔形廟で 14 歳から 30 歳までラマ医の研修を積み，後に興安北省で興安軍医となった。彼はラマ医の高僧としてラマ医研究会の活動を主宰するとともに，タンバ，サンブ，ナワン等の若いラマ医を養成した [Kt5,1941.4.14(3)]

康德 11 年（1944）初め，モンゴル医師訓練審議会が発足，30 項目におよぶ規定が定められた [Kt129,1944.2.23(4)] 3 月 19 日，興安医学院会議室で，特務機関長金川耕作，参事官白濱，興安医院長 TAMURA，満洲医科大学教授 YAMAMOTO，ハルビン軍医院医師，理事 TSUKUDA，興安軍医院長 KINOSHITA，第九軍管区所長 KATO，興安路軍学校の医師など，瀋陽，ハルビン，新京，ハイラルから多数の専門家が集まり座談会を開催し，モンゴル医療について広範な意見の交換が行われた [Kt132,1944.3.23(2)]

康德 12 年（1945）初め，興安西省巴林右旗は「整頓蒙医方案」を制定した [Kt165,1945.2.23(3)] 方案は，訪問調査の結果として，辺境防衛地区の

民衆の文化程度は低く、生活条件は劣悪で、医療知識も皆無である、またこの地は代々伝統的なラマ医による治療が行われており、頭痛、発熱等の簡単な病気にはしか対応できず、その他の病気には無策で死を待つのみである、と述べる。そして「医者技術が良し悪しを分けるが、多くの人は医療資格を持っていない。人命にかかわる取り返しのつかないことが起っても、人々はさほど怖がらない。もしもこのような状況が続いたら、我がモンゴル民族の繁栄はありえない。本旗は、省公署の指示を待たずに今回の方案に基いてすべての開業医を整頓・淘汰し、蒙医の養成と審査を進め、彼らの医療技術を高め、民衆の健康を守る」[Kt165,1945.2.23(3)] と述べている。

蒙医協会と蒙医審査委員会は、審査合格者に証書を発行し、開業を承認した。また審査不合格者はその医療資格を取り消され、審査不合格者に対する整頓がすすめられた。管区内の各地方・各廟と国家边防警隊はこの整頓活動に協力した。「審査は、技術審査と面接に分けられた。技術審査は主に医学知識、薬草、常識等が審査された。面接試験では、関連規定を口頭で述べ、また処方問われた。合格者には医療資格証書が交付された。厳しい審査で不合格になり職場に復帰することができない者は、医療資格が取り消された。審査に合格して証書を交付された蒙医は、診察時に必ず証書を携帯し、人に貸与してはならなかった。蒙医の死去やその他の理由で証書の内容の改訂が必要な時は、上級機関に返納しあるいは変更を申請しなければならなかった。証書に関する規定に違反があれば、法律により処罰された」[Kt165,1945.2.23(3)] これは臨時的な蒙医整頓制度であり、旗における蒙医の医療技術を均一にして民衆の健康被害を避け、民衆の利益を守ることがめざされた。

蒙医制度の整頓とともに、蒙医のレベルアップと養成が図られた。康德9年(1942)、錦州省土默特左旗は蒙民裕生会の支持のもと、ラマ医を組織し1か月にわたって漢方薬の製造方法や薬草と薬用鉱物の区別方法と製薬方法を学ばせた [Kt82,1942.11.3(3)] 康德11年(1944)、「巴林右旗はラマ学校に蒙医養成班を立ち上げ、11月28-29日の2日間、旗長が招いた講師により、建国精神、時勢、医学、伝染病予防方法、薬草等の技術の講義が行われた」[Kt165,1945.2.23(3)]

6 . 医療衛生教育

20世紀初頭、モンゴル社会は後進的で人材が欠乏し、病気が蔓延し、人口も減少していた。そのため、民族文化教育を推進して人材養成を行わねばならなかった。病気の蔓延、人口減少、医師不足という現状に対して、東モンゴルの官界は医師や助産師を養成し、民族の危機を救おうと呼びかけた。蒙民厚生会は、モンゴル民族の医療衛生事業の普及と発展のために、康德9年(1942)に興安医学院を建設し、各旗も助産所を設立した。さらに康德10年(1943)、第九軍管区は通遼に助産師学校を創設した。

以下、興安医学院について述べる。康德7年(1940)、蒙民厚生会は、70万元を投資し興安南省による興安医学院建設を援助した〔盛京時報：1940.12.19〕 前述のごとく、同会は康德10年(1943)12月の興安医学院附属医院が開業式典までに合計150万元を投資した〔Kt123,1943.12.23(3)〕

興安医学院は、民生部直属の国立学校である〔Kt52,1942.3.14(3)〕 同学院は、モンゴル地方で活動する医師を養成し、地域医療の中心拠点としてモンゴル地域の人々の健康を守り、健康意識を普及し高めることを旨としていた〔Kt77,1942.9.13(2)〕 3年制で学費は不要、食費・寮費は学院が支給した。興安医学院と附属病院の敷地面積は3000㎡で、附属病院は内科、外科、眼科、婦人科を要する総合病院であった〔Kt123,1943.12.23(3)〕

興安医学院の講師の大多数は日本人であった。最初の計画で興安医学院に委任・推薦された5人は、院長1名、教授1名、助教授2名、属官1名であった〔Kt52,1942.3.14(3)〕 康德9年(1942)2月、興安医学院官制規定にもとづき、石渡忠太郎が興安南省医院長兼興安医学院長に就任した〔満洲国現勢：258〕 康德11年(1944)1月、興安医学院にモンゴル医学評議会が成立し、日本とモンゴルの医師およびラマ医で構成され、モンゴル地区の医学の改善を目的とした。同会は、モンゴル地区の医学検査を評議するとともに、医学の改善と向上に努めた〔Kt129,1944.2.23(4)〕

康德 10 年（1943）3 月，興安医学院は新入生を募集して開学した。同学院の学制，教学科目，入学資格等は，民生部が決定した〔Kt52,1942.3.14(3)〕。新入生の募集条件は非常に特徴的で，次のようである。17 歳から 23 歳までで健康，剛毅な成績優良なモンゴル青年，および同等の条件で特別聡明な者は 26 歳まで可。国民高等学校卒業あるいは高等中学卒業・高等師範学校で 1 年程度学んだもの。民生部大臣が設立した国民高等学校で課程を修めたもの。審査により国民高等学校の学力を具えていると認められたもの。

日本の法律に照らして専門学校に入る資格を有するモンゴル人。協和会長および各省旗県長の許可を得たもの〔Kt77,1942.9.13(2)〕。上述に合致するものは校長が入学を推薦し，そのほかの 5 項目の条件に合うものは父母の同意を得，校長の推薦状，省長および協和会長，あるいは東京の本会会長の推薦を受け，推薦状の審査を経て受験することになる。試験は，筆記試験，身体検査，面接からなり，筆記試験は数学（算数，代数，幾何），国語（モンゴル語と日本語），理科知識であった〔Kt77,1942.9.13(2)〕。

康德 9 年（1942）の「興安医学院康德 10 年度（一期）招生公告」規定によれば，康德 10 年（1943）一期生の募集は 30 名であった〔Kt77,1942.9.13(2)〕。康德 9 年（1942）11 月 25-27 日に選抜が行われ，各省旗からの応募者約 40 名のうち 20 名が合格した〔Kt87,1942.12.23(3)〕。興安医学院の募集条件，入学資格，及び学制は満洲国「新学制」高等院校章程に符合していた。興安医学院は，モンゴル地区唯一の医師養成のための高等院校である。学生はモンゴル系で 2 年の医学教育を受け，卒業者には現地医師の免許を与えてモンゴル地方の医業に従事させることになっていた〔満洲国史：1194〕。

おわりに

近代の満洲およびモンゴル地域には多種の伝染病が広がり，社会に大きな被害を及ぼしていた。このため，伝染病の予防は満洲国建国当初から重要

な課題とされた。満洲国は東モンゴルで伝染病防治の医療・衛生状態の改善を目的とし、近代医療の普及を図った。

従来、医療衛生事業は、民衆を懐柔し統治政策を定着させるのに都合の良い方策であるため、欧米諸列強も植民地政策の有効な手段として重視していた。当時、内モンゴル地域に住んでいたモンゴル人の中には近代医療制度が皆無で、衛生意識は低く、病気になるとラマ医の祈祷や治療を受けていた。また、清朝末から中華民国初期にかけて、漢人の入植の増加によってこの地域では、モンゴル人と漢人が混住する地域が増え、遊牧と定住が入り混じる状況となっていた。このことは同地のモンゴル人にとって大きな圧迫となっていた。日本はこのようなモンゴル人が直面していた窮状に着目し、モンゴルの人心を掌握して統治を正当化するために、モンゴル人の居住状況に適した医療衛生事業を展開した。その意味からすると、内モンゴル地域における医療衛生事業は、近代日本の影響が興安地域のモンゴル人社会に浸透する軌跡であったとすることができよう。

参考文献

- 『フフ・トグ (köketuy/青旗)』：1-178号 (1941-1945)、青旗報社、満洲国・新京 [Kt] と略記
- 『盛京時報』影印版
- 赤峰市衛生局編：『赤峰市医薬衛生資料汇编』
- 満洲通信株式会社 (1943)：『満洲国現勢』
- 満洲国史編纂刊行会 (1971)：『満洲国史』各論 (下)、財団法人満蒙同胞援護会、東京 [満洲国史] と略記
- 内蒙古自治区衛生誌編委会 (2007)：『内蒙古自治区誌』衛生誌、内蒙古科学技术出版社
- 広川佐保 (2005)：『蒙地奉上』汲古書院
- 鈴木仁麗 (2012)：『満洲国と内モンゴル：満蒙政策から興安省統治へ』明石書店
- 斯欽巴圖 (2013)：『東蒙古植民地社会与文化的變動』内蒙古大学博士論文
- 忒莫勒 (2003)：「満洲国興安省蒙民厚生会始末」、『蒙古史研究』第7輯
- 伊力娜 (2007)：「巡迴診療から見た『蒙疆』『興安蒙古』における日本の医療政策」桃山学院大学博士論文

執筆者・報告者

堤一昭（つつみ かずあき）

大阪大学・文学研究科・教授

周太平（ZHOU Taiping）

中国 内モンゴル大学・蒙古学院・教授 / 大阪大学・法学研究科・
外国人招へい研究員

吉田豊子（よしだ とよこ）

京都産業大学・外国語学部・准教授

内田孝（うちだ たかし）

滋賀県立大学・非常勤講師 / 大阪大学・日本語日本文化教育セン
ター・非常勤講師 / 島根県立大学・客員研究員

相原佳之（あいはら よしゆき）

公益財団法人東洋文庫・研究員 / 人間文化研究機構・地域研究推
進センター・研究員

娜仁格日勒（ナランゲレル）

中国 内モンゴル大学・外国語学院・准教授 / 国立民族学博物館・
外国人研究員

鉄鋼（てっこう）

大阪大学・法学研究科・博士前期課程

窪田新一（くぼた しんいち）

大正大学・文学部・准教授

小長谷有紀（こながや ゆき）

人間文化研究機構・理事

西村成雄（にしむら しげお）

孫文記念館（移情閣）・副館長

田中仁（たなか ひとし）

大阪大学・法学研究科・教授

あとがき

本書は、2014年12月20日に大阪大学で開催した研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性」(主催：NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点政治史資料研究会，共催：大阪大学未来研究イニシアティブ支援事業[21世紀課題群と中国]，科学研究費補助金・基盤研究(C)「東洋学学術資産としての石瀆文庫の基礎的研究」[研究代表者・堤一昭])の記録である。

大阪大学の貴重資料である石瀆文庫は、1940年代に満洲国で発行されたモンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』を世界で唯一、ほぼ完全な形で所蔵している。当時の文化・民族政策とメディアの関係のみならず、現在にいたる民族意識を知りうるものとして国際的に注目されている。このセミナーでは、資料の保存とデジタル化による公開・学術利用にむけて、中国の内モンゴル大学モンゴル学院、東洋文庫などとの連携、学術ネットワーク構築の可能性をめぐって、東洋学、内モンゴル近代史、東アジア国際関係、モンゴル近代文学など多方面から報告、さらに『フフ・トグ』紙の参観と東洋文庫におけるデジタル化事業についての東洋文庫の取り組みをふまえて、専門領域を超えたふくらみのある対話と討論が展開された。

今回のセミナーは、NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点政治史資料研究会としては、2014年3月開催のワークショップ「20世紀中国政治史の視角と方法」につづくものであり(OUFC ブックレット第5巻、2014年9月)、20世紀中国政治史像の再構築にあたって、史資料の保存・利用という立ち位置から内外の研究交流を展開する処方についていくつかの有意な処方・ヒントを得ることができた。

同時に、大阪大学石瀆文庫を前近代から近現代にいたる多言語の複合的学

術資産と捉え、その再定置にむけた歴史学・図書館学・博物館学から諸言語（外国語学）や知的財産権に関する法制度と法曹実務等の総合的アプローチが要請されている。このことは本セミナーを共催した大阪大学未来研究イニシアティブ「21世紀課題群と中国」と堤科研「東洋学学術資産としての石瀆文庫の基礎的研究」が共有する課題であり、今後、石瀆文庫の近現代東アジア研究における活用の可能性を探求することを通して、多言語の複合的学術資産活用モデルを展望したい。

（田中仁）

編集委員会

青野繁治（言語文化研究科）、片山剛（文学研究科）、木村自（人間文化研究機構）、許衛東（経済学研究科）、坂口一成（法学研究科）、思沁夫（グローバルコラボレーションセンター）、田口宏二郎（文学研究科）、竹内俊隆（国際公共政策研究科）、高田篤（法学研究科）、高橋慶吉（法学研究科）、瀧口剛（法学研究科）、田中仁（法学研究科）、堤一昭（文学研究科）、豊田岐聡（理学研究科）、福田州平（グローバルコラボレーションセンター）、宮原暁（グローバルコラボレーションセンター）、三好恵真子（人間科学研究科）、山田康博（国際公共政策研究科）、林初梅（言語文化研究科）

戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』の デジタル化と公開の可能性

東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録

2015年3月20日発行

編者 堤一昭・田中仁

印刷・製本 (株)アイジイ

OUFC ブックレット 第7巻

<http://www.law.osaka-u.ac.jp/~c-forum/booklet.htm>

ISSN 2187-6487（オンライン）

大阪大学中国文化フォーラム事務局（c-forum@law.osaka-u.ac.jp）

560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-6 大阪大学法学研究科内